
俺の千冬姉がこんなに可愛いはずが.....あった

pluet

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の千冬姉がこんなに可愛いはずが……あつた

【Nコード】

N3039U

【作者名】

pluet

【あらすじ】

千冬姉が露骨にブラコンだったら？ そんな電波を受信した結果がコレ。所謂性格改変モノ。なので、主人公は一夏（憑依、転生なし）。一応、一夏ラヴァーズの方々もヒロイン。ただしサブ。

間違えて削除してしまったため、再投稿。申し訳ありません……

登場人物設定（前書き）

とりあえず、登場した人達だけ詳細を記入。
まあ、随時追加して行く予定です。

8 / 27 東さんの項目を追加

登場人物設定

織斑 おりむら 一夏 いちか

専用機：白式 びやくしき

我等が主人公（怨敵）

ナチュラルボーンフラグメイカー

NBFM。息をするようにフラグを立てる男。準恋愛原子核。もげる。あと、本人は否定してるがシスコン。故に、千冬姉に彼氏がどうかなんて訊かない。

今作においては、千冬姉の手により鈍感力が強化されているようである。ヒロインズは涙目。千冬姉によるアプローチは姉弟間のスキシップだと思ってる。MOGE RO！でも一応、人並みに羞恥心はあるらしい。ネタに走る事が稀によくある。家事スキルは高い。

ちなみに、原作のようにずっと帰宅部で体が鈍つてるとかそういう事はなかったりする。良くも悪くも、第2回モンド・グロツソでの誘拐事件が転機となっている。その時に姉を護ろうと決意し、身体は鍛えていたようである。現在の一夏の回避能力の下地はここにあるとかないとか。

織斑 おりむら 千冬 ちふゆ

専用機：白騎士 暮桜 くれはくろ ????

我等がヒロイン。千冬会。

大魔王とか言われたりしてる。天元突破ブラコン。元 世界最強。たぶん、今でも最強。

公私はきちんと分けるが、公の時でも原作より一夏に甘い。一夏と二人になると、デレが加速する。止まらない、止められない。ちよくちよく、一夏のベッドにもぐりこんでいる。寝るときは下着だ

け。もしくは一夏のシャツだけを羽織って寝る。一夏もぐ。
学校で生徒に囲まれたり、騒がれたりするその疲れを一夏で癒して
るらしい。一夏もげる。

原作ヒロインズ+ の妨害やIS学園 新聞部を壊滅一歩手前まで
追い込んだりと何かと忙しい御方。ちなみに、その時回収された
写真は財布の中とか、いろんなところに入れて持ち歩いたりする。
(部屋には例の一夏のツーショットが飾られている)

両親の失踪、一夏の誘拐事件などがあってから一夏を失う事を恐
れている節がある。依存とまではいかないが、一夏への想いは一番
強い。姉弟であるうと関係ない。むしろそれがいい。

亡国企業は見敵必殺が信条。
サーチ・マインド・テストロイ

一夏獲得戦線においては他のヒロイン達のラスボス。相川清香な
ど多数の姉×弟の支持者がいる。

篠ノ之 篝 ノノノ

専用機：なし

サブヒロインに降格しました(笑)ファースト幼馴染。ファース
党。

空気じゃないよ！ 剣道娘。斬鉄とか余裕です。男女といじめら
れている所を一夏に助けてもらってから、一夏にホの字。一夏もげ
る。

天災の姉を持ち、一夏と離れ離れになってしまっていた。そのた
め、姉に対して思うところがある。でも、幼い頃に離れ離れになっ
た幼馴染との再会というおいしい状況に喜んでいたりもする。

最近の悩みは大きくなりすぎた母性の所為で肩がこる事。一夏も
げる。現在、セシリアと同盟を結成しているがほとんど機能してい
ない。たぶん、同盟国は徐々に増えていくことだろう。ソレで対抗
できるかどうかは……言わなくても分かるな？

セシリア・オルコット

専用機：ブルー・ティアーズ

サブヒロインに（ry。ちよろいさん。オルコツ党。

負けポ（戦って負けると惚れる）。俺の千冬姉（ry での空気さん。ごめんよ。

おいしい所をコレでもかと、千冬姉に奪われてしまふ不運の人。原作みたいにエロい娘になるかどうかは……千冬姉の妨害の程度による。

得意料理、ウメサンド（高級）

ファン
鳳 鈴音

専用機：甲龍_{シエンロン}

サブヒロイン（ry セカンド幼馴染。セカン党。

酢豚の娘。惚れた経緯はファーストとほぼ同じ。ツンツンデレデシ。

大事なところで噛んじゃう。一夏誘拐事件の後で参ってるところを慰めるていたという。サブの中では一番ヒロインしてるんじゃないかなるかろうか、見えないところでw

シャルロット・デュノア

専用機：ラファール・リヴァイヴ・カスタムE1

サブヒロイ（ry 僕っ娘。シャルロッツ党。

男装してました。こんなに可愛い子が男なわけがない。来日、2日ではれました。でも、いろいろおいしいシーンが軒並みカットされる不憫な子。こんなにシャルの扱いが酷い小説も珍しいと思う。

ラウラ・ボーデリツヒ：サブヒロ（ry

更識さらしき 楯無たてなし・サブヒ（ry）

更識さらしき 簪かんざし

専用機：打鉄式（未完成）

サブ（ry） かんざ新党。メガネツ娘。かんちゃん。貧ny##
この描写は削除されました##

できるお姉ちゃんを持ったネガティブ思考なシスコン。きつとなんだかんだ言いつつ、お姉ちゃんが大好きに違いない。かんちゃんができないわけじゃない…と言うか、かんちゃんはできる娘だよ。さすがにキヤノンボール・ファストまで出番なしは可愛そうなので原作よりも早い段階で出番となった。

あと、勧善懲悪系のアニメ、特撮とかが好物。

山田やまだ 真耶まや

専用機：なし

ヒロインですらない。やまや。まやまや。

妄想力B+。千冬姉曰く『天然駄肉メガネ』。シリアスな場面では有能なところが見られる。ファンが増えるといいね！

一夏の事を狙っているというよりは、好き勝手妄想するのが楽しいようだ。残念な子だと思った貴方…正解です。貰ってあげてください。

篠ノ之 束ののすたはね

移動型ラボ：我輩名前はまだないは猫である

サブヒロインになるといいね！ 束さん。ホワイトラビツ党。

非常識なシスコン。大天災なウサギさん。ちえりおー！ 妹への愛は鼻から出る。真っ赤です。

ISの開発者のな人。詳しい事は不明。織斑姉弟と篝をこよなく愛する御方。未婚だが、くーちゃんなる娘がいるっぽい（7巻話）。裏でこそこそ（？）暗躍してるらしい。デユノア社 社長エ……。やる事成す事「東さんだから」で説明がつく。便利だね。

のほけ
布仏 本音

サブヒロイン……にしてもいいですか？ のほほんさん。新党のほほん。

癒し。あの袖のだぼだぼ感がたまらない。着ぐるみ。ねむねむ。

こたんだ
五反田 蘭

専用機：なし

サブヒロイン……で、いいのか？ 妹党

特技は早着替え。登場したにもかかわらず、未だ一夏に会えていないという不遇の娘。これは……ゴルゴm……げふん、弾の仕業だっ！ 蘭可愛すぎる、妹か。

こたんだ
五反田 弾

一夏の数少ない男友達。シスコン。現在、五反田食堂の跡継ぎとなるべく修行中（皿洗い）

第1話 私のモノだ(前書き)

千冬姉を露骨なブラコンにしてみた。その結果がこれ。

間違って消してしまったため、再投稿です……

第1話 私のモノだ

ISと言う物がある。

簡単に言えば、人が纏うことで信じられない程の力を発揮するパワード・スーツだ。

その力は、それこそたった一機で戦況を覆してしまえるほどである。

本来、宇宙での活動を目的とした飛行パワード・スーツとして開発されたもの…だったはずなんだけど、何がどうなったのか。今となっては世界最強の兵器にして、女性にしか使用できないという点から、現在の女尊男卑社会を造り出した原因になっている。

まあ、その“女性にしか使用できない”ってのは、つい最近否定されたんだけどな。

他でもない織斑おりむら一夏いちかこと、俺という例外によって。

アレは今年の3月の始め。

当時、中学三年で受験戦争真っ只中だった俺は、女手一つで俺を育ててくれている姉に、これ以上負担をかけまいと学費が安く、就職率の高い藍越学園の入試に来ていた。

ただど会場で迷子になってしまい、片っ端から部屋を空けていたら、いつの間にかIS学園の試験会場に迷い込んでISを起動させてしまったのであった。

IS学園と藍越学園……似てるよな？ えっ、そうでもない？

うん、俺もそう思う。

まあ、そこからは、俺は満足に事態を把握することすら出来ず、あれよあれよと言う間にIS学園に入学する事になったのであった。世界で初めてISを起動させた男ってことで、何日も研究所に缶詰にされたり、やっと家に帰れたと思ったら、四六時中 黒服の男達に囲まれて過ごす事になったこの約1ヶ月はもう二度と体験したくない。プライベート？ なにそれ、美味しいのか？

「うん、思うに俺はISとは相性が悪いんじゃないか？

いつぞやも、その所為で誘拐されて千冬姉ちふゆねえに迷惑掛けちゃったし

……」

「あ、あの、織斑君？ 織斑一夏くん？ 聞こえてますかあ

？」

俺のクラスの副担任の山田やまだ まや 真耶先生が涙目になって、俺に尋ねてくる。

どうやら、現実逃避もここいらで限界のようだ。

いや、仕方ないじゃないか。ISは女性にしか起動する事はできない……俺を除いては。

つまりは、この学園の生徒はみんな女の子。

悪友の五反田ごたんだ だん 弾なら「それなんてエロゲだよおお！！？」と
言っつて叫び出すレベルだ。

実際、叫びながら俺に殴りかかってきたわけだが。（無論返り打ちにした）

とと、涙目の山田先生をもっと見てたい気もするけど、そろそろ窓側からのファースト幼馴染の視線が痛いから自己紹介をする事にしよう。

「あ、はい、自己紹介ですよ。織斑一夏です。なんでかわからないけど、唯一の男のIS操縦者になりました。よろしく願います」

我ながらなんの捻りもない自己紹介だな。

まあ、自己紹介を凝ってもしょうがないんだけど。

などと、考えながら席に着こうと思ったら、何故か俺のよく知ってる人の声が聞こえてきた。

「ちなみに私の弟だ。故に色目なんぞ使ったらただじゃおかんぞ、小娘ども。コレは私のだ」

『はい？』

がらがらと教室のドアを開けて入ってきた人物のセリフによって、クラスの皆の頭に疑問符が浮上する。

そう、その人物こそ世界で最初にISを起動させた女性であり、飛来する2000発ものミサイルをばったばったと刀一本で切り伏せた世界最強のIS操縦者。そして、俺の（自慢の）姉 千冬姉こと織斑^{おじむら}千冬^{ちふゆ}である。……あれ？ 今何か地の文に余計な文字が追加されたような気が……？

山田先生を含めた皆が言葉を失っている中、どこで働いてるか教えてくれなかったけど、ここで働いてたんだなあ……と、俺は本日2回目の現実逃避に突入していた。

そんな千冬姉の爆弾発言により、クラス中が呆然としてる中、いち早く意識を取り戻した俺のファースト幼馴染こと篠ノ之^{のぶ}篁^{はぎ}が声を上げた。

「な、なな、何を言ってるんですかッ！ 千冬さんッ！！」

「コラ、篠ノ之。ここは学校だ、織斑先生と呼べ」

スパーンッ！！

箒の頭に千冬姉の持っていた出席簿が直撃し、小気味いい音を立てる。

「アレは痛い。というか、叩くのが早すぎて全く見えなかったんだけど。」

「ぐ、ぬ、お、織斑先生！ それよりも、さっきの発言について説明を求めますッ！！」

「あ、あのー、私も聞きたいです……」

注意にめげることなく、箒は再度説明を求め、それに山田先生も追随する。

「まあ、確かに俺も説明を求めたい。仮にも弟をコレ扱いとはひどイぞ。」

クラスの皆も同じことを思ってるのか、千冬姉達の様子をじっと窺っている。

「ん？ なんだ理解できなかったか？ そこにいる、織斑一夏は、私のだ」

「……………」
「？？」

そして、何故か再びクラスに静寂が満ちた。

「いや、山田先生だけは両手を頬に当てて、いやんいやんと頭を振っていたけど。」

大丈夫か、この先生。

「では、自己紹介を続ける」

そんなクラスの様子を一切気にすることなく、千冬姉は自己紹介を再開させる。

それにしても、なんでクラスの皆はあんなに驚いてたんだろうな。俺が千冬姉の“弟”だったのは、さっき紹介したんだし今更だろうに。

別に驚くことでも何でもないのになーとか考えていたら、隣の席の娘が声をかけてきた。

「…織斑君って愛されてるんだねえ」

「？　そうか？」

「ふふふ、私は応援してるからね！　……近親相姦っていい響きね」

その娘は、そう言ってまた前を向いてしまった。

最後の方は聞き取れなかったけど、何を応援してくれるんだろうか。

まあ、こんな女の子ばかりの中にいる俺の事を応援してくれたんだろう。

何はともあれ。

斯くして、クラス中から生暖かい視線を感じつつ、俺のIS学園での高校生活はスタートしたのであった。

第1話 私のモノだ（後書き）

読了感謝です。

とりあえず一夏もげろ（挨拶）

そして露骨なブラコンアピール…いやらしい。

シャルやラウラも可愛いが、千冬姉が一番可愛いと思うのは俺だけだろうか。

では、誤字脱字などありましたらご報告をお願いします。

第2話 二人の時は

） 昼休み ）

「これで午前中の授業は終わりです。皆さんお昼ご飯を食べきてくださいな」

ようやく、終わった。

山田先生の授業の内容が何一つ分からない。

日本語で説明されているのに違う言語で説明されているみたいだった。やっぱ、入学前の参考書を古雑誌と一緒にまとめてゴミに出したのはマズかった。

具体的には俺の頭に千冬姉の一撃をお見舞いされる程度には。死滅した二万個の俺の脳細胞に黙祷を捧げる。

一応 板書はノートに写したけど、単語から分からないんだから意味がない。

ええい、辞書はないのか辞書は。

「あるわけないだろう、馬鹿者」

「む、なんだ簿か」

「簿か、じゃない。何だあの体たらくは…勉強はできる方だったろうが」

「そう言う次元じゃないだろ、コレは……お前等と違って事前知識つてのが皆無なんだぞ、俺は」

「入学準備を怠ったお前が悪い」

「……はい」

何も

言い返せない

事実だもの いちか

どっかの詩人みたいだな。

まあいい、俺は他の子よりもスタート地点が後ろだったただけだ。

ここから挽回すればいい。

亀でも兎に勝てるんだから、たゆまぬ努力こそが最大の近道なんだ！

「まあ、ここの生徒は兎みたいに怠ける奴はほとんど居ないだろうけどな」

身も蓋もない事を言う奴だ。

「……………はあ、説教ならメシの後にしてくれよ。箒も一緒に行くだろ？」

「あ、ああ、別に構わない……………」

「そっか。あ、でもその前に寄るところがあるから付き合ってくれよ」

「付きッ！？ こほんっ…いいぞ。それでどこ」ちよっとよろしくくて？」「……………」

箒の声を遮って後ろから聞こえた声に振り向くと、そこには“いかにも”と言った感じのお嬢様お嬢様(?)した女の子が立っていた。高貴オーラがこっちまで漂ってくる。

ていうか、金髪ロールお嬢様って実在したのな。1つ前の次元の話かと思ってたぞ。

「ああ、いいけど何の用だ？ 俺達これからメシなんだけど」
「まあ！？ 何ですのそのお返事は。この私わたくしから声をかけてもらえるだけでもその身に余る光栄だと言うのに、相応の態度と言うものがあ
るのではなくて？」

「……………」

「ご多分に漏れず…というか、テンプレ乙だな。
さっき列挙した特徴に高慢も追加しておこう。
そしてどう考えてもめんどくさい手合いだ…うん、スルーしよう。」

「あー、そうですねごめんなさい僕が間違っ
て居りましたー許してくださいお嬢様（棒）」

「……………ふう、これでいいか？」

「いいわけないでしょう！？ バカにしてるんですの！？」

「おお、どうしよう筈、バレてしまった」

「……………阿呆」

筈は頭に手を当てやれやれと呆れてしまっていた。
何故だ、俺の演技は完璧だったじゃないか。

「ちえ、もつと精進する事にするか。じゃあ、俺達はこれで」

「あ、はい。ご苦労様でした つてえ！？ お待ちなさい

！…！」

「おお、見たか筈、ノリツツコミだ。最近の外国人はお笑いに関しても造詣が深いらしいぞ」

「いいからお黙りなさいッ！ 話が進まないじゃないですか！！」

「ああ、それはすまん。で、君は誰なんだ？」

「な、な、なんですって！？ 貴方はイギリス代表候補生にして、入試主席であるこのセシリア・オルコットを知らないと言っ
んです

か!？」

いや、主席とか代表候補生とか知らないし。

日本の代表候補ならともかくイギリスの事まで把握しておけつてのは酷じゃないのか？

まあ、日本の代表候補生とやらも知らないんだけどな。

「……とりあえず何か凄そうな子だと言うのは分かった。ちなみに何組なんだ？ 俺は一組なんだけど」

「お・な・じ・クラスですわッ!! いったい、どこに目玉をお付けになっていやがるのかしらッ?!」

汚いのか丁寧なのか、よく分からん言葉遣いだな。

そんな事を思っていると、隣の幕が訊いてきた。

「一夏……お前、自己紹介を聞いてなかったのか？」

「え、いや、あの時は千冬姉の登場で混乱しててな。その後も授業とかのことでいっぱいだったし……」

「……まあ、アレは仕方がなかったかもしれないが」

「だよな、正直クラスの人の名前なんてお前ぐらいしか分からないぞ」

「……喜んでいいのか、そこは」

「~~~~ッ!! こつちの話聞きな」廊下で何を騒いどるんだ、お前等は「あうっ!？」

パシントと、そろそろ聞いただけで、PTSDを発症しそうな音が廊下に響く。

千冬姉の登場だ。俺が行く前に用件の方がこちらに来てしまった。

「はあ、お前が遅いからこちらから来る羽目になった」

「あ、ごめん…はい、弁当。今朝電話で言ってた千冬姉の分つたのはこういうことだったんだな」

「ああ、今日は入学準備で山田先生に泣き付かれて帰れなかったからな…あの天然駄肉メガネめ……」

飯にも同僚に向かつてヒドイ言い様だ。

弁当なんかで大げさだなあ……

「別に学食があるんだからそこで食べれば……」

「いつも家に帰れないんだから昼ぐらいはお前の料理が食べたい

…そう思うのはいけないか？」

「うっ……作り手冥利に尽きます」

「よろしい。それにしても、篠ノ之はともかくオルコットもか…
…貴様等、今朝言つた事は忘れるなよ」

そう言つて篝達に一睨みしてから、颯爽と去って行く千冬姉。

なんとというか、クラス皆の千冬姉への態度が微妙に納得できてしまう。

我が姉ながらカツコ良過ぎだろう。

まあ、とりあえずこれで寄り道する必要はなくなつたな。

「よし、俺の用は済んだし学食行こうぜ篝」

「え、あ、ああ……だが、いいのかアレは？」

篝の視線の先には、さっきの千冬姉の一撃から未だにリカバリーできていないセシリアが頭を抱えたまま蹲っていた。

あの痛みと衝撃は経験者にしか分からない。

「いいんじゃないか？ しばらくじっとしてれば痛みは引くだろうな、経験者？」

「お前ほどじゃないがな」

なんて軽口を叩きながら、学食に向かう俺達。

そつえば、さっきのセシリアは結局何の用だったんだろうか？

・ ・ ・ ・

） 放課後 ）

昼休みにした決意に早くも挫けそうになった。

やっぱり、意気込みだけじゃ乗り切れない局面もあるってことだな。

いつの間にかクラス代表に仕立て上げられるし、セシリアと決闘する事になるし……まあ、売り言葉に買い言葉で喧嘩を買ってしまった俺も俺なただけ。

授業にすらついていけないのに、実践でどうにかなるのか？

あの時の俺にもう少し冷静になれと言ってやりたい。……結果は変わらない気もするが。

知識だけでも何とかしようと思うんだけど、参考書の再発行はいつ頃になるんだろう……というか、普通何部か余らないか？

こうなったら篝辺りにでも借りて勉強するかなあ……多少はマシ

かもしれん。

などと、机に座って頭を抱えていると山田先生に声をかけられた。

「あの〜、織斑君？ ちょっといいかな？」

「あ、山田先生にちふ……織斑先生」

「……まあ、見逃してやろう」

危ねえ……また叩かれるところだった。

「それでどうしたんです？」

「あのですね、織斑君のお部屋が決まったので知らせに来たんです」

「へ？ 部屋って寮のですか？ 部屋は全部埋まってるから1週間ぐらいは自宅通学になるって聞いてたんですけど」

「そうなんですけど、事情が事情ですから……相部屋にしても必ず寮に入れると政府の方から特命が来ちゃいまして……」

なんて特命だ。

無理矢理って……相部屋の子はどう考えても女の子じゃないか。男女七歳にして同衾せず、常識だろ。

いつたい日本政府の倫理観はどうなってやがる。

といつても、特命である以上は覆せないんだろうなあ……

「……分かりました。でも、荷物の方はどうするんです？ さすがに男でも、この身一つでって訳にも行かないんですけど」

「ああ、それなら」

「私自ら用意してやった。感謝しろよ」

「……へっ？ 今なんて？」

「私が、用意した」

じーざす……ッ!!

実の姉に部屋を物色されたと言うことですか!?

あ、いや、赤の他人にされても困るわけだが……

「安心しろ、お前の部屋の押入れの奥に隠してあった鍵付きの箱は開けてない」

「か、鍵付きって……ッ!! だ、ダメですよ! 織斑君ッ!

! そんな、ふ、不潔です!!」

「ちよっ、違っ!? 押入れの中にそんなものは置いてねえ!!」

……押入れには。

「ああ、確かに押入れにはなかった…なにせ机の引き出しの奥から見つけたのだから……」

「ち、千冬姉ッ!?!」

「織斑先生、だ(その反応だと当たりだな……あとで中身を検めるか)」

ばこっつと叩かれる。

千冬姉のせいじゃんか! 理不尽だ!!

さっきの千冬姉の発言のせいで、クラスに残ってた子達の視線とひそひそ話が全身に突き刺さる。

山田先生は顔を真っ赤にさせたまま「だ、ダメです…ッ……そんなの……!!」とか呟いている。何を想像してるんですか!??

「まあ、それは後で確認に行くとして、荷物の方は当面の着替えと携帯の充電器ぐらいでよかったな? 洗面用具等の足りないものは購買で買つといい」

「……了解です。それで、俺の部屋はどこなんです？」
「ああ、それは」

千冬姉の言う事を聞き逃しまいと、クラスの子達も聞き耳を立てている。

そして、聞いてしまう。

「私の部屋だ」

爆弾発言を。

「なっ!?!」

『なっ!?!』

『『なんだってー!?!』』

爆発したのはこちら側だったけど。

・
・
・
・

で、千冬姉に連れられて部屋に到着してしまった。

どつやら千冬姉は寮長だったらしく、職員寮ではなく学生寮の方に部屋があった。

つまり

「ねえ、織斑君つて千冬様の部屋に住む事になるのかしら……先生と生徒だけどいいのかな」

「でも二人は姉弟なんだし別にいいんじゃない？」

「あーん、せっかく織斑君の部屋に押しかけようとか考えてたのに……これじゃ無理じゃない」

「行けば？ もれなく死ねるけど」

「……遠慮しまーす」

後ろの方で女の子がひそひそと……ッ！！
それなのに、ウチの姉上様ときたら

「どうした？ 入らないのか？」

「……」

我関せずと完全に無視している。

その強靭な精神を見習いたい。無理だろうけど。

まあ、ここで立ち止まったまま衆人の注目を浴び続けるのは勘弁
願いたい。

さっさと部屋に入ろう。

「し、失礼しまーす」

「一夏……今日からお前の部屋でもあるんだ、そんなに仰々しく
する必要はないぞ」

「いや、でも織斑先生……」

「馬鹿者」

ぱしつ と軽く頭をはたかれる。
はて？ 何も間違っではないハズだけど？
制裁にしても威力は低かったし。

「ここからはプライベートな時間だ。二人の時は……」

「！ ああ、そうだな。分かったよ、千冬ね「お姉ちゃんと呼べ」って、はあッ!？」

「だから、二人の時は『お姉ちゃん』と呼べと言っている」

「お、おね、おねえちゃ……って、言えるかあ!! いだっ!？」

「姉に向かつてなんて言い草だ」

「殴ることないだろ!？」

「すまん、照れ隠しだ。……ああ、そうだとも、これは別に前の夜のおかずの中に姉ジャンルがなかった事に対する八当たりでは断じてない」

後半の方は聞こえなかつたけど、何が照れ隠しだよ。いつも通りの不敵な笑みを湛えた顔なのに……

「ま、姉弟のスキンシップはここまでにして置くか。さて、一夏?」

「な、なんだよ千冬姉……」

「今日の授業一切ついていけてなかつたな？」

「うぐっ!？ はい…その通りです」

素直に認める。事実だし。

「どうしてお前はある一点を除いてそつなくこなすというのに、こじぞといつときにミスをするのか……」

「申し訳ございません……」

ちくちくと嫌味を言われ続ける。

うう、千冬姉だって私生活はだらしないじゃんか……この部屋だって着てた物も脱ぎっぱなしで散らかし放題だし……やっぱここでも片付けるのって俺がやらなきゃいけないのか？

なんて失礼な事を考えていたら、千冬姉に睨まれた。叩かれる前にすぐに思考を放棄する。

「まあ、何が言いたいかと言うとだ。お前に合わせてクラスの授業を遅らすわけにはいかない」

「そりゃそうだ」

「だから、私が毎日個人授業をしてやる」

「えっ!?! いいの「そんなのダメですッ!?!」って、箒!?!」

「ほう、盗み聞きしてるとは思っていたが…まさか、突入してくるとは…少々見誤っていたようだな、篠ノ之箒という女を……」

いやいや、千冬姉はどうしてそんなに冷静なんだよ。

さつき鍵かけてたじゃん。器物破損じゃん。

そして、箒は木刀を降ろせ、話はそれからだ。

「ISに関しては私が一夏に教えます! だいたい、先生が特定の生徒に贖肩をしてはいけません!」

「ふんっ、それがどうした。これは私の親友の言葉で、唯一賛同する言葉だが『有史以来、人は平等であった事など一度もない』つまりはそういうことだ。だいたい、今はプライベートな時間だ…生徒だの教師だの関係ない」

「ぐぬぬっ! 一夏! お前から何とか言えッ!」

「え、あ、いや…俺はどうせなら千冬姉に教えてもらいたいんだけど……」

先生なんだから、生徒に教えてもらおうよりもいいハズだし。なんで千冬姉はそんなに勝ち誇った顔をしてるんだ?

「ふっ、分かったら負け犬はこの部屋から出ていくのだな」

「……一夏」

「お、おう」

「放課後は空けておけ……鍛えなおしてやる」

「へ？　なんで？　というか、放課後はお前は剣道部とか言ってた……」

「問答無用だ！　いいな、絶対空けて置けよ！！」

「フリだな」

「違います！！　それじゃあ、失礼しましたッ！！」

「ああ、そうだ篠ノ之」

「……なんですか？」

「そのドアの修理代は請求させてもらうからな」

「？　ドアって……あ……」

あ……って、お前自分で壊したこと忘れてたのかよ。

まあ、壊したと言うより斬ったんだけど。

というか、剣道の全国制覇すると木刀でドアを叩き斬れるレベルになるのか。

アイツが剣の類を持ってるときは、怒らせないようにしよう。

「う、あ……分かりました……」

「ならばいい。では、そうそうに立ち去るといい」

千冬姉がそう言つと、箒は何故かこちらをキッと睨んで部屋から出て行った。

……俺は悪くないと思うんだが。

「さて、うるさいのもいなくなったことだ。さっそく勉強を教え
てやるっ」

「了解……っつと、その前に一つ訊きたいんだけどいいか？」

「ん、なんだ？」

「この部屋ベッドが一つしかないんだけど……俺のは？」

寮長の部屋だから、普通の個室よりは広いけどさすがにベッドまでは置いてない。

後から簡易ベッドみたいなのを運び込むだろうか？

「何をバカな事を……一つしかないならそこで寝ればいいだろう」

「……その場合、千冬姉はどこで寝るんでしょうか？」

「ベッドだが？」

「一緒に寝るのかよッ!？」

「当たり前だ。何をそんなに恥ずかしがる事がある。昔はよく一緒の布団で寝たじゃないか……」

ああ、なんなら一緒に風呂でも入るか？ 生憎お前の好きな大浴場には入れないが、ここの寮長部屋の風呂ならば、多少手狭だが入れない事はあるまい」

「いやいや！ 何言ってるんだよ千冬姉ッ!？ 別々に入ればいいだろう!？」

「ちっ、お前もくだらん倫理観に縛られたものだな」

倫理は大事だろ。超大事だろ。

人として守らなきゃならない一線だよ。

「まあいい、とりあえず勉強の方が先だ。ほら、さっさとノートを持って来い」

「わ、分かった。でも、絶対一緒に寝ないからな!」

「そんなに私と寝るのが嫌なのか……?」

「ちがっ、嫌とかじゃなくてな!？」

「冗談だ。いいから準備しろ」

うう、良い様に千冬姉に振り回されてる気がする……
自室ってもっと寛げる様なところじゃなかったっけ？

授業で使ったノートを鞆から引っ張り出しながら、そんな事を思う俺なのであった。

こうして俺のES学園での初日は幕を閉じた。

……ちゃんと、風呂と寝る場所は別々だったという事をここに明記して置く。

第2話 二人の時は（後書き）

読了感謝です。

一夏もげる（挨拶）

ということ、ちよろいさんの登場（おい
なんというか、弄られるために登場した感が半端ない。ごめんよ。

あと作中の「二人の時はお姉ちゃんと呼べ」（キリッ

実は、コレがやりたくてこの作品を書いた。文句は受け付けませんW

では、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

第3話 姉弟の朝と幼馴染との朝食

）朝）

ヴーッ と携帯が振動して朝だと告げている。

時間はAM・5:30。健全な学生として二度寝につきたいところだが、俺は毎朝 千冬姉の弁当を作る事を本人から厳命されているのである。よって、真に残念ではあるがこのぬくもりを放棄しなくてはならない。

ああ、でも手放しがたいぞ……このぬくさと柔らかさ。

そして手のひらからこぼれるぐらいの程よい大きさ、でもってこの弾力……あれ？

手に感じる明らかにベッドとは異なる感触に違和感を覚え、うっすらと目を開けてみる。

そして、そこには

「あ……んっ」

「……おっ」

千冬姉がいた。

ここは千冬姉の部屋でもあるから、千冬姉がいること自体は間違いない。

問題はなんで千冬姉が俺のベッドで寝てるかってことだ!!

昨日ちゃんと山田先生に頼んで簡易ベッドを調達してもらって、俺はそこで寝た。

千冬姉も隣のベッドに入ったはずだぞ?!
というか、千冬姉寝巻きはどうした!? なにゆえ下着姿!?

俺が混乱していると千冬姉が目を覚ました。

「……ふぁ…ん? なんだ、一夏…起きてたのか?」

「起きてたのか、じゃねーよ!? なんで俺のベッドで寝てるんだ!?!」

「そこに一夏がいたからだ」

「なんだよ、その「そこに山があるからだ(キリッ)」とか言う登山家みたいな言い訳は!?!」

「なんだこんな美人な姉に添い寝してもらって嬉しくなかったのか?」

「アレだけ好き勝手に触っておいて……」

「起きてたのかよ!?!」

「ほう、やはり触っていたか……タダでお触りは許さん」

千冬姉の誘導尋問に踊らされた俺にドスツと、どこピンのものは思えぬ音と共に素晴らしい衝撃が突き刺さるのであった。

勝手に潜り込んで来ておいて理不尽じゃね!?!

「というか、脳みそに直接衝撃がががッ!!」

「まあ、それで許してやろう。」

私は寮内の見回りがあるからここを離れるが、気安く生徒を招き入れるんじゃないぞ」

「了、解……」

それだけ言うと千冬姉は脱ぎ捨ててあったジャージを纏い、身だ

しなみを整える……かと思いきや、そこで何か思い付いたように「
ちらを見てきた。」

「なあ、一夏」

「ん、どうかした？」

「久しぶりに、アレをやってくれないか？」

アレって、何を……… ああ、そういうことか。

そういえば、ここんとこ冬姉が帰ってこなかったからしばらく
やってなかったな。

「……ダメか？」

「ダメじゃないよ。じゃあ先にシャワーでも浴びてきてくれよ」

「ああ、分かった」

・ ・ ・ ・

「……んっ、い、ちか…少し、強い……」

「あ、ごめん……痛かった？」

「いや、そこまでじゃない……ふふっ……」

「？ どうしたんだ？」

「ああ、なに、一夏もうまくなっただなと思ってな……最初なんて力加減が全くできてなくてあちこち痛かったんだが……」

「いつの話だよ……アレから何回やったって事もないのに……」

「そうだな……。久しぶりだが、やはり心地いいものだな……」

「そっか……それじゃ、仕上げといきますか」

「ん、頼んだ」

そして、俺は手に持ったソレを上から下へとスライドさせる。

少し先が当たってしまい、千冬姉が身動みじろぐ。千冬姉の艶のある髪が靡いて、シャンプーのいい香りと…千冬姉自身のなんとなく甘いような香りが鼻をくすぐった。

最後に丁寧に手櫛で整えて、髪を結う。

これでよし。

「千冬姉、できたぞ」

「ああ、すまんな。では、今度こそ行ってくる」

「ん、いつてらっしゃい……っていうのも何か変だな。またすぐ会
うんだし……」

「ふふ、そうだな」

そう微笑んでから、千冬姉は部屋から出ていった。

いやー、久しぶりだったからうまくできるか心配だったけど、どうにかなるもんだな。

千冬姉がISの操縦者になる前…つまり、今みたいに忙しくなる前はこうやって俺が髪を梳かしていた。

これが好評で東さんや篤にもねだられたんだよなあ……。懐かしい。

なんて遠い日の事に思いを馳せつつ、顔を洗って制服に袖を通す。今日の授業の用意をし終えてから、弁当の準備に取りかかる。現在6時……丁度ご飯が炊き上がったところだ。

さて、今日は何を作ろうか…オーソドックスに玉子焼きと……頭の中でメニューを考えながら備え付けの冷蔵庫を開け中身を確認したところ。

ビール、つまみ、ビール、ミネラルウォーター、卵（消費期限切れ）、ビール……終わり。

………？

食材と呼べるモノがない……だと？

……まあ、物臭の千冬姉に期待した俺が間違っていた。うん、
そうに違いない。

IS学園の購買にも一応食材を売ってるけど、さすがにこの時間
帯に開いてるハズもない。

仕方ない、今日の昼は学食で食べるように言っておくか……。

しかし、となると時間が空いちまったなあ。

このまま二度寝でもするか……？ いや、千冬姉が起きてしまっ
てるんだからそんな事が許されるわけがない。見つかったら、文字
通り“叩き”起こされるに決まってる。

……大人しく勉強しておこう。主に俺の脳細胞達のために。

そういえば、結局なんで千冬姉が俺のベッドにもぐり込んでたか
分からなかったなあ。

後で筭にでも訊いてみるか……

• • • •

朝食の時間になって学食に向かっていると、廊下でばったりと筭と会った。

何かひどく狼狽してたが、自称 空気を読むのに定評のある俺は華麗にスルーして一緒に学食に向かった。

んで、日替わり和定食を持って席についたところで、さっきの千冬姉の行動について訊いてみる事にした。

「 ってことなんだ……なんで分かるか？」

「~~~~~ツ!!! この変態がツ!!!」

「ぶべっ!!!」

問答無用に竹刀でぶん殴られた。

どうやら、俺は相談相手を間違えたらしい。

というかその竹刀をどっから出したんだよ、お前は。

「先ほどまで朝練だったのだ」

「いやいや、理由になってねーだろ」

「そんなことはどうでもいいっ！」

お前は分かっているのか、お前と織斑先生は姉弟なのだぞ!!! さらに教師と生徒でもあるのだぞ!!!」

「? 何を今更……」

「そんなお前等が一緒のふ、布団で寝るなど」ばっ、声がか
い!!!」~~~~~ツ!?!」

余計な事を口走ろうとした筭の口を慌てて塞ぐが、時既に遅し。

Q・ここは？

A・学生食堂。

Q・今は？

A・朝食の時間。

Q・そんなときに大声を出せば？

A・皆に聞こえる。

「やっぱり千冬様と織斑君ってそういう関係なのね……………」

「ああ、私の千冬さまがあ……………」

「あなたのじゃないでしょ！」

「腐腐腐、姉弟愛。近親相姦。生徒と教師。禁断の……………」

こうなるのである。

……………また俺を見ながらの内緒話が急増するんだろうなあ。

どう考えても、高校デビューを失敗した気がするぜ。

「んむ……………っ！！（い、一夏が、顔が近い！匂いが！息が

耳に……………！）」

「おっ、スマン。塞ぎっぱなしだった」

「ば、ば、馬鹿者お……………わ、私を（悶え）殺す気かっ」

「や、だからごめんって。大丈夫か？顔が真っ赤だぞ？」

「そ、それは一夏が……………」

真っ赤な顔のまま、うつむいて何かごによごによと呟いている筈。よっぽど苦しかったらしい。反省。

筈もようやく息を整え終えて、朝食を再開したところで

「ね、ねえ織斑君っ。ここいいかなっ？」

「おりむー、一緒にご飯食べよう」

「ああ、大丈夫。空いてるぞ」

女の子が三人声をかけてきた。

確かみんな同じクラス……のハズ。

のほほんの特徴的な のほとけほんね のほほんさん（本名を布仏本音というらしい。名は体を表すとは正にこの事）以外の子は正直自信がない。というか、のほほんさんのその着ぐるみは何だ。

あ、でも一人は俺の隣の席の子だ。名前は……なんだっただけか。セシリアの事があってから、一応覚えようと努力はしてるんだが、休み時間の度に一年生だけじゃなくて、上級生からも人が会いに来るせいで誰が誰なんだかさっぱりだ。

「うわあ、織斑君って朝すごく食べるんだあ……」

「おりむーは男の子だねー」

「夜はあんまり食べないようにしてるからな。朝はこれぐらい食べないときついんだよ」

「……大丈夫だったの、夜の方は（性的な意味で）」

「？ ああ、慣れればたいした事はないさ」

何か含みがあるような言い方だな……まあ、いいか。

「それよか、女子の方こそ朝それだけで足りるのか？」

「えっ？ あ、これはそのお……ね？」

「んふふ」 さとさとはねー、おりむーの前だから見栄を張っちゃって「本音ちゃーんっ?!」むぐむぐ

のほほんさんが最後まで言い切る前に、さとささんが慌てて口

を塞いでいる。

別に見栄なんて張る必要なんてないと思うんだけどなあ……

食べなくて、授業中に腹が鳴ったらそれこそ恥ずかしいだろうに。ま、男の俺とは考え方が違うのかもな。

「ちなみに私は小食なのさ」

「ふーん、のほほんさんは？」

「私？ 私はほら、お菓子とかよく食べるしー」

そう言っつて、嬉しそうに着ぐるみからポツキーを取り出すのほほんさん。

ていうか、耳がピコピコ動いてるんだけど!?

のほほんさんの動く耳に釘付けになっていると、さっきから黙っていた筈が声をかけてきた。

「……一夏」

「ん？ どした 筈？」

「ごほんっ、どうやら少し量が多かったみたいだ……食べてくれないか？」

「え、さっきはちよっと量が少ないとかぼやいて「ないっ!」! わ、分かったよ……」

「ご飯が半分ほど残った茶碗を突き出され、仕方なく受け取る。なんで対抗意識燃やしてるんだ、コイツは。」

そんな筈を見て、さとさとさんは何故か顔を真っ赤にしている。

「あうあう、篠ノ之さん大胆だよ」

「……どこが？」

「そんな、口移しでなんて……」

その言葉を聞くや否や、隣ののほほんさん達もすごい勢いで飯を食べ始める。

あはは、走るのが嫌なのは分かるけど、ちゃんと噛んで食べないと身体によくないぞー

「そして喜べ、織斑、篠ノ之。お前等は遅刻しなくてもきっちり10周走らせてやるうじゃないか。

さつさと着替えてグラウンドに来るんだな、他の者が来るまでに終わらなければ授業後に回してやるつ」

「そんなんっ!?!」

「マジかよッ!?!」

「どうした? もう5周追加してほしいのか?」

『……喜んでやらせていただきます』

周りから同情の視線が惜しみなく注がれる中、俺達は急いで朝食を食べるのであった。

ちなみにこのIS学園のグラウンド、一周当たり約5キロ。

無論、その日の休み時間と放課後は完全に潰れたのであった。

ランナーズハイの境地に初めて至った、そんな2日目。

〽 今日の篠ノ之さん 〽

ぼふっ

寮のベッドに疲れた身体を預ける。

「……………疲れた」

まさか、本当に十周走らされるとは……………。放課後は一夏を鍛え直すはずだったのに……………！

くっ、コレも全部一夏のせいだ！一夏が私にあ、あんな事を…

……………えへへ（思い出し照れ）

そ、それに考えようによっては今日一日一夏とずっと一緒に居たわけで……………ん、なんだ問題ないではないか。

「篠ノ之さん、私先にシャワー借りるよー？」

「ふふふ、明日も一夏と一緒に……………」

「……………なんで一人でやついてるのかしら、この娘」

ふと気が付くと、同室になった鷹月さんに不審そうな目で見られていた。

はて？

第3話 姉弟の朝と幼馴染との朝食（後書き）

読了感謝です。

一夏もげ……いや、むしろ代われ！（挨拶）

……エロくないヨ？ ただ髪を梳いてただけですもの。

あと、サブヒロイン達の救済措置：今日の　さんシリーズを開始

以下、一応のほんさんのお友達のプロフィールを適当に。

隣の席の子：相川清香　ハンドボール部　趣味：スポーツ観戦　ジ

ヨギング　好きなもの：背徳感に溢れる恋愛模様。　特徴：二つの

お下げ。茶色がかった髪の毛。

さとさとさん：岸里里美　新聞部　趣味：写真、漫画、小説　好き

なもの：甘いもの。小動物。　黒髪ロング　少々妄想癖あり。

こんな感じ。別に覚えなくても問題ないです。

ただ7巻の新キャラ出す事考えたら設定があつた方がやりやすいかなと思っただけ。

では、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

第4話 クラス代表決定戦

どうやら、俺はまだこのIS学園でIS操縦者としてやっていくのに、覚悟ってモノが足りていなかったようだ。

今更だが、ISってのは女性限定で纏う事のできる兵器である。そのISの特性上、展開した時にその動きを阻害するような服装であってはならない。

よって、通常ISを展開する場合、その操縦者はISスーツなる自身の動きを制限しないアンダーウェアを着ている。一応、動きを阻害しないってだけじゃなく、ISが展開しているシールドバリアが消えた時に攻撃を受ける事を想定して、ある程度防弾や防刃仕様が施されているが、俺が言いたいのはそんな事じゃない。

あー、つまり、その、何だ……。ISスーツってのは一口に言うてしまえば、スクミ……。いやいや、甚だ露出が多いのだ。ここまで言えば、俺が何が言いたいか分かるだろ？

「どうした、一夏？ そんな明後日の方を向いていて、私の訓練が受けれると思ってるのか？」

「……………」

目のやり場に困る……ッ！！

目の前には訓練用IS『打鉄^{うちがね}』を纏った千冬姉が悠然と立っている。

一応、資料とか見てて分かっただけはいたんだが……。あのメリハリのある身体にこの装備は卑怯だろ……。実の姉弟ではあっても、俺はKE

NZENな男だぞ……。

というか、現役時代この格好でテレビで放映されたのか……束さんに頼んでデータを全部消去してもらえないだろうか。あ、でも何か既にやってそうだな、あの千冬姉大好きだし。ほとんどLIKEじゃなくてLOVEの方だし。

とまあ、どうでも言い事を考えつつ、果たして、どうしてこんな状況になったのかを考える。

考えるまでもなく、セシリアとの戦いに備えての話だったな、うん。

つまり、こんな事になったのも俺が原因と……。

入学してから今までの授業は主にISについての基本的な座学の習熟や、一般教養の科目を中心にやってきていた。そのため、この学園のメインであるISの訓練機を使った実習するのはもう暫く先の事になるはずだった……が、しかし。

5日後に迫った代表候補生であるセシリアとのクラス代表決定戦を前に、またもISを機動すらできない俺が戦うってのは無謀すぎる。千冬姉が特別に放課後の時間を使って教えてくれる事になったのだ。

まあその際、箒に「私との約束はどうしたのだ!!」と木刀を持ち出して来たため、逃げ回るのは羽目になったのは忘れない。

一方の対戦相手であるセシリアは既にIS稼働時間が300時間オーバーなので、「まあ、そのくらいハンデにもなりませんわ」とかなんとかであっさり認めてくれた。男だなんだとバカにしてきたが、案外いい奴なのかもしれない。

などと、現実逃避を兼ねて現状の整理をしていた俺の顔は、千冬

姉の手によってぐいっとな強引に視線を戻された。

「いい加減こちらを向け」

「……うう、分かったよ」

「まあ、そうやって意識してくれるのはいいが、今から行つのは訓練だ。そうやって呆けたまましていると……」

「……いると?」

「……うだ」

ズバッ!! と打鉄の主武装である近接ブレードがちょうど俺の首の高さで振るわれる。

……あれ? 訓練と称じた処刑か何かだったのか、コレ?

「まあ、とにかく打鉄を展開しろ。話はそれからだ」

「ん、分かった」

とりあえず、目の前に持つてきてある打鉄に身を預け、試験会場でやったように展開を試みる。

千冬姉や山田先生の授業を受けて、ある程度理解が追いつくようになった今でもコレが装着される仕組みが分からん。なんで勝手に装着されるんだ?

「よし、できた」

「今はこれでいいが、ISの装着は1秒を切る速さで行えるようになれ。まあ、それはお前の専用機が届いてからの方がいいかもしれないが……」

「え? 専用機って……」

「ああ、まだ言ってなかったか。お前がIS操縦者になったときから束に頼んでいてな、本番までには届けるように言っただけはある」

「何かすごく優遇されてる気がするのはいか?」

まあ、ド素人が代表候補生と戦うんだからこれぐらいはあつて然るべき事なのかも知れないけどさ。

と思つたけど、それだけではなく、俺が世界で唯一の男のIS操縦者だつて事も関係してるみたいだ。所謂きな臭い政治がらみの話つてわけだ。

ま、貰える物は貰つておく主義だからいいけどな。

ともかく、こうして手伝つてくれる千冬姉や箒のためにも無様な結果に終わらせるわけにはいかないよな。

やるからには勝つ。

「では、訓練を開始する。初めに言つておくが、お前の勝率は限りなく低い」

「へっ？」

「仮にもオルコットは代表候補生だ。お前のような素人の攻撃はまず当たらないだろう。」

それにいつ届くか分からんがアイツの事だ、面白そうだからという理由で本番当日に届けるだろう。

つまり、乗りなれない専用機にぶっつけ本番で臨まなくてはならない」

「……………」

確かに、束さんならやりかねん。

「つまり、お前に残された勝機は相手に生じた隙や焦りにつけ込むしかないだろう。」

そのためにはまず回避だ。可能な限り避け続ける」

「ん、ド素人の俺に避けられて焦れたところを狙えつて事か」

「そういうことだ。」

まあ、後は最低限のダメージを抑えて油断した所を叩くと言うのもあるが、それはダメだ」

「？ 確かに誰も好き好んでボコボコにされたかないけど、なんでだ？」

「……………心配するだろうが」

「うん？ ごめん、聞こえなかった。もう一回……………痛っ!？」

「話は終わりだ、私が攻撃してやるからきりきり避ける」

そう言っつて斬りかかってくる千冬姉……………つて、おわあ!？

それ絶対素人相手の太刀筋じゃないだろおおおおッ!？

その日から、決戦当日まで訓練と言う名の私刑が続くのだった。

・ ・ ・ ・

） 当日 ）

ここ数日の記憶が虫食い状態だ。

授業の内容とかは覚えてるんだけど、放課後以降の記憶が曖昧だ。気がついたらベッドの上とか普通にあった。

朝、箸と飯を食うときとかすぐ可哀想な目で見られてたから、なんでか訊いてみても絶対目を逸らすんだよなあ。そういえば、セシリアも何故か気の毒そうな顔してたっけか……

ま、そんな事はともかく。俺は第三アリーナのピットにいるわけなんだが、千冬姉が言った俺の専用機が届かない……どうしよう。

「なあ、箸……」

「ああ、どうした一夏……」

「正直、専用機よりも打鉄でやった方がいいような気がしてきたんだが」

「……せつかく千冬さんが用意してくれたものを無碍に扱って酷い事になりそうだがな」

「……………」

確かに。IS持ち出して来て俺の体をブレードで、ずんばらりんとかありそうだ。

といっても、このアリーナの使用時間ってのも限られてるからのもんびりしてるわけにもいかないんだよな、セシリアも既に待ってるし……

横に映し出されてるモニターの映像を見ると、青を基調とした機体を纏ったセシリアが宙を浮いていた。持ってる武器から見て、完全に遠距離特化型みたいだな。

俺、千冬姉からは主に近接戦闘における回避しかやってなかった気がするんだけど……

今までの苦労はなんだったんだと思ってたら、山田先生が息を切

らせながら駆け込んできた。

「織斑君、織斑君、織斑君ッ!!」

「三回言わなくても聞こえてますよ、山田先生」

「織斑君の専用ISが到着しましたっ」

山田先生がそう言うや否や、ガコンと無骨な音を立て隣の搬入口が開き出す。

そして、その白い機体が俺の眼前に現れた。

「これが…俺の専用機……」

「はいっ、これが織斑君専用IS『白式』ですよ!」

「見事な機体だと素直に感心するがどこもおかしくはないな……」

「はい?」

「いや、なんでもないです」

「バカな事を言つたらんでさっさと装着しろ。時間は限られてい
るんだからな」

「了解です」

とりあえず、いつの間にか隣まで来ていた千冬姉の言われるがまま、ISを装着する。

まあ、装着と言っても俺が何もしなくとも勝手に動いて最適化するんだけど。

なんて事を考えながら待っていると、目の前に白式とセシリアのIS『ブルー・ティアーズ』のデータが流れ始める。

つか、何だこの機体。武装が近接ブレード一本って……零式に
だってハイパープラスターとかアーマーブレイカーとかあるのに…
…劣化ダゼンガーかよ。

でも、この万能感はすごい。それとこの一体感、山田先生がISはパートナーのようなモノだっけって言ったのがよく分かる。そんなこと思っていると、千冬姉が声をかけてきた。

「ちつ、時間がないな……初期化と最適化処理は実戦でやれ。
フォーマット ファイティング
……大丈夫だ、訓練の事を思いだせ。お前ならできる、そうだろう?。」

「ああ、なんたつて俺は千冬姉の弟だからな。その顔に泥を塗るわけにはいかないよな」

「ふつ、ならばいい。それと……」

「分かってますよ、織斑先生」

「馬鹿者、お姉ちゃんだ」

「まだそれを言ってるのかよ!?!」

しつこいな、おい!?!

ま、でもこれで余計な力は抜けた気がする。案外これを狙ってたのかもな。

「篠ノ之さん……私たちの事忘れられてませんか?」

「お姉ちゃん……だと? 一夏のシスコンも大概だが、千冬さんのブラコンも拍車がかかってきてないか? 早く手を打たねば、手遅れに……!?!」

「あ、あのう、聞いてます? 篠ノ之さん?」

後ろの方で何かブツブツ言ってる筈と涙目の山田先生の姿が見える”。これはハイパーセンサーの補正のおかげか。

というか、筈の目が虚ろになって怖い。ちよつとフオローして行くか。

「筈……」

「ッ！ な、なんだ？」

「山田先生が泣きそうだなぞ」

「へっ！？ あ、いや、これは先生を無視してたんじゃなくてです
すね！？」

「うう、いいんですよ、どうせ私は先生らしくないですし」

「違いますって！？ あーもう！ 一夏のせいだからな！！」

「なんでだよ。まあいいさ………」

「だからなんだ！」

「行ってくる」

「！」

ああ、勝って来いッ！！

その言葉を背に受けながらゲートから飛び出した。

・ ・ ・ ・

アリーナに到着し、俺より上の方に浮いていたセシリアと相対する。

いつものように偉そうに腰に手を当てたまま声をかけてくる。

「あら、逃げずに来ましたのね……」

「そりやまあな。あそこまでお膳立てされてんだ、やらなきや嘘だろ？」

「ま、そうですわね。……それより、お体の方は大丈夫ですか？」

「？ 何がだ？」

「い、いえ、特に何も無いのならしいですわ……」

おかしな事を言う奴だ。

でも、こうやって話してる間にも最適化が行われてるわけだからいいけどな。

どう考えてもこの勝負の鍵は一次移行にかかっている。ファーストシフト

それが終わるまではできるだけ力を温存して、勝機を逃さないようにしないと。

そんな事を考えながら、セシリアのブルー・ティアーズの武装を確認していると、これまた偉そうにビシツと俺を指を指してくる。

どうでもいいが、人を指差してはいけないと教わらなかったのか。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンス？」

「このまま戦えば私の勝利は自明の理。ですから、無様な姿を皆さんに晒す前に謝ってくださいれば、許してあげない事もなくてよ」

「……さーせん。これでいいか？」

「……バカにしてるんですね、バカにしてるんでしょう！？」

「いえいえー仮にもイギリス代表候補生であるセシリア・オルコットに対して僕がそんな事するわけじゃないじゃないですかー（棒）」

「~~~~っ！！ もうツ、絶対許しませんからねッ！！」

そんなセシリアの咆哮と共に、セシリアの持っていたレーザーラ

イフル『スターライトmk?』が火を噴いた。
ハイパーセンサーの警告が表示され、上昇する事で回避する。

「なっ!?!」

まあ、考えなしに挑発なんてするハズもないわな、常識的に考えて。

真理戦なんていうほど高度な物じゃないけど、それでも多少相手の攻撃は単調になる。

とりあえずセシリアが驚いてる隙に、近接ブレードを呼び出しそのまま上昇を続け、セシリアの上へと回る。

何でワザワザ上のポジションを取ったかって言うと、空中戦というものは、上を制した者が勝つからだ。無論、千冬姉の受け売りだけど。

まあ、確かにそうなのだ。ハイパーセンサーのおかげで360度知覚できるとはいえ、人間上の方を意識するってのはやりなれてない。それに心理的にも上からの攻撃は威圧感があるというか精神的にくるものがある。それに上の方が単純に逃げ道が多いってのもある。

でも、上を取ったからといってブレード一本の俺に空中を制するほどの技量なんてないわけで。

「くっ、この一週間の特訓とやらは伊達ではなかったということ
ですわね……ですが、それだけでこの私に勝てるとは思わない事ね
ッ……!」

「うおっ!?! やっぱそのライフルだけじゃなかったか!?!」

ブルー・ティアーズに付いてるフィン・アーマーから4つほどビットが分離し、それぞれが不規則に動き回り俺へとレーザーを放ち始める。

ぐあっ、これじゃあ上取った意味ねーじゃんツ!!

さすがに多角攻撃の回避なんぞ教えてもらってない。それでも必死に避けるが、その回避先にもビットが配置してあり、レーザーが撃ち込まれる。

ブレードを盾にしても凌ぎ切れるもんじゃないぞツ!

何とか直撃を避けながらも、その正確な射撃にがりがりとしールドエネルギーが削られていく。

くそっ、最適化なんて待ってられないっ……仕掛けるツ!!

「せりゃあッ!」

被弾覚悟で一つのビットに接近する。

さすがにISの加速ほどの速さはビットにはないらしく、ブレードで真っ二つにする。

が、その隙を狙われセシリアからライフルの射撃が襲いかかる。

「その隙、いただきますわっ!」

「っあっ!」

無理矢理身体を捻り、何とか直撃は避ける。

こんなの千冬姉の九頭龍閃もどきに比べればツ!!

「…無茶苦茶な回避をしますわね」

「…必要に駆られて」

その同情の視線が痛い。

ま、なんとなくだがコツが掴めた。

それに、もう少しで相手の攻撃の癖とか分かりそうなんだが……

「はっ!? 呆けている暇などなくってよ!!」

「自分だつてしてたくせにッ!!」

まずは、このレーザーの雨を切り抜けてからだなッ!!

シールドエネルギー残量 114

中破判定か……ええい、最適化はまだかよっ!?

あれから15分と少し。そろそろレッドアラートがなり始めるレベルだが、例のビットもさらに一個潰して残り2機。

そして一向に最適化が終了する気配もない。

いやはや、千冬姉の訓練がなかったらもう負けてたかもな……

「初見でこれほどまでに私もブルー・ティアーズを避けて、その上2機も落とすとは…認識を改めますわ」

「そいつはどうも、すぐに残りの2機も叩き斬ってやるよ」
「ふふっ、できるものならやっつてごらんなさいな」

まあ、耐えた分だけ見えてきたものもあった。

あのビット…自動起動兵器かと思っただがどうやらそうでもないらしい。

あのビットが攻撃してくる間は、セシリア本人からは攻撃をしてこない。同時に狙ったほうが効率がいいのにも拘らず、だ。

こつちを侮つての余裕かとも思っただけど、それなら一機やられた次点で撃つてきてもいいハズだ。

つまり、あのビットはセシリア本人が操作していて、そつちに集中してるせいで同時にライフルで狙うなんて事はできないって事だ。ビットの役割は攻撃・攪乱・誘導の三つ。

攻撃は基本的に俺の一番反応の遠い角度で狙って撃ってくる。それもタイミングを微妙にズラし、想定した回避位置も狙ってくる。誘導は狙っている位置に相手を誘導して、ライフルでズドン。これが基本戦術。

まったく、俺のISとは相性最悪だよな。タッグを組むならともかく。

「さあ、終幕といきましょうか!」

その宣言と同時に再びビットが襲いかかって来る。

でも、これで来るって事はセシリア本人からの攻撃はないッ!!

「つまり、俺はこつちのビットだけに集中すればいいってワケだッ!」

「その様子だと、このブルー・ティアーズの仕組みに気付いたよっね……でも、甘いですわッ!」

「なあっ!？」

セシリアはビットを操ってるにも拘らず、ビットを射出したものは別のアーマーからミサイルを撃ち出し、さらにはライフルで射撃をしてきた。

ミサイルはともかく、ライフルを撃てるはずが……って、そうか!?! 俺がビットを破壊したからその破壊した分だけライフルへ思考が割けたのかッ!？

つか、避け切れ

ッ!?!？

ビットから一夏を見送った私は、一夏の戦う姿を見逃しまいとそのままビットで観戦していた。

さすがに銃器相手だと近距離主体の一夏では分が悪いらしく先ほどから、ほとんどワンサイドゲームと言っていい程に一夏はオルコットに追い込まれている。

だが、そんな中でもアイツは勝機を見つけたようで目が輝いている。

……私の好きな顔の一つだ。

こほんっ……そしてオルコットの正確な射撃を華麗とは言いがたいけれどもかわしっつ、残ったビットの一つへと突貫する一夏だったが、そこを目掛けてミサイルでの攻撃と今まで同時には使わなかつ

たライフルでの射撃が浴びせられた。

そんな……ッ!!

「一夏……ッ!」

「ふっ、機体に救われたな……というか、何だこの謀ったかのようなタイミングは……」

「へっ?」

千冬さんがそうひとりごちるとほぼ同時に、一夏を包むように漂っていた煙幕が吹き飛ばされるかのように散らされていき、そこに一夏のIS『白式』の本来の姿が現れた。

「良かった…無事か……」

「当たり前だ。こんなところで終わるような柔な鍛え方はしてない」

「ふふふ、またそんな事言っつて、織斑先生もずいぶん心配してたじゃないですか。ほら、強く握ってたせいでスーツに皺が……っつて、痛い痛いッ!?!」

「山田先生はウチの弟並みに学習能力がない見たいですね。さつき私はからかわれるのは嫌いだと言ったハズだが?」

「あううう、すみませんっ! そんなに強く握られたら千切れちゃいますうッ!?!」

……………一夏、私はちゃんと応援してるからな!!

フォーマットならびにフィッティングを終了しました、確認を押してください。

ようやく、か。

一次移行が終了し、白式は新しい姿に…いや、本来の姿か。とにかく、俺専用の機体になったわけだ。

「なっ、ファーストシフト一次移行！？ まさか今まで初期設定のままですッ！」

「ま、そういうことになるな。つまり、こっからが本番って事だ」

そう言って改めてブレードを構え…と、こっちも変化してたのか…『雪片型式』？

これって千冬姉のISの武装…ははっ、なんてこった。

「全く、俺は最高の姉を持ったな…俺にはもつたいないくらいだ」

まさか、こんな場面でも千冬姉に助けてもらえるとは…束さんの仕業だな？

でも、まあこれなら、いける。

いつだって千冬姉に守られっぱなしだった情けない俺でも、やれる。今度は

「俺が守る番、だよな」

「…は？ あなた、何を」

「いや、こっちの話だ。そんじゃま、行くぜッ…！」

「くっ！」

さっきとは比べ物にならないほどよく動く。
これが白式かッ！

セシリアが再びビットとライフルでの波状攻撃をしてくるが、攻撃直後を狙いビットを叩き斬る。

迫ってくるミサイルのスラスターを破壊して、一気に接近する。

雪片の使い方は何度も千冬姉の映像で見してきた。

振るいは、この一週間で俺が一番よく見てきた！！

「くっ、調子に乗って！！」

残ったビットとライフルで攻撃してくるが、上昇してかわす。
そういえば、さっきの上を取る事の利点で一つ言い忘れた事があった。

近接ブレードでは、降下しながら相手を斬りつける事でその威力は凄まじいモノになる。重力様々って事だ。

「さあ、これで終わりだあッ！！」

雪片式型をライフルから撃ち出されるレーザーの盾に、降下の推進力と共にセシリアに斬りかかり

アリーナに、決着を告げるブザーが鳴り響いた。

• • • •

結果から言おう。

「で、何か言い訳はあるか？」
「……ありません」

負けました。

なんとも無様にエネルギー切れと言う自爆によって。

「……さあ、これで終わりだあ」
「スイマセン、許してください、篝さん！」
「ふんっ」

ピットに戻った俺は、このように箒に試合中のセリフを棒読みで言われるという辱めを受けているところだ。

過去の黒歴史を暴露される気持ちってこんな感じなんだろうな！
涙が出そうだ！！

それにしてもなんで突然エネルギーが切れたんだ？ まだ残量は80近くはあつたハズだけど……

「それがあの雪片の特性だからだ」

「千冬姉……」

「まあ、その辺りは帰ってからじっくりと教えてやる。それよりも、だ」

「うあつ、千冬姉からも説教かよ……まあ、あんだだけ大見得切つてこの結果だから仕方ないよな。」

「お前は訓練で私が言った事を忘れたのか？ ん？ 言ったハズだな、避け続けろと」

「いや、でも千冬姉 近接しかなかったつて、痛ひッ!？」

「そんな反論など通じるハズもなく、頬をつねられる。新パターンだ！」

「そんな言い訳は聞いていない。全く……どれだけ心配したと思つているんだ……」

「ひゃい、すみましえん……」

「まあ、試合自体は初めての割りによく動けた方だ……及第点はやれんがな」(むにむに)

「褒めてるのがそうでないのか。」

「というか、いい加減に頬を引っ張るのをやめてもらえないだろうか、お姉様。」

「急降下からの斬撃はいい……だがッ！ 完全停止もできない分

際でそんな事をすればああなるのは分かっていただろう！ オルコ
ットを巻き込み、抱きついたまま錐揉みしながら墜落など……そう
やって、またお前はフラグを建てるのかッ！ 狙っているのか！！」
「あい、申し訳ございません……」

千冬姉が後半何を言ってるか全く分からんが、こつこついう時は理由
なんか分からなくてもとにかく謝れって弾が言ってた。

それにしても誰に謝らされてるんだ、アイツ？ 彼女が欲しい欲
しいとか言ってたから、彼女はいないんだろっし……

などと、別な事を考えていたら例のお約束が飛んできた。

スパーンッ！！

「一夏、聞いているのかッ！！」

「ごめんなさい」

最近、脳細胞よりも頭皮の方が心配になってきた俺なのであった。

クラス代表決定戦の次の日。

結果は負けてしまったけど、クラス代表にはならず済んだと意気揚々その日の授業を迎えた訳なんだが……

「では、一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決定しました！。

あ、何か一繋がり縁起も良さそうですねっ」

一が並んでも縁起がいいとは聞いた事などないが、とりあえず

「なんで俺がクラス代表になってるんですかッ!？」

「馬鹿者、質問があるなら挙手をしろ」

また叩かれる。

出席簿超痛え。

大人しく、手を上げる。

「質問」

「なんですか織斑君？」

「なんで自分がクラス代表になっっているんですか？」

「それは私が辞退したからですわっ!」

あんですと？

後ろの方でがたんという音がして、振り向くとセシリアが立ち上がりこちらへ近づいてくる。

「試合の結果こそあなたの負けでしたが、この私を相手取ってあそこまで立ち回り追い詰めたのは称賛に値しますわ」

おお、何か微妙に褒められてる？
自分を上に見てるのは変わらんけど。

「そ、それですわね…あの時大人気なく怒ったのを私も反省しまして…クラス代表を一夏さんに譲って差し上げようと思ったのですわ」

誰もやりたいとか言っていないけどな。

と言うか、今 名前で呼ばなかったか？

なんて事を考えてる間にセシリアは俺の目の前までやってきて、爆弾を投下した。

「そ、そして、私にあんな事をなさった責任も取ってもらいませんと……」

「いや、責任ってなんのだよ」

「私、あんな風に力強く殿方の腕に抱かれたのは…その、初めてだったんですよ？」

「何の話だっ！！ それに、そんなことなら私にだって権利はあるぞ…！！」

何故か篤が参戦した。

「ずんずんセシリアへと近づいていき、二人してぎゃあぎゃああと言い合っている。」

「というか、お前ら千冬姉の目の前でよくそんな事ができるな。授業中だぞ、今。」

「いい加減黙らんか、お前らッ…！！」

『あうっ…！？』

千冬姉の出席簿アタックが二人の頭に炸裂した。
心なしが、俺の時より威力が高いように思える。

「貴様等…私の言った事を忘れてるようだな……コイツは私の
だっ……！」

……あー授業っていつ始まるのかなー

そろそろ趣味に現実逃避の項目を追加できそうだ。

そんな現実逃避をしてる俺に隣の席の……えーと……そう、相川さ
んが話しかけてきた。

「ねえねえ、やっぱり織斑君は織斑先生に愛されてるんだねー」

「……愛ってなんだ、愛って」

「フッフ、姉×弟…学園祭に向けて執筆を開始しなきゃ」

俺は、何も聞いてない。

こっつして千冬姉の身内自慢と言っか、俺自慢の演説を聞かされる
という羞恥プレイを受けながら1限目は終了となるのであった。

第4話 クラス代表決定戦（後書き）

読了感謝です。

一夏もげる（挨拶）

戦闘描写は練習のつもりで書いたからこんな感じに。ちょっと、くどかったかも。

そして、やっぱりちよろいセシリアさん。本格参戦は次回から。あと、今日のさんシリーズはお休み。

では、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

第5話 日英同盟と中国の影。

放課後の第二アリーナ。

ISの練習に精を出す生徒がちらほら見える中、俺は練習に入る事もできず、ただ事の推移を見守っている。

「だからっ！ 一夏は私が鍛えると言っているのだ!!」

「あら、Cランクの篠ノ之さんに教わるよりもAランクの私に教わった方がいいのは分かりますっでしよう?」

「ら、ランクは関係ないッ！ それに、もとより一夏と約束していたのは私の方が先だろう!!」

……なんでこんなことになってるんだ?

目の前で箒とセシリアが言い争ってる姿を見ながらそんな事を思う。

いつもならこの二人が争うと千冬姉の出席簿スマッシュが飛んでくるんだけど、今はその千冬姉がいない。

なんでも今日は職員会議なんだそう。たぶん、今度のクラス対抗戦の事についてなんだろう。

そして今のこの状況はそのクラス対抗戦が関わってるんだよな、これが。

クラス代表って言うのは、全員がセシリアや俺みたいな専用機持ちって訳じゃないけど、千冬姉が言うにはその実力は確かな物とのこと。

それで、俺もクラス代表になったからにはそれ相応の努力を重ねないとって事で、千冬姉には休めって言われてたけどアリーナで練習しようと思ってたんだが、途中で会った箒とアリーナで何故か待

つてたセシリアが鉢合わせて、今に至ると。
それにしても、なんでこいつ等はもめてるんだろうか。別に一緒に教えてくれればいいじゃないかよ。

そんな事を考えていると、いきなり二人の矛先がこちらに向いた。

「一夏！ お前から何とか言ってるやれ！！」

「一夏さん、私の教え方の方がよっぽどためになりますわ！！」

「いや、一緒にやればいいだろ…せつかく箒も打鉄の使用許可取ったんだし……」

「「それじゃあ意味がないだろう（ありませんわ）！！」「」
「……………」

何が気に食わないんだよ……
皆でやった方が楽しいじゃんか。

「はあ、じゃあお前ら二人が戦って勝った方に教えてもらおうって事で」

「なっ!?!」

「！ さすが一夏さんッ！ 分かっているっしやいますわねっ！」

俺が妥協案を出すと二人は対照的な表情を浮かべる。

というか、箒は完全にこっちを射殺すかのような目付きで睨んできている。

いや、そんなに睨まなくても分かっているっての。

「ああ、でもさすがにこのままだとフェアじゃないからな。セシリアはあのビットを使用禁止な」

「ビットじゃなくてブルー・ティアーズですわ！ ですが、この

私を相手にするんですものそれぐらいのハンデは必要ですわね。でも、一夏さんに教えようとする方が一夏さんが貰わなかったハンデを貰うなんて、やはり私の方が相応しいのではなくて？」

そう言いながら、ブルー・ティアーズを身に纏い空へと舞い上がるセシリア。

一方の箒はというと、挑発されて怒ってるかと思いきや、逆に不敵に笑って挑発し返していた。

「ふっ、負けるのが怖いのか？」

「なななんですって!？」

「だが、いいだろう！ ハンデなどいらん、全力でかかって来い!！」

そう啖呵を切るとセシリアを追いかけるように急上昇をする箒。そして二人の試合が始まった。

箒に全力で来いと言われつつも、何だかんだでセシリアはライフルしか使っていない。

それに対する箒もライフルをかわしながら呐喊している。

……やっぱ、箒も操縦がうまいな。俺より回避に無駄がないような気がする。

千冬姉が言った通り、ISランクってあんま当てにならないのな。

なんて事を考えながら、二人の試合を見ていると後ろの方から声をかけられた。

「ふっ、お前もあいつ等のあしらい方がうまくなったな。偉いぞ」

「あれ、千冬姉？ 職員会議があつたんじゃないのか？」

「嫌な予感がしてな、山田先生に押し付けてきた」

胸を張って言う事じゃないだろ、千冬姉。

今頃涙目になってるんだろうな、山田先生……。

千冬姉に振り回される苦労は俺が一番よく知ってる。ご愁傷様です。

つか、嫌な予感ってなんだよ。

「そうしたら案の定だ。一夏、お前は私の言った事を忘れたのか？ 今日休めと言ったハズだぞ」

「い、いや、そういうわけじゃないよ。ほら、俺ってクラス代表になつただろ？ そんな俺が対抗戦で情けない結果に終わつたら讓つてくれたセシリアやクラスの皆に申し訳ないしな…それに……」

「それに、なんだ？」

「うっ、い、言わなくても分かるだろ？」

「当たり前だ、何年お前の姉をやつてると思っている」

「だつたら「それでも」……」

言わなくてもって言葉は千冬姉に遮られ、最後まで言う事ができなかった。

「私はお前の口から、聞きたい」

……その言い方は卑怯だろ。

「……千冬姉にさ、その、いい所を見せたいって思って」

「ふふっ、期待しているぞ」

そう言って嬉しそうに俺の頭をぐしゃぐしゃとなでる千冬姉。

あーもうっ、恥ずかしいっ！ 何だよコレ！ 新手の羞恥プレイか！！

なんて悶えてる俺の心情を知ってか知らずか……って、確実に知った上でやってるんだらうけど、千冬姉は俺の腕を引っ掴み、アリーナの出口の方に進んで行く。

「今日は気分がいい。一夏、帰るぞ」

「え、いや、俺 箒達と一緒に練習を……」

「そんな事はどうでもいい。今日はいい酒が飲めそうなんだ、お前にはうまいつまみを作ってもらわなければな。購買に食材を調達しに行くぞ」

「え、あ、うん……いいのか……?」

箒達が熱戦を繰り広げているのを見ながら、ずるずると千冬姉に引きずられるままアリーナを退場する俺。

……後が怖いんだが。

「せいッ!」

篠ノ之さんが繰り出す斬撃が大振りになった所を見計らい、素早

く旋廻、後ろを取る。

「貰いましたわ!!」

「ぐっ、しまった!？」

私のスターライトmk?の一撃で篠ノ之さんの打鉄のシールドエネルギーはゼロになる。

私の勝ち、ですわね! これで一夏さんと二人っきりの訓練はいただきですわ!!

一夏さんも私の華麗なる勇姿を見て、その、ほ、惚れ直して下さってるハズです、し……?

あ、あら? 一夏さんはどこに……? って、いらっしやらないっ!?

「し、篠ノ之さんッ! 一夏さんはどこに行きましたの!？」

「はっ? 一夏ならそこに……い、いない、だと!？」

慌てて篠ノ之さんに訊いてみるものの、どうやら彼女も知らないらしい。

すぐに目配せをして、二人で同じアリーナを使っていた人達に訊いて回る。

するとすぐに原因が判明する。

「お、織斑先生ですの……?」

「くっ、職員会議だからと油断し過ぎたか……ッ!」

こういうのを“鷲に油揚げ”と言っんでしょっね。

それにしても一夏さんも一夏さんですわっ!

私の試合を見ないだけでなく、ほ、他の女性と一緒にいなくなるなんて……ッ！！

「うう、せつかく勝ちましたのに……ひどすぎますわ！」

「こうしてはおれんっ！ オルコット！ 一夏を探しに行くぞッ
！！」

「言われなくともっ！」

急いで更衣室へ向かう篠ノ之さんの後を追う。

……やはり目下 最大の敵は織斑先生と言うわけですね。

強敵ですわね……ですが、負けませんわ。それに相手が強ければ強いほど燃えるというもの。

しかし、一人では到底太刀打ちできそうもありませんわね……となると……。

「篠ノ之さん」

「なんだ？」

「ここは共同戦線といきませんか？」

「共同戦線？」

「ええ、私たちの敵は同じです。それも残念ながら一人では太刀打ちできないほどの」

「なるほど、織斑先生を打ち破るまでは利害は一致している、ということだな」

「はい、どうです？」

「いいだろう。だが、私は一夏を渡すつもりはない。織斑先生にも、お前にもだ」

「ええ、構いませんわ。私だって負けるつもりなど、毛頭ありませんもの。では、よろしくお願いしますね、“ 篤さん ”」

「！……ああ、よろしく頼む…セシリア」

ふふつ、織斑先生…一夏さんは絶対に渡しませんわ！！

） 翌日 ）

明けて翌日、案の定 昨日の事について二人にねちねちと嫌味を
言われ続ける羽目になった。

文句は千冬姉に言って欲しいんだが…なんて言い訳が通じるはず
もなく、機嫌を取るのに苦労した。
そんな俺だが夕飯を食べた後、時間になったら学食に来て欲しい
と言われてやってきたんだが

『『織斑君おめでとー！！』』

到着と同時に、ぱんぱんっとクラッカーの音が鳴り響き、少し遅
れて紙テープが俺の頭に降り注ぐ。

どうやら、今日はクラスの皆が俺の代表決定を祝うパーティーを
開いてくれたようだ。

クラス代表が決定したのって先週の始めなんだが、今更やるんだ

なつて突つ込みはやめておこう。
何だかんだで嬉しいしな。

『おりむークラス代表決定おめでとおパーティー』

学食の壁には誰が書いたのか一発で分かる紙が張つてある。

なぜ文体までのほほんとしているんだろつか、のほほんさんは。

「どうぞ、一夏さん」

「セシリア！ 抜け駆けは許さんぞツ！！ 同盟はどうなった！」

「あら、篝さん。アレは織斑先生にしか言及してません。つまり、織斑先生がいない今 私が何をしようか問題ないですわ」

「貴様、最初からそのつもりで……！！」

「………俺を挟んで喧嘩するなよ」

いつの間にか名前呼び合つてる二人は、何故か知らんが言い争つている。

なるほど、これが喧嘩するほど仲がいいと言う奴か。

などと若干関係ない事を考えてる俺を他所にヒートアップして行く二人。

誰か止めてくれないか？

「あははー、無理ですなー」

「馬に蹴られる趣味とかないし」

「むしろ織斑君が蹴られるべきじゃない？」

なんでぞ。

俺だつて馬に蹴られる趣味はないぞ。つていうか、馬に蹴られるのが趣味ってどんな奴だよ。

ま、せっかくのパーティーなのにこんな事で台無しになってもしょうがない。さっさと止めようと思っていたら、その前に止めてくれた人がいた。

「はいはい、喧嘩はその辺にして頂戴。これから皆が大好きな新聞部の取材が始まるわよー」

「そ、そう言う事だから、篠ノ之さんもオルコットさんも喧嘩はやめよ？ ね？」

「む……」

「そういうことでしたら……」

二人の喧嘩を止めたのは新聞部 副部長 黛薫子まゆかほのこ先輩とのほほんさんの友達のさとさとさんだった。

ちなみに、なんで俺が上級生である黛先輩を知ってるのかと言うと、入学当初から俺の事を突撃取材です！ なんて言いながら度々取材に来ていたからだ。

まあ、取材に来た時には大抵千冬姉がいたから門前払いだったんだけど。

というか、さとさとさんも新聞部だったんだな、知らなかった。

「あら、里美ちゃんはウチの部の一年のエースなんだから、知っておいて貰わなきゃ困るわ、織斑君」

「あの、先輩…… エースっていうか、私以外に誰も入ってもらえなかっただけ…… ひゃんっ?!」

「すとーっぷ！ ジャーナリストは余計な事を口走っちゃ、やっていけないのよ？」

「は、はい…… あう、お尻触られたよお……」

「よしよし、さとさととはがんばったよー」

上司のセクハラにも負けずに頑張れ、さとさとさん！

俺とのほんさんは応援しているぞ。

そのセクハラ上司はというと、涙目になってる さとさとさんの事など全く気にした様子もなく、ずずいっと俺にボイスレコーダーを近づけてきた。それでいいのか、副部長殿。

「ま、それはともかく今度こそ取材を受けてもらえるかしら？」

「はあ、手短にお願いします」

「よろしい。ではではぶっちゃけクラス代表になったお気持ちをどっぞー！」

「あー、皆の期待を裏切らないように頑張ります？」

「なぜ疑問系なのだ」

横から箒のツッコミが飛んでくる。

うつさい、別にいいだろ。

「ええ〜、普通すぎてつまんなーい。もっとこごう『オラ、つえー奴と戦えるなんてわくわくすつぞ！』とか『ブラッドバス血風呂に沈めてやるぜ！』とかないの〜？」

「先輩は俺をどういう奴にしたいんですか……」

ただのイタイ奴じゃねーか。

「ま、いつか。適当に捏造しとけば」

「よくないですよ！ メディアの腐敗をここに見た……！」

「まあ、なんて言い草なのかしら。私らの新聞のモットーは清く正しい捏造よ」

「最後の言葉で前半の言葉が塗りつぶされた！」

つ、疲れる……なんで俺はこんなにツッコミをしてるんだ。

散々俺に突っ込ませておいて、黨先輩はセシリアの方にインタビューしている。切り替えが早いな、おい。

何か向こうでもセシリア怒らせてるし。自由だな、あの先輩。

「　　ですから！　私は別にッ！！」

「はいはい、ちゃんとその事は新聞に書いてあげるから」

「だから、書かないでくださいッ!？」

「あ、そつだよー。そーゆーことはちゃんと自分で言いたいもんねー。ま、それはともかくちよつとそこに織斑君と並んでよ、一緒に写真とるから。織斑君の写真はイイ値段で売れるんだよねー」

おい、何勝手に売ってるんだこの人！　　というか、いつ撮られた!？

なんて思っていると、いつの間にか立ち直ってたさとさとさんが数枚の写真を取り出した。

「あ、ちなみにコレがその写真だよ」

「　　……完全に盗撮じゃんッ!！」

「あ、やっぱりそうなんだ　　……」

全部カメラ目線じゃないし！　　どうやってこんな角度から撮ったんだよ、これえええッ!？

さとさとさんの話によるとこれらは定期的に売り出されているらしい。

……IS学園がある種の治外法権だからって肖像権まで無視されるのか!？

「ったく……とんでもない先輩だな、あの人は……とりあえずその写真は返して……」

「……(すっ)」

制服の内側にしまわれた！

えへへ、とか笑って誤魔化さないっ！

「ほらほら、織斑君も早く並んで並んで」

「くっ、分かりましたよ」

「な、何でそんなに不満そうな顔をしていますのッ!? そ、そんなに私と一緒に写るのがお嫌ですか……?」

「あ、いや、そんな事はないぞ」

「で、でしたら、もっとこっちに寄ってくださいっ」

「あ、おいっ! ちょ、ちょっと近すぎないか?」

「こ、これくらい祖国では普通ですわっ!」

セシリアとの距離はゼロに等しい。っ！か、腕を組んでる。さつき、黛先輩は握手してる方がいいって言ってたろうが。

「あ、そっちでもいいや。捏造のし甲斐がありそうな、一枚になりそうだし」

「聞き捨てならないセリフが聞こえたんですけど!」

「そんな事言ってももう遅ーい。はい、1+1はー?」

『『『2い!~!』』』

ばしやり。

“みんな”が声を揃えてピースサインをする。

俺とセシリアのやり取りの間にいつの間にか皆後ろに回って、一緒に写っていた。

「あ、あなた達い!~!」

「抜け駆けは許さん」

「ふふふ、セシリアだけにいい思いはさせないわよー」

「いいじゃない、皆の思い出になって。思い出はプライスレスなのよ」

セシリアの抗議の声も、箒を筆頭としたクラスメイト達によって丸め込まれてしまう。

おおー、苦虫を噛み潰したような顔になってるぞ、セシリア。

「で、でしたら、黛先輩もう一枚っ、今度こそ一夏さんとのツーショットでー!!」

「させるか馬鹿者」

パーンッ!!

毎度おなじみの音が学食に響く。

我等が千冬姉の登場だ。いつもながら唐突に現れるなあ。

そして、その千冬姉の登場にあんなに奔放に振舞っていた黛先輩がびしりと固まった。

「お、織斑先生……あははー、どうもー」

「ほう、やはりここにいたか、黛。今の時間は21時過ぎ……ここに一年は許可を取った上でここに居るからいいが、お前は取ってないな？ 喜べ、2年の寮長から直々に御話があるそつだ」

「うぐっ……分かりました……」

おおー、あの黛先輩がたじたじだぜ。さすが千冬姉。

というか、なんともいいタイミングで来たな。出待ちか？

「あ、私が呼びに言って来た」

「うむ、相川はいい仕事（オルコットの妨害的な意味で）をしてくれた。これからもこのような事がある場合はすぐに私を呼ぶように」

「はい、わかりました！」

「うう、相川さんも敵ですわ……」

何故かセシリアが落ち込んでいる。そんなに写真に写りたかったのか？

別に言ってくればいつでも撮ってやるのにな。

「じゃあ、私はコレで失礼しますね……とほほ、あの先生説教長いんだよねえ……」

「ああ、黛 少し待て」

「はい？ なんですか？」

帰ろうとしていた黛先輩を呼び止め、千冬姉が俺の隣までやって来た。

そして

「一枚撮ってから帰れ。写真ができたなら、ネガごと渡すように」

『なあっ!?!?』

「！ 了解ですッ！ はい、チーズ!！」

ばしゃりとな。

そんなこんなで千冬姉との写真が撮られた。

そういえば、千冬姉との写真なんていつ振りだろうな……ここ数年は千冬姉が忙しくて一緒に撮ってないし、ウチはアルバムとかそんな類のモノが少ないからな……その代わり、束さん辺りはたくさん持ってそうだな、うん。

この3年は近くにいるんだし、また二人で定期的に写真でも撮る

か。今度は箒やセシリア達も一緒に。

「さて、用が済んだから私は帰るが、あまり羽目を外しすぎるなよ。場の雰囲気に合わせて〜などと一言言って一夏に手を出そうものなら……覚悟するんだな」

『わ、わかりましたー……』

皆が返事をするのを確認してから、千冬姉は去っていった。
そんな心配しなくても、俺になんかするような子はいないだろ。

「ふふふ、前から怪しいと思ってたけど、私の取材を妨害してたのはこういうことだったのね……。ネガを取られちゃうのは痛いけど、このネタがあればまだ戦える！ こうしちゃうられないわ！ それじゃあ、皆は続きを楽しんでね！！」

「あの、先輩……私……？」

「ん？ ああ、里美ちゃんも参加しちゃっていいよ。でも、明日はこの事について裏づけの取材するから放課後すぐに部屋に集合ね！」

黛先輩もそう言い残して、走り去っていく。

ホントに嵐のような人だったな、場を掻き回すだけ掻き回していなくなるとか。

他の皆もポカンとしてるないじゃないか。

その後は、普通にパーティーを再開して22時を過ぎた所でお開きとなった。

ちなみにずっと落ち込んでいたセシリアだが、今度一緒に写真撮

るかと言ったら一気に機嫌が治った。

若干情緒不安定なんじゃないだろうか、コイツ。ちゃんと気遣うようにしてやるう。

そんな事を考えてたら、今度は箒が不機嫌そうに横からつねってきた。

……お前もか。

なんで俺が箒達の心のケアまで考えなきゃならんのだと頭を抱えていた頃に、1年寮でセカンド幼馴染が叫んでいたことを知るのは次の日の事だった。

「なんで千冬さんと一夏が一緒の部屋なのよー！ー！？」

「えっ、なんでってそう言う関係（姉弟）だからでしょ？」

「ふっざけんじゃないわよーッ！！ 私との約束はどうしたのよ！ー！」

「知らないわよ……あ、私は窓側のベッド使ってるから隣のベッド使ってちょうだい」

「フフフ、やっぱラスボスは千冬さんだったってワケね……！」

第5話 日英同盟と中国の影。(後書き)

読了感謝です。

そうだ、ここに処刑場を造ろう(挨拶)

タイトルだけ見ると戦争モノに見える、不思議!

そしてセカン党皆様待望の鈴が…! 次回から本格参戦。

では、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

第6話 二人目の幼馴染と姉の暗躍

パーティーの翌日、SHRも終わり授業の準備をしている俺にクラスの子が声をかけてきた。

「ねえねえ、織斑君はもう2組の転校生のこと聞いた？」

「転校生……？」

まだ4月も終わってないこんな中途半端な時期にか？
どうせなら入学式に合わせりゃいいモノを……。

「んー、何でもその娘、代表候補生なんだって。中国の」

「あら、今頃になって私の危ぶんでの事かしら？」

「あはは、セシリアっておもしろいねー。座布団をあげよう」

「ちよつと!？」

セシリアの強気発言が軽く流される。

というか、イギリス人のセシリアに座布団をあげるって言うても意味分かんないだろ。

でもまあ、確かにセシリアの事を危ぶんでっただけじゃ根拠としては弱いな。

のほほんさんが言ってたけど、セシリアの他にも代表候補生はいららしいし。

そもそも、危ぶむんだったら最初から入学させるだろ。

「ふん、どちらにせよ隣のクラスの話なのだ、そう騒ぐほどの事でもあるまい」

などと身も蓋もない事を言うのは筈である。さつきまで不機嫌そうに外を見てたくせにいつの間にかうちに來てるんだ、お前は。…機嫌が悪そうなのは変わってないけど。

「あら、不機嫌そうですわね、筈さん。何かいい事でもあったのかしら?」

「……別に、どうやって昨日の件をどう妨害してやるうかと考えていたまでだ」

「……昨日の件?」

何かあったつけ?

千冬姉達が乱入したけど、極普通のパーティーだった気がするが。

「なつ、そんな事させませんわツ! だいたい既に成立した約束ではありませんか! 往生際が悪いですわよ!!!」

「貴様がそれを言うか! 散々人の約束を横から邪魔しておいて!!!」

「なあ、さつきから何の話をしてるんだ?」

どうにも話が見えなくて二人に訊いてみる。
が、すぐに一蹴されてしまう。

「い、一夏さんには関係ありませんわツ!」

「そ、そうだ! べ、別に一夏との写真が羨ましいわけじゃないんだからなツ!??」

「そうなのか? だったら、筈と一緒に撮らなくてもいいんだな?」

「へっ?」
「いや、のほんさんがな? セシリアとだけツーショットはズるいって言うから一緒に撮る事になったんだよ。んで、他にも撮りたいって子がいるからついでに筈も…とか思ってたけど、余計なお

世話「い、一夏がそこまで言うなら仕方ないな！一緒に写ってやるわけではないかッ！！まったく、仕方のない奴だな！」「……」

仕方のないのは筈だろ……。支離滅裂じゃねーか。

見るよ、皆もそれはねーよって顔してるぞ？

ま、それを指摘したら竹刀が飛んできそうだから言うのはやめよう。

千冬姉に学習能力がないとか言われてるけど、ちゃんと学習するんだぜ？俺も。

「そ、そんなのダメですわッ！これは最初にお願ひした私の特権ですのにッ！！」

「ふん、そんな特権などどこにもない。それに私は“一夏”から頼まれて写真を撮るのだ。“自分から”頼まねばならないお前とは違うのだ」

「おい、俺がいつ頼んだ」

「本当に都合のいいオツムをしていらっしやいますわねッ！！いいですわ、前回のよりも鮮烈に明確に！敗北を味合わせて差上げますわッ！！」

「ふっ、私が二度も遅れを取るとは思わないことだなッ！！」

フッフと晒いながら視線の火花を散らせている二人。

というか、そろそろ授業が始まるから席に帰った方がいいぞー

なんて俺の控えめな提案も完全に黙殺されたとき、突然ガラリと教室のドアが開き何かが飛び込んできた。

「あ、あんた達いつまでやってんのよッ！！完全に入るタイミ

ングを失っちゃったじゃないッ!！」

と、どこかで聞いた事のあるような怒声が聞こえた。

でも、あいつは中国に帰ってっただが……？ と首を傾げながらも、ドアの方に目をやる。

「鈴？」

「久しぶりね、一夏っ！」

そこにいたのは、俺のセカンド幼馴染。

鳳^{ファン} 鈴音^{リンイン}がそのトレードマークたるツイントールを揺らしながら、声をかけてきた。

……自分で言っておいてなんだが、幼馴染をファースト、セカンドって言うのも何か変だな。

「おう、久しぶりだな……でも、とりあえずそこどいた方がいいぞ」

「何よっ、せっかく久しぶりに会ったのにどけなんてご挨拶ねッ!！」

いや、そういうことじゃねーよ。

お前が入り口塞いでるせいで山田先生が入れないで困ってるんだよ。

なんて俺が口に出す前に、山田先生がいつものようにやんわりと注意する。

「あ、あの、あなたは2組の鳳さんですよ？ もうすぐ授業が始まりますから教室に戻ってくださいね？」

「へっ？ ……あ、ああああッ!？」

山田先生がそう言うと、鈴は慌てて隣の教室に帰っていった。結局、何しに来たんだアイツ？

「えーと、とりあえず授業を始めますね。皆さん、席についてくださいーい」

それを聞いて、ぞろぞろと皆が席についていく。篝とセシリアを残して。

……皆が席についてるんだから、お前らも早く座れよー。

「一夏さん？ 後でさっきの方との関係を洗いざらい吐いてもらうのでそのおつもりで」

「うむ、逃げたら……」

『分かってるな（ますわね）？』

二人してギロリと俺を睨んでから、それぞれの席へと帰っていった。

お前らさっきまで睨み合ってたのに、息びったりだな。

あと、女の子がそんなドスの利いた声を出すなよ、山田先生もおびえてるじゃねーか。

……というか、千冬姉がいないな。

このIS操縦理論の授業は千冬姉の担当だったハズなんだが……？

「山田先生、質問です」

「はい、どうしました？ 織斑君」

「織斑先生はどうされたんですか？ コレって織斑先生の授業でしたよね？」

「え、えーと……私もよく分からないんですけど、織斑先生の机の

上に用事があるから先に授業を進めておいてくれて書いて書き置きが残されてたんです……」

なので私が来ました……と山田先生。

仕事に関しては一切手を抜かない千冬姉にしては珍しいな。

何かあったんだろうか？

そして、代理の山田先生の授業が始まったわけだが、結局その授業の間に千冬姉は戻ってくる事はなかった。

〈 IS学園某所 〉

今 私は空き教室で織斑先生と相對している

無論、昨日の件についてだ。いきなり呼び出されて驚いたけど、

これはチャンス。

ふふふ、こういう機会を物にしてこそ一流のジャーナリストなのよねっ！

「……それで、例の物は用意できたのか？」

「ええ、抜かりなく。それで、物は相談なんです……ネガだけ

は勘弁してもらえませんか？」

「言わなくても分かっているだろう？ 答えはノーだ」

にべもない。

まあ、こうなる事は分かってたし、本番はここからよ。

「ちえっ、じゃあその代わりに取材させてくださいよー」

「言わなかったか、私は身内ネタでからかわれるのが嫌いだ」

「痛ッ！？ 何もはたくことないじゃないですか……だったら、

この写真も付けるって言ったらどうです？」

「……………教師を買収しようとはいい度胸だな」

懐から、一枚の写真を取り出す。

勿論、織斑君の写真。それもセシリアちゃんと戦っているときに見せたキリッとしてる顔だ。

コレが撮られただけでも授業を抜け出した甲斐があったってものだわ。

コレさえあればブラコンまっしぐらの織斑先生なら容易く攻略できるともものよ！

「フッフ、ジャーナリストは記事のためなら悪魔にも魂を売ること（ひゅっ）で……って、あれ？ 写真が？！」

「一つ、教えておいてやろう…人質を目の前に晒したまま交渉するのは無謀だ。このようにすぐに奪われてしまうからな」

「か、勝手に生徒の私物を取り上げないでくださいよっ！？」

「確かに、この写真はお前の私物だろう。だが、この被写体になつてる一夏は私の物だ。つまり、コレを私が取り上げてもなんら問題はない」

暴論なのに妙に説得力があるんですけどッ!?
くっ、さすがブリュンヒルデ……ッ！ 現役を引退したからって
侮っていたわ。

何とか反撃の糸口を見つけないと そんな甘い考えを抱い
ていた時期が私にもありました。

「さて、黛……これだけではないだろう？ 相川の報告によると
定期的に売り出されているらしいからな」

……バレてる……!!?!

なんか冷や汗が止まらないんですけど!!

こ、ここは逃げるしかないわ！ 三六計逃げるに如かず、昔の人
はいい事言った!!

ありがとうございます！ 貴方のおかげで私はまだ戦えます!!

でも

「……あ、私 授業があるのでこれで失礼します！」

「逃がさん」

逃げるタイミングも教えて欲しかったナー……

そして、私の持っていた織斑君に関する資料は全て織斑先生に回

収されてしまった。

ブラコン恐るべし……今週のメインはコレでいきましょう。

反省？ なにそれ、おいしいの？

昼休み。

学食に向かっている俺は、噂に謂れない罪で責められている。

「お前のせいだぞっ！」

「一夏さんのせいですわっ！」

「何でそうなるんだよ……」

この二人、午前中の授業で山田先生からそれぞれ5回ずつ注意を受けているのである。

セシリアの席は教室の後ろの方だから正確には分からないが、こいつ等は山田先生の授業をほったらかしにして百面相しながらブツブツ呟いていたのだ。

今日の授業、本当に千冬姉がいなくてよかったな……いたら今頃頭部が陥没してるぞ。

「……相変わらずフラグ建てまくってんのね、コイツ……」

むう、いつもの和定食もいいけど、こっちの中華定食もいいな。
鈴を見たら久しぶりに酢豚が食いたくなった。

……ん？ そういえば鈴と酢豚で何かあったような気が……ま
あ、いいか。

そのまま中華定食を選び、食堂の“お姉さん”からお盆を受け取る。

心なしか酢豚の量が増えている。

いつもは平等なのにおかしな事もあるもんだなー（棒）

受け取ったお盆を持って適当に空いてる席に鈴と座る。

「朝にも言ったけど久しぶりだな、鈴」

「そうね、中2の冬だったから一年ぶりってところかしら」

「だな。それにしてもいつこっちに帰ってたんだ？ 連絡ぐらい
してくれりゃいいのに」

「まだ帰ってから2日と経ってないわよ。あっちでバタバタして
たから、入学式にも間に合わなかったんだし……」

「ん？ って事は、朝言ってた転入して来た中国の代表候補生っ
てお前の事だったのか」

「それぐらい気付きなさいよッ!？」

なんだ、俺が悪いのか？

なんつーか、昔から一緒にいたせいであんま中国人って感じがし
ないんだよな。

なんて事を話しつつ、思い出話に花を咲かせているとようやく篝
たちが合流して来た。

そして、席につくと同時に鈴について訊いてくる。

「それで、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが？」

「そうですねっ！ も、もしかしてお二人はっ、付き合っ……！？」

「べ、べべ別に私達はそんなんじゃない……えへへ」

セシリアの質問（？）にわたたと手を振りながら答える鈴。なんでそこで照れるんだ？

「そうだぞ、どこをどう見りゃそうなるんだよ。ただの幼馴染だぞ」

「…………ツ」

「…………なんで睨むんだよ」

「うっさいわねッ！ 何でもないわよッ！！」

どう考えてもうるさいのは鈴の方だろ、なんで怒ってるんだよ。勝手に怒ってる鈴を他所に箒から怪訝そうな声があがる。

「…………幼馴染、だと？」

「ああ、そう言えば箒とは入れ違いになったんだっけ。小4の終わりに箒が引越してから、鈴が転校して来たんだよ。正確には小5の頭だけだ」

「ふうん、ってことはあなたが篠ノ之さんなんだ……初めまして、よろしくね？」

「ああ、こちらこそだ……ッ！！」

二人がすっげー笑顔で握手している。おお、ファーストセカンドの間に友情が芽生えた！

ギリギリって音と二人に浮かんでる青筋は幻聴および幻覚に違い

ない。

昨日の疲れが取れてないせいだな、うん。

俺は何も見てないし、聞いてもないぞー。

そんな（見た目）仲よく握手している二人に、またしても省られたセシリアが食ってかかった。

「わ、私を置いて勝手に盛り上がりたらないでもらえますッ!?!」

「……誰?」

「私はイギリス代表候補生のセシリア・オルコットですわッ!

代表候補生なら他の国の候補生の事くらい知っておきなさいなッ!

!」

「いや、アタシ別に他の国の事とか興味ないし」

「それはそれでどうなんだ、もっとアンテナ張っとけよ候補生」

あっけらかんと言いつつ鈴にツッコミを入れる。

「というか、セシリアが怒りのあまり、顔を真っ赤にしてプルプル震えてるんだが。」

「それに、知らなくても戦えばどうせアタシが勝つんだから何の問題もないわ。ほら、アタシ強いし?」

いや、知らねーよ、そんなこと。どっから来るんだ、その自信は。

まあ、代表候補生になったんだから、相応の実力はあるんだろうけど……相変わらずのビククマウスだ。

そうやって強気な発言しといて、何回 痛い目見たのか忘れたんだろうか、こいつは。

「ま、でも残念だったな。もう少し早くこっちに来てれば、クラス代表になれたかもしれないのに」

「なつたわよ？」

「はっ？ なに言ってるんだよ、クラス代表の選考は先週までだった八ズだぞ？」

「知ってる。だから、ウチの代表の子にちよーっとお願ひして代わってもらったの」

……誰だか知らないが、せっかく代表になつたのに不憫だなあ。
というか、もうちよっとなを遣えよ、日本の謙虚な心を忘れたのか。

「ところで、アンタもクラス代表になつたのよね？」

「ああ、成り行きだけだな……ん？ ということは鈴と当たるかもしれないってことか」

「！ そ、そうよ？ その時は手加減なんてしないんだからねッ！？」

「おお、当たり前だろ？ 俺も全力で行くからな！」

前回のセシリアの時は負けちまったけど、アレからも千冬姉に扱かれてるんだ。負けるわけにはいかねえよな。

そんな事を思っていると、篝が何かぼそりと呟いた。

「ふん、どうせ一夏を倒せば、自分の強さに惚れるとも思っているのだろう？ その浅はかさは愚かしいな」

「ななな、何言ってるのよっ！？ そんなわけないじゃにゃいっ！！」

「そうですわっ！ 戦うことぐらいで惚れるなんてどうかしてますわッ！！」

「……まず、お前は鏡を見るべきだな」

「？ どういうことですか？」

「……そんなだからちよろいなどと言われるのだ」

「いつ私がちょ、ちよろいなんて言われたんですのツ!? ちよろくなんてありませんわッ!!!」

「ちよっと! アタシを無視すんなーッ!!!」

があーつと吠える鈴。

さつきとは立場が逆になったな。

それにしても、全く話に入れない。

コレが噂のガールズトークと言う奴か。

こんなに騒がしいイメージはなかったんだが、現実はこんなもんらしい。

……さて。

「「「うちそうさまでした」

『『『へっ?』』』

「お前らもさつきと食べないと授業に遅れるぞー」

三人の前に置いてある昼食はその量を全く減らすことなく、冷めてしまっていた。

まあ、セシリアのサンドイッチは問題ないけど、鈴のラーメンなんて悲惨だ。

麺が伸びきって、スープを全部吸ってしまった。

料理屋の娘だけあって、食事にはうるさいのに……珍しい事もあるもんだ。

「な、なんで教えてくれなかったのよ!?!」

「いや、何か楽しそうに話してたから、水を注すのも悪いと思っ
てな」

「なんて無駄なところに気を遣うのよ、アンタは！！ もっと気を遣うべき所があるでしょうがッ!?」

「そうか？ ま、次 実習だから俺は先に行くぞ」

「アタシだって同じよーッ!!」

まだ後ろの方で鈴がぎゃあぎゃあ言ってるが、俺の場合 着替える場所が違うから早く移動しないと千冬姉スイングが飛んで来るんだよ。悪いな。

それにしても、鈴も文句言う暇があったら食べればいいのに。筈たちは黙々と食べてたから大丈夫だろうけど……。

そして、ウチのクラスと合同であった実習に遅刻した鈴は、頭に出席簿が容赦なく降り注ぐ事となった。

く 今日の鈴さん く

遅刻したせいで千冬さんからきつつい一撃を貰ってからしばらく。授業も終わって、着替えているところだ。

「うう、まだ頭が痛いわよ…年々威力が増してるような気がするわ……」

「遅刻したアンタが悪いんでしょ？ 自業自得よ」

同室になったティナ・ハミルトンが呆れたように言う。

くう、正論過ぎて言い返せないじゃないっ。

もうっ、これも全部一夏のせいなんだから！

……そういえば、結局あの約束の事訊けなかったなあ。

（次に会うときには今よりもずっと、ずっと料理の腕上げて……

そしたら、ま、毎日酢豚作ってあげるんだからねッ！）

（おう、楽しみにしてるぜ）

……覚えてる、わよね。

今日だって、昼食に酢豚食べてたし……ッ！ も、もしかして、あれって遠まわしなアピールだったのかしら……？

一夏は約束をちゃんと覚えてて、私の事を待っていてくれたって事……？

あ、あ、あう……っ、ど、どうしよお……っ！

どんな顔してアイツに会えばいいのよ……！！

「……………」

「どしたの、鈴？ 顔 真っ赤になってるわよ？」

「な、なんでもにやいわよ！」

「……………（何、この可愛い娘……………！）」

よ、よし、女は度胸！

こんなところで悩んでる間に他の奴等に掻っ攫われるわけにはいかないわ！

放課後になったら、あいつの所に行つて……………約束の事について訊きましょう。

そしたら、私と一夏は晴れて

「テイナ！ 私やるわ！！」

「！……………そう、やるのね。大丈夫よ、貴方ならやれるわ！」

「あ、ありがと……………」

ふふふ、一夏！ 待ってなさいよっ！！

この時のアタシは一夏が朴念神であることや、まだ倒さなきゃいけない人がいることも完全に忘れて、ただ浮かれていたのだった。

第6話 二人目の幼馴染と姉の暗躍（後書き）

読了感謝です。

一夏 MOGGERO！（挨拶）

というわけで、鈴が本格参戦。

なんかサブヒロイン達の初登場時は割とヒドイ目にあってる気がする……何故だ。

あと、我等が千冬姉の出番が少ないのは次回に向けての温存ですw

では、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

第7話 クラス対抗戦 開始

5月に入つての最初の休日、俺は外出届けを出して友人である五反田 弾の家に訪れていた。

「で、何しに来たんだよ。このナチュラルボーンフラグメイカー
め」

「なんだよ、その称号は……」

「ふんっ、女の園に迷い込んだ男の敵にはちょうどいいだろうが」

俺だつて好きで迷い込んだわけじゃねーよ。

どうせ、言つても聞きゃしないんだろっけどな、コイツは。

「そんなことより、今日は相談があつて来たんだよ」

「あん？ 別に電話ですりゃいいだろうが……あつ、テメエもし
かして!？」

「ん？ いや、ただ家に物を取りに帰るついでに……」蘭に会い
に来たんじゃねーだろうなあッ!？ さ・せ・る・かあああああ
ああッ!？」ちよっ、おま、やめ……ッ!？」

いきなり激昂して、ガクガクと俺を揺さぶる弾。

ちなみに、蘭とはコイツの妹で俺等の一つ下の中3。某有名私立
の生徒会長なんだそう。

それで、そんな妹を持ったコイツは超が付くほどのシスコンだ。

弾の家に遊びに行つて、初めて蘭とあつた時なんて やれ色目を
使うんじゃねえ! とか馴れ馴れしく話すな! とか宥めるのが大
変だつたぐらいだ……それにしても、コイツを見ると既視感を覚
えるのは何故だろうか？

で、いい加減反撃してもいいよなッ！

「やめんかつー！！ このシスコンツー！！」
「がふっ！？」

ようやく弾のシェイクから解放される。

蘭の事となると急に戦闘力を増すな、コイツ……

とりあえず、さつさと本題に入るとする。

「いや、だから普通に相談があつたから来たんだよ」
「……まあ、そういう事にしておいてやるよ」

しつこい奴である。

ま、それだけ蘭の事が大事なんだろう。その家族を大切に思う気持ちは俺にもよく分かる。

俺だつて千冬姉に悪い虫が付いたらと考えると……雪片でぶつた斬るかもしれん。

「んで？ その相談つてのは何なんだよ」

「あー、それなんだけどな……お前鈴の事 覚えてるだろ？」

「鈴？ おお、覚えてる覚えてる。いつだったか、中国の代表候補生になったとかテレビでやってたの見たぜ。ん？ つーことは、アイツIS学園にいんのかよ」

「ああ、この前 転入して来たんだよ。それでな、何か知らないけどアイツを怒らせちまつたみたいでさ……」

その理由が分からなくて、俺に隠れて内緒話をするぐらい仲がよかった弾に訊きに来たのだ。

でも、付き合ってるとかではなかったらしい。というか、前に「付き合ってるのか？」って訊いてみたら鈴にぶっ飛ばされた記憶がある。

あの日の空は、とても近くに見えた……

「あーあー、なんとなく見えてきた。またお前の朴念仁スキルが発動したんだな」

「なんだよ、その人聞きの悪いスキルは……」

「事実だろーが。それで？ 何やったんだよ」

くっ、他人事だと思いやがって……ッ！

あと、ニヤニヤすんな！！

ぶん殴りたくなる衝動を抑えて、その時の事を思い出しながら説明する。

鈴と再会した日の夜。

鈴が突然俺の部屋……と言うか千冬姉の寮長室に尋ねてきた。

「い、一夏……あのねっ！ 約束の事なんだけど！」

「約束……？ 何かしてたっけ？」

「い、意地が悪いわねッ……ま、まあ、そりゃ気付かなかった私

も悪いんだけどさ……」

いや、だから何の話だよ。

勝手に自己完結されても分からねえよ。

そんな俺の心情など知らず、鈴は顔を赤くしながら俺の事をチラチラと上目遣いで見てくる。

……そんな期待したような顔をされても、分からないものは分からない。

さて、どうしたものか……と頭を悩ませてる俺を見かねたのか、こちらの様子を見ていた千冬姉が助け舟を出してくれた。

「一夏、あの事じゃないか？ お前、酢豚がどうとかと言って喜んでいただろう」

「！？！？（ち、千冬さんが私のサポートを！？）」

「……ああ、思い出した！ 確か、鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を……」

「！ そっつ、それよ！」

「 奢ってくれるってやつだな」

「 うん！……うん？」

「 ……（ニヤリ）」

確か小学生の頃だったか、そんな約束をした気がする。

今日、酢豚を頼んだ時に何か思い出しそうになったのはこの事だったんだな。

「あ……アンタ、何を……ッ」

「ん？ だから、鈴が料理できるようになったら飯を奢ってくれって約束だっただろ？ いやー、アレ聞いた時嬉しくてな！ 千冬姉に自慢したもんだぜ！」

千冬姉も「そうか、よかったな。毎日“ご馳走してくれる”とは、いい“友達”を持ったな、一夏」って、一緒になって喜んでくれたのを覚えてる。

心なしか、ご馳走とか友達とかを強調してたような気がするけど

……

「ま、まさか…千冬さん…ツ！！ 私の約束を…ツ！！」

「ふっ。さて、何のことだか」

「ん？ 何か違ってたか？」

「~~~~ツ！！ 最ツツ低！ 何でちゃんと覚えてないのよツ！

せ、せっかくあたしが勇気を出して言ったのに…ツ！！

もう知らないツ！！！！」

そう一気に捲し立てると、鈴は部屋から出て行ってしまった。

……なんか知らんが、怒らせてしまった事は確からしい。

ちゃんと覚えてない？ って事はやっぱりどこか間違ってたのか？

などと、鈴を怒らせた理由についてアレコレと頭を悩ませていた俺には、後ろで「計画通り」と晒っていた千冬姉に全く気付くことはなかった。

なんて事があり、その次の日から鈴は俺が話しかけても露骨に顔を背けたりしてくるのだ。

昔っから、こういう事は根に持つタイプだから余計に厄介だ。

で、俺の説明が終わると弾は何か分かったのか一人で戦慄していた。

……今の話のどこにそんな要素があったのだろうか？

「ま、マジで震えてきやがった……ッ！ 千冬さんは本当に頭の悪い御方だな。俺も見習うべきか」

「なあ、結局 俺はどこを間違えてたんだ？」

「お前、いつぺん死ぬべきじゃないのか？ 黒 号に轢かれて」

「なんでだよ」

アレに轢かれたら原形残らないだろ。

この後、弾はいくら鈴が怒った理由を訊いてもを教えてくれなかった。

で、結局 俺はそのまま弾とゲームをしたり、弾の祖父である蔵さんがやってる五反田食堂で昼飯を食べたりと極普通の休日を過ごしたのだった。

んー、やつぱは男同士っていうのは余計な気を遣わなくて楽でいい。鈴の問題は何の進展もなかったけど、リフレッシュできたからよししよう。

来週の頭にはもうクラス対抗戦だからな……それまでには何とかしないとマズイ。

何がマズイって、鈴から愚痴でも言われたのか筈やセシリアまで俺の事をやたら冷たい目で見てくるのだ。

まあ、さすがに鈴みたく無視とかしてくるわけじゃないんだけど、精神的につらいものがある。

このままだと胃に穴が開きそうだぜ。

……帰ったら千冬姉に相談してみるか。

千冬姉なら当時の事覚えてるだろうし、何か分かるかもしれない。

そんな事を思いながら、IS学園へ向かうモノレールに乗るのであった。

く 一方、その頃の五反田家 く

蘭が厨房に飛び込んだのは、食堂の方の手伝いをしているときだった。

「お兄にい！ 何で一夏さんが来てるの教えてくれなかったのよッ！

「ダメだ！ お前にあんなすけこましと会わせるわけにはいかな

！……」

くっ、やはりアイツの魔の手にかかってしまっていたか……相変
わらず息をするようにフラグを建てる奴だなッ!!

だが、絶対に蘭は渡さねえッ!!!

「うっさいっ！ お兄の馬鹿ッ！ 大ッ嫌い!!」

「なっ……ッ!! き、嫌い？ 蘭が？ 俺の事を……？」

鬱だ、死の……あだあっ!？」

蘭の痛恨の一言いちげきが胸に突き刺さり、膝から崩れ落ちる俺にじーち
やんから拳骨が飛んできた。

年中 中華鍋を振っているじーちゃんの一撃は非常に重い。本当
に80過ぎてんのかよ。

「馬鹿言っつてねーでさっさと皿洗え。終わったら、客んどこ行っ
て皿下げてこい」

「何も殴ることないだろじーちゃんっ!!」

「いいから手え動かせ」

「はいっ!!」

五反田ヒエラルキー最下位である俺は一夏への呪詛を吐きつつ、
必死で皿を洗うのであった。

試合当日。

ここ、第2アリーナでの第一試合の組み合わせは俺と鈴。

俺と空中で向かい合ってる鈴は、自身のISの主武装である青龍刀？ を構えて“ニタリ”と笑っている……口元だけ。加えて言うなら、頭には井桁が浮かんでいたりする。

お察しの通り、今日まで何の解決にも至らなかったのである。

果たして、コレから始まるのは試合なのか公開処刑なのか……それが問題だ。

「さあ、一夏。あんたの罪を数えなさいッ！」

「……ひい、ふう、みい……」

「ホントに数えてんじゃないわよ……」

「理不尽な」

そんなふざけた会話はさて置いて、どう戦ったものか……鈴のISは黒と暗めの赤を基調とした機体で、その名を『シエンロン甲龍』
というらしい。

どうにもアレを連想してしまうな……漢字違うけど……うん、これからあの機体はポルンガって呼ば……うと思っただけど、鈴の睨みが一層きつくなったからやめよう。

鈴が手に持つてる青龍刀を見る限り、戦闘スタイルは主に近距離型だろう。

まあ、武装がアレだけとは限らないけど……あの肩の所にある非固定浮遊部位とか怪しいんだが……

まさか、セシリアのブルー・ティアーズみたく飛んで来ないよな

？ 棘とか付いてるし、アレぶつけられたらすげえ痛そうだ。

なんて考えていると、試合開始のアナウンスが。

『 それでは両者、試合を開始してください』

そして、ブザーが会場に鳴り響き、同時に鈴が突っ込んでくる。そのまま振り下ろされる青龍刀を雪片で防ぐ……が、予想以上の衝撃に弾かれる。

……筭といい、コイツといい、その細腕のどこにそんな力があるんだか。

まあ、鈴の場合ISの補正があるんだけど。

鈴の青龍刀は両端に歯が付いており、それをバトンの如く振り回し斬り込んでくる。

俺は千冬姉に身体に教えこまれた（強制）クロス・グリッド・ターン 二次元躍動旋廻で回避回避回避イイ！！

「ふうん？ この双天牙月そつてんがげつの攻撃をこうまでかわすなんてやるじゃない」

「こと近接戦での回避だけは負ける気がしない！」

「……なんで泣いてんのよ？」

……泣いてなんかない。

セシリアとの決闘の後、千冬姉は白式の扱いだけじゃなく、一層厳しい回避訓練を俺に課したのであった。

時々、自分の首がちゃんと繋がってるか確かめてしまうのは仕方

のないことだと思う。

「ま、でも甲龍の武装がコレだけだと思ったたら大間違いなんだからねー!」

ぱかっつと例の肩のアーマーがスライドし、中央に球体が見える。そして、その球体が発光した瞬間に見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。

幸いにして、正面に構えていた雪片式型で防げたらしく、ダメージは最小限……が、その一撃で終わるはずもなく。

再び球体が光り、次々とその衝撃が発射される。

「ぬわああああッ!?!」

「あーはっはっは!! 殴ッ血KILLッ!!」

不可視の砲撃とか卑怯すぎるだろ!?!

っーか、めっさ笑ってるんだが!?! トリガーハッピーの気でもあつたのか!?!

あと、そのセリフが似合いすぎだ。あかいあくま的に。

鈴が放ってきている『龍砲』^{リウポウ}は空間自体に圧力をかけ、衝撃を撃ち出す衝撃砲だ。

射線は直線だけど、砲身すらない上に射角に制限がないため、真下、真上は勿論 真後ろでも撃てる。さらに、連射も効くっとなんだよ、このチート武器。絶対修正されるべきだろ。

と言いつつ、かわす俺。千冬姉の訓練様々である。

「よくかわすじゃないッ! でも、それだけじゃ結果は変わらないわよっ!!--!!--!」

「ぐっ、分かってるよっ!!」

武装がこの雪片式型のみで俺では、圧倒的にレンジが足りないのだ。このままだと髑り殺される。比喩なしで。

コレだからブレオンは……! などと、千冬姉が聞いたなら「お前が未熟なだけだ」と一刀両断にされかねない事を考えながら反撃の手立てを考える。

龍砲を捉えようと、ハイパーセンサーで周囲の空間の歪みと大気の流れとかを探らせてるんだが、察知した時には既に放たれてるしなあ……まあ、ないよりはマシな程度だけど。

つまり避けるには実質 動き回るしかないわけだが……徐々にこちらが捕捉されつつある。

さすがは代表候補生ってことだな。感心してる場合じゃないけど。

それに反撃するにしても、まずは接近しなきゃ話にならない。

……となると、俺の取れる手段としては『イグニッション・ブースト瞬時加速』しかない。

瞬時加速……これまた千冬姉に身体に叩き込まれた技能だが、後部スラスタ翼からエネルギーを放出、それを内部にとり込み圧縮、再び放出する。その際のエネルギーを利用し、爆発的に加速するという技術なのだ。

この加速があれば、もしあの衝撃砲が放たれても打ち負けずに接近できる……ハズ。

考えてみれば、こっちから鈴に一直線に向かえば射線は限定される。それにタイミングはあの球体が発光した瞬間だから、弾が見えなくても何とかなる……案外 悪い手じゃないかもしれない。

問題はコレが何度も使える手じゃないって事だよな……

つまり、この一回で鈴のシールドエネルギーを半分以上削れないと俺のジリ貧は必至。

そのための手段……それも俺の手の中にある。

俺のISの単一仕様能力『ワンオフ・アビリティ零落百夜』。 “自身のシールドエネルギー”

を雪片のブレードへと転換し、相手のバリアー残量関係なく切り裂いて本体に直接ダメージを与えられる。そこでISの絶対防衛を無理矢理発動させ、シールドエネルギーをゴリゴリ削るのだ。

千冬姉が世界最強の名を欲しいがままにしたのはこの能力による所が多かつたらしい。

ただ、コレを発動させると馬鹿みたいにエネルギーを喰うから諸刃の剣なだけだな。

この前のセシリア戦の時に急にエネルギーがなくなった原因がこれだ。あの時、調子に乗って無駄にミサイルとか斬らなきゃ俺の勝ちだったんだと。

まあ、今回は前回と違って、残りのエネルギー残量には余裕があるから瞬時加速と合わせても数回は使える。

となれば、後は覚悟を決めて……突っ込むだけだッ！

「鈴ッ！！」

「なによ！！」

「本気で行くからな」

「な、何を当たり前な事を言ってるのよ……。と、とにかく！格の違いってのを見せてやるから覚悟しなさいッ！！」

「……………」

「……………」

沈黙がアリーナを満たした。

鈴は青龍刀を構えたまま、顔を真っ赤にしてブルブル震えている。よっほど恥ずかしかったんだろう。こんな大勢の観衆の前で盛大

に噛んだからなあ。

だが、鈴が逆ギレして突っかかってくる前にこっちから仕掛ける！

「いくぞっ！！」

「！！」

背中に強い圧力を感じ、俺は一気に加速した。

急激なGに飛びそうになる意識を、ISの操縦者保護機能が防ぐ。

突然の加速に鈴が驚きつつも、俺に向かって衝撃砲を放つ……が、
今までの砲撃から弾速は大体把握している！

「ぜああああッ！！」

衝撃砲を斬り払い、追撃の暇を与えずに接近。

そのまま、鈴へと斬り込もうとした瞬間

ズドオオオオオンッ！！！！

凄まじい爆音と衝撃がアリーナ全体を揺るがした。

第7話 クラス対抗戦 開始（後書き）

読了感謝です。

一夏、お前……ハイスラで凹るわ……！（挨拶）

と言っわけで前編。

千冬姉の一夏補完計画は何年も前から始まっていたんだよッ……！

<な、なんだってー！？

そして、あとがき詐欺をしてしまいました……。

スーパー千冬姉タイムは次回へ繰り越しと相成りました。

楽しみにしてた方は申し訳ない。

後編は水曜日あたりにでも掲載します。

第8話 クラス対抗戦 終了、兄弟の想い

クラス対抗戦^{リーグマッチ}。

私は前回と同じく、織斑先生たちと管制室で試合を見ていた。

……何故か余計な奴も付いて来ていたが。

「あら、一夏さんの勇姿を見るなら会場で見ると、こちらの方がいいに決まっているではありませんか。特等席を独り占めなんてするんですわ」

「ぐっ、なぜ声をかけられた時にうまくきり返せなかったのだ……」

……私は！

「あのう……そもそも、ここは関係者以外立ち入り禁止なんですけどお……聞いてます？」

山田先生が何か言ってるが気にしない。

そも、関係者というのなら一夏の幼馴染である私が関係者でなくて、誰が関係者になるというのだ。

それはさておき、試合の状況はと言うと完全に一夏が劣勢である。顔にも余裕がないし、鳳の衝撃砲を避けるので手一杯といった感じだ。

むう、軟弱な。攻めなければ、そのまま負けてしまおうと言うのに……ッ。

「それにしても……一夏さん、ますます回避に磨きがかかってますわね。まだ、ISに触れてから二月と経っていらっしやらないのに……」

「まあ、あの訓練ならば納得いくがな……」
「……そうですね」

織斑先生の訓練はボロボロになってからが本番……とでも言うかの
ように只管扱かれるのである。

それが終わった頃には、大抵一夏はアリーナで虫の息になってい
たりする。

いくらなんでもやりすぎでしょう！ とセシリアと詰め寄った事
もあるのだが「私の方針に口を出すな。それに、私何からナニま
で面倒を見ているのだから問題ない」と言い切られて口をつむぐし
かなかった。

その時の事を思いだして、無意識に織斑先生の事を恨みがましく
見てしまっていた。

それはセシリアも同じだったようで……

パシーンツ！！x2

「……何か言いたいことでもあるのか？」
『なんでもありません！』

最近、叩かれる頻度が一夏より増えてきたような気がする。

というか、後ろに目でも付いてるんだろっか。さっきまでモニタ
ーを真剣に見ていたと言うのに……

そんな事をやっている間に、一夏は勝負に出るようだった。

短い口上。しかし、その覇気と真剣な顔は画面越しの私も顔が赤
くなるほど……そのっ、か、格好良かった。

普段は見せてくれないその表情……どうせなら私だけに見せ……

パアンツッ!!!x3

「3人揃って同じような思考を……私の前でいい度胸だ」

私とセシリアはともかく、山田先生も同じ事を考えていたのか織斑先生の出席簿スラッシュユ（一夏命名）の餌食となっていた。

織斑先生以外が頭を抑えて蹲っている……そんなシユールな状況の中、突如アリーナに閃光が奔り爆音が響き渡った。

「な、何が起こったんですの!?!」

「システム破損ッ! 何かのアリーナの遮断システムを貫通してきました!?!」

「織斑! 鳳! 試合中止だ! 直ちに退避しろ! 山田先生、すぐに観客席の隔壁を閉じてくださいッ!」

「は、はいッ!」

モニターには所属不明のISが出現と表示されているが、アリーナのステージは炎上し黒煙が立ち上っているため、その姿はこちらからは確認できていない。

しかし、その黒煙を切り裂き一夏たち目掛けてビームが発射された。

鳳が何やら一夏と言い合っていて反応が遅れ、あわや直撃するかと思われたが、一夏が横抱きに掻っ攫うことで回避した。

ドサクサに紛れて何をやっているのだっ!?

「一夏あッ!? ええいつ、くつつき過ぎだっ! ……ッ…ど、どうやら無事のようだな!」

「なあっ!? 鳳さんったらなんて羨ま……こほん。なんて威力……私のレーザーライフルの比じゃないですわね……」

「おそらくアリーナの遮断システムを貫通した物と同種ですね……。多少 威力は落としてあるみたいですが……。って、そんなことより織斑君、鳳さんッ！ 早くアリーナから脱出してくださいッ！」

あんなものが当たれば、確実にISの絶対防御を貫く。操縦者もただでは済まない。

しかし、一夏は山田先生の指示に従わず観客席にいた生徒達が避難するまで食い止めると言う。

「先生！ 私が救援に向かいますわ！！」

「ダメですッ！ オルコットさんのISは一对多向きです。他の救援部隊の人と連携すらとれないんですから、逆に戦力の低下になりかねませんッ」

「そんな……ッ」

「それに、見てください……遮断シールドがレベル4に設定されてる上に全ての扉の隔壁が下りてます……」

そんな……それでは避難どころか救援すらできないではないかッ！？

「なっ！？ まさか……あのISの仕業ですの？！ で、でしたら政府に救援要請をッ」

「既にやってます……でも、こちらのシステムをハックできるISですから、それすら妨害されてる可能性がありますね……。今、三年生の精鋭に遮断シールドのシステムクラックを要請しました……解除され次第、部隊を突入させます」

「……………」

不謹慎な上に失礼だが、山田先生は優秀なのだな……

クラスの皆からやまやとか、マヤマヤとか呼ばれて弄られてる普段の姿からは未塵も想像できないが。

「くっ、結局 待つことしかできないんですのね……ッ！」
「……っ」

本当に何もできないのか……？

私にも…私にだって何かできることが……ッ!!

居ても立つてもらわれず、気が付けば私は走り出していた。

せめて声だけでも伝えられる場所は……!!

その時、私も随分と焦っていたのだろう。

管制室に居るはずの人が居なくなっている事に気が付く事ができなかったのだから。

試合に突如乱入してきた、真っ黒な全身装甲フル・スキムの正体不明のISと対峙する俺達の口から漏れるのは文句ばかりだった。

「あああッ！ もっつ、何なのよ！ このバ火力と装甲は!？」

龍咆も全然効いてないじゃないッ!？」

「全くだ!　しかもあの図体で機敏に動くとかッ!！」

見た目はラピ　タのロボットに似てる気がする。腕とか長いし。

その長い腕を活かしてのダブルリアット……さらに、ビーム付きである。

そのビームや高速回転する腕を回避しながら、鈴が衝撃砲を撃ち、俺が突っ込む。

さつきからこの繰り返しだが、全身に付いた馬鹿みたいな出力のスラスターで無茶苦茶な回避をしゃがる。俺の瞬時加速なんて目じやないほどのGが掛かってるハズなんだが、平然とそのまま反撃してくる。

「はあああッ!！」

くそっ!　また避けられたッ!!

ホントに人間が乗ってんのかよッ……

つて、まさか……っ?!

「鈴」

「何?　無駄口叩く暇があったら、あのビームを黙らせなさいよ」

「アイツの動き……変だと思わないか?」

「変?　そりゃ、あんな化物スラスターが付いてるんだから意味分かんないぐらいに変な回避してるけど……」

「ああ、あんな機動を連続して何回もするなんて“人間業”じゃない」

「……ちよつと、何が言いたいのよ?」

「アイツ、本当に誰か操縦してるのか?」

白式に映し出される鈴の表情に動揺が走った。

「な、何をバカな事を言ってるのよ。ISは人無しじゃ絶対動かせない……そういう物なのよ?」

「……でも、それにしてもアイツの動きって機械じみてないか?」

接近する時はフェイントや旋廻などせずに、一直線に向かってくる。

まるで、そうとしかプログラムされておらず他の行動が取れないみたいだ。

攻撃にしても一定のパターンがある気がする。

それに、こうやって俺達が会話してる間は自分から仕掛けてくる事はしてこない……まるでこちらの話に興味を持ってるみたいに。

その疑問点を鈴に伝える。

少しの逡巡の後、鈴が尋ねてきた。

「もし、もしよ? 仮にアイツが人が操縦してない無人機だとして、それで勝てるっていうの? 攻撃が当たらない事には変わりはないのよ?」

「相手が無人機なら全力でこの零落百夜を使ってもいいからな、やれるさ。それに今度は絶対に当てる」

今まで手加減していた……なんて事はないんだが、雪片式型……いや零落百夜の威力つてのは高すぎる。

無人機相手なら最悪の想定をせずに済む。この年でタイーホ何て嫌すぎるしな。

「分かったわ。じゃあ、アレが無人機と仮定して攻めましょうか。

……で、私はどうしたらいいの?」

「ああ、俺が合図したらその衝撃砲を全力で放ってくれ……俺に」
「……あ、アンタってそういう趣味だったの!？」
「ばっ!？」 ち、違っッ! その衝撃砲のエネルギーを瞬時加速に回すんだよッ!！」

瞬時加速の速度は使用エネルギーに比例する。

鈴の衝撃砲のエネルギーなら今までの比じゃない速度になる……
それなら、いくらアイツのスラスタでも回避できない、ハズ。
まあ、ダメならもう一つの考えを実行するだけだ。

「でも、それってかなりの高等技術よ……一夏にできるの?」

「ああ、伊達に千冬姉の弟やってないって事見せてやるよ」

「……またそうやって千冬さんを引き合いに出すし(ボソッ」

「ん? 何か言ったか?」

「何でもないわよッ! いいわ、やってやるうじやないッ!」

もし失敗したら駅前の方ミレスで奢ってもらうからねッ!」

「あそこ潰れたけどな」

なんていつものように軽口をたたく。ま、何にしてもやる事は決まった。

後は実行するだけだ……と、突撃体制を取った俺の耳に飛び込んできたのは箒の怒声だった。

「一夏あッ!! 男ならその程度の敵、倒せないでなんとするのだッ!!!」

アリーナのスピーカーを通して聞こえてるらしい。

慌ててハイパーセンサーを駆使して中継室の方を見ると、無

残に斬り裂かれたドアと倒れ伏す審判とナレーターの様が。ピクリとも動いていない。

(……や、殺りやがったあー……ッ!?)

「な、何やってんだ馬鹿ッ!! すぐに救急車……いや、警察を呼べッ!？」

「? 何を言ってるんだ、お前は……というか、馬鹿とは何だ馬鹿とは!？」

「いいから、自首しろ……初犯だし、自首すれば執行猶予だって付く!!」

「まさか、こんな形で敵がいなくなるなんてね…… (恋敵的な意味で)」

「だから何の話だっ!？」

お前の足元に転がってる人達の事だよッ!?

そんな風に真昼に起こった大惨事を見てぎゃあぎゃあ言ってる俺達を他所に、例のアンノウンは筈に向けて照準を合わせていたのであった。

「!?!? 一夏ッ! アレッ!!」

「なっ!?!? 鈴!!」

「分かってるッ!!」

鈴の衝撃砲がスラスタから取り込まれ、一気に加速する……だが、このタイミングでは雪片を当てる前にビームが放たれてしまっ

……!

『一夏あッ!?!』

アンノウンと箒の間……つまり、ビームの射線上に身体を割り込ませる。

勿論、瞬時加速の中で反転なんて器用な事はできない。アンノウンに完全に背を向ける形だ。

あの一撃を受ければタダじゃ済まない……くっ、持ってくれよ、白式……!

そしてアンノウンから魔弾が放たれ

「私の目の黒いところは、一夏を傷つけることなどおぼせなッ……!」

そんな宣言と共に斬り払われた。

「ち、ふゆ…姉…？」

「ああ、私だ。良く頑張ったな」

打鉄を展開させた千冬姉が隣までやってきて、がしがしと乱暴に頭をなでてくる。

……急展開すぎて思考が追いつかない。

どういうこと？

「スマンな。本来ならもっと早く来れるはずだったんだが……隔壁が頑丈な上に数が多くてな」

「……ま、まさか……ピットからここまでの降りてた隔壁 全部壊したのか？」

「そうだ。まあ、私とお前の間を邪魔しようとしたモノの末路だと、いい見せしめにもなったのだ。何の問題もない」

言ってる意味は分らんが、怖いぞ千冬姉。

「さて、お前には鳳を横抱きにした件など訊きたい事が山ほどある……が、まずはアレを片付けてからだ。少し待っている、すぐに……終わらせるッ」

そう言うや否や、千冬姉は俺のとは次元が違う錬度の瞬時加速で

アンノウンに向かって行った。

「これはお前に殴られた一夏の分ツ！ これも！ これも！！
これも！！！ 全部、一夏を傷つけた……お前の罪だっ！！！！」

目の前でアンノウンが千冬姉の手によってスクラップにされている。
っている。

二人掛りであんなに苦労してた俺達の立場がないんだが……

「仕方ないわよ……千冬さんだもの」

「何という説得力……」

「っていうか、あんなにしているのかしら？ 解析とかしなきゃ
いけないんじゃないの？」

……もう遅い。

あーあ、叩き落とされた。

交戦から5分経ってない、か……

……はは、ホントにすげえったらありやしねーよ。

「……………」

「？ どしたの、一夏……そんな難しい顔しちゃって」

「……………いや、なんでもないさ」

ただ本当に立場がないな、と思っただけ。

ISを使えるようになって……今度こそ千冬姉を護れるって、そ
う思ったのに。

結局、こつやって千冬姉の後ろで護られてしまってる。

千冬姉の後ろ姿だけを見るだけの自分が嫌で、変わろうと思ったのに……っ！

俺がそんな風に悔しさを滲ませている間に、千冬姉がこちらにやっつてきていた。

「一夏、鳳……ご苦労だった。後の処理は我々に任せて、ゆっくりと休むといい。ああ、一応 医務室には行っておけよ」

「はい。ほら、行くわよ 一夏！」

「……ああ」

鈴はいつものように俺を促してくる。

たぶん、鈴は俺が落ち込んでる事に気付いてるだろう……それに、その理由も。

“あの時”俺が言った事をまだ覚えてるのかも知れない……

それでも、気付かない振りをしてくれるその不器用な優しさが、今の俺には嬉しかった。

ピットへと戻って行く鈴の後を追おうとしたその時、突然白式のハイパーセンサーが警告を訴える。

敵ISの再機動を確認！ ロックされています！

それが表示されると同時に、振り返る。

足をもがれ、腕も左腕しか残っていない状態でこちらに照準を合わせ、千冬姉ごと俺を狙っていた。

次の瞬間、放たれる光の奔流。千冬姉は山田先生に指示を出して、反応が遅れている。

気が付けば、俺は瞬時加速を使い、その光の中へ飛び込んでいた。光で埋め尽くされた視界の中、俺は確かに装甲を斬り裂いた

懐かしい夢を見ている。

気が付けば、真っ暗な部屋の中。

拘束されて、捕まっていた。

今日は世界大会の決勝戦……千冬姉に無理を言って応援しに来たのにこの様だった。

何とかして脱出しねえと……
そう思っ、もがいてみたが拘束は緩むことなく、むしろ余計
手に食い込んで来た。

抵抗する事にも疲れ、いつの間にか眠ってしまった俺は聞こ
えてきた爆音で目が覚めた。

それから数分後 突然扉が斬り飛ばされて、その先に肩で息をす
る千冬姉が見えた。

ああ、決勝戦に出られなくなっただな……直感的に思った。
ゴメン そう謝る前に、抱きつかれた。
無事で良かった。ただ、そう繰り返す千冬姉は泣いていた。

その顔が、酷く目に焼きついた。

ふわりと優しい匂いが鼻をくすぐる。
暖かく、柔らかな温もりに頭を預けている。

前にも、こんな事があつた気がするな……そんな事を考えながら、
薄っすらと目を開ける。

「……起きたか？」

「ちふゆねえ……？」

「ああ」

天井と千冬姉の顔が見える。

……どうやら千冬姉に膝枕されてるらしい。

……へっ？

「な、何やってんだよ！ 千冬姉……！」

「コラ、まだ動くな。別に恥ずかしがる事でもないだろう？ お
前が師範に叩きのめされた後はよくこうやっていたじゃないか」

「そりゃあ、そうだけどさ……」

恥ずかしいもんは恥ずかしい。

しかも何年前の話だよ、それ。

気恥ずかしさから、千冬姉を見る事ができず目を逸らした。

そんな俺を見てか、千冬姉は苦笑しているらしかった……が、す
ぐに真剣な眼差しで話しかけてきた。

「……なあ、一夏」

「ん？」

「どうして、あんな無茶をした？ あの程度の攻撃で私が遅れを取るはずがない事くらい分かっていただろ？」

「……………」

「心配、したんだぞ……………」

震える声でそう告げた千冬姉のその顔が、いつか見た物と重なった。

また…その顔をさせてしまった……………そう思いつつ、ゆっくりと身体を起こし千冬姉と向き合う。

「……………俺は、さ。いつも、千冬姉に護られてばかりだった。俺たち家族が二人きりになったときも、俺が誘拐されたときも……………そして、今回も。だけど、俺だって…千冬姉を護りたい。今まで、護られてきた分。今度は俺が守る番だって、初めて白式を動かした時、そう思った」

「……………」

「だから、あの時千冬姉が危険だと思った時にじつとなんてしてられなかった……………あのまま何もなかったら、俺はきつと後悔してた。千冬姉が無事だったとしても……………。でも、結局こうやって心配かけてるんじゃない……………意味、ないよな……………本当に、情けねえよ」

「……………ばかもの（ぎゅっ）」

そんな俺の自嘲気味の独白を聞いた千冬姉は俺を抱きしめた。

「お前は分かっている……………私が、どれだけお前と言う存在に護られているか、救われているのかを」

「千冬姉……」

「一夏……お前の気持ちは嬉しい……だが、無茶だけはしてくれ
な……お前がいなくなったら……私は、私は……ッ！」

「……ゴメン」

俺を抱き締めている千冬姉は、いつもとは違いどこか弱々しく見
えた。

小さく震えるその肩を、俺は強く抱きしめる事しかできなかつた。

強くなるう。

力だけじゃなく、心も。

もう千冬姉にこんな顔をさせないためにも。

そう、改めて決意した。

と、ここで綺麗に終われたらよかったんだけどな。

「さて、一夏……？ お前には鳳を横抱きにした件について訊きたい事がある」

「は？ いや、あれは緊急事態だったし……」

「うるさい。口答えをするな（むに」

「ひゃい……」

「ああいう場合は蹴飛ばして射線上から外せ……いいな？ ま、

まあ……あそこに居たのが私の場合のみ許す」

「……」

こんな感じでたつぷり2時間ほど、頬を引っ張られたまま説教（？）を喰らうのであった。

第8話 クラス対抗戦 終了、兄弟の想い（後書き）

読了感謝です。

一夏……頼むから、もげてくれ（挨拶）

千冬姉無双！ 二重の意味で。

ちなみに、ヒロインズは保健室の前でミツメテたりしますw

今回は事後処理やらなんやらの閑話。

皆が大好きな僕っ娘と黒兎さん達は出ませんのであしからずw

では、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

第9話 塩コーヒー×整備室×お引越

） IS学園地下 ）

IS学園の地下50mにある特別区画の内の一室。

私は先ほど終わった解析結果を持って入る。……といっても、何も解らなかったと言う事が分かっただけなんですけどね……

「失礼します」

「山田先生……解析の方はどうでした？」

「はい、やっぱりアレは無人機だったみたいです。どのような方法で動いていたかは不明……織斑君の攻撃で機能中枢も焼切れてますから、修復も無理みたいです。それにコアは……」

「未登録の物、か……」

「！……心当たりがあるんですか？」

「……私は確実にISの両腕と両足を斬り落としました。しかし、見てください。最後の砲撃の時 腕が再び接続している……」

織斑先生が見つめるディスプレイには先ほどの戦闘映像が映し出されていた。

確かに斬り落されたはずの腕がくっついている。

「そんな……確かにISには自己修復機能がついています。でも、あんな短時間で修復できるものじゃないですよ……」

「ああ、現行の技術ではそれは不可能だろうな。だが、現実にくっついて存在している」

無人機の遠隔操作もしくは独立稼動、リモート・コントロール スタンド・アロン、それに異常なほどの修復能

力……そんなのが作れる企業、国はない……でも、個人なら？
人しか、いませんよね……

「篠ノ之博士……」

「まあ、十中八九そうだろうな……一夏を危険な目に遭わせるとは……フッフ、どうしてくれようか」

「ああっ、織斑先生が持つてるコップに痺ひびが……っ!？」

「ご愁傷様です、篠ノ之博士……きつと、あのコップみたいに掴まれちゃうんでしょうね……あうう、想像するだけで痛いです……」

「そもそも、アイツは一夏の事を馴れ馴れしく、いつくん、いつくんなどと呼びおって……羨ま……んんっ、けしから（ry）」

「うわぁ……ブラコン全開ですね、織斑先生。」

「私は一人っ子だったからよく分からないけど、確かに織斑君みたいなカッコいい弟がいたら私もあなっちゃんのかも。」

「もし私がお姉ちゃんだったら、なんて呼ばれるんだろ……織斑先生みたいに『真耶姉』かな？ それとも『お姉ちゃん』とか『姉さん』？ ああでも、織斑君にはそのまま『真耶』って呼んでもらいたいかm」山田先生……?」……あ。

ゴゴゴゴゴゴゴ

!!!!

「あ、あはは……隣からすごいプレッシャーがしてます……」

「私の一夏を使って好き勝手に妄想するとは本当に言い度胸だな？」

「い、いいえ！ わ、私は別にそんなつもりはッ!？」

「フッフ、そのように頭を使ってさぞお疲れでしょう？ そっい

う時は塩分を取るといいらしいですよ？」

「へっ？ それを言うなら糖分なんじゃ……」

織斑先生は私の分のカップにコーヒーを入れるとそこに大量のお塩を入れ始めた。

っていつか、なんで塩がこんな所にあるんですかあっ!?

ああああ!？ そんな大匙で山盛りにッ!？ それコーヒーじゃないですッ!! 真っ黒な飽和食塩水ですよ!!?

「さあ、死を(塩)くれてやろう!」

「ひいひいっ!？ 飲めませんよおっ?! 塩分過多で死んじ

やいますッ!？」

「そうだな」

しれっと言わないでください! って、そんな近づけちゃ……い、嫌ああー……ッッッ!?!?!

例の無人機事件から数日。

俺は今、IS整備室にやってきている。

……そんな所があったのか、と言って千冬姉に叩かれた事はさておき。

なんで俺が整備室にやってきているかと言うと、鈴との試合が有耶無耶になってしまったから、仕切り直して事で模擬戦をしたんだが……どうにも白式の燃費が悪い所為でこちらが決める前にエネルギー切れになってしまった。イグニッション・ブーストを見切られてしまったのが痛いよなあ。まあ、俺がもつとうまく使えれば問題ないんだろうけど、その前にエネルギー切れになっちまったらどうしようもない。そんなわけで千冬姉に相談してみたところ、ここで調整しろと言われたのだ。

ちなみに千冬姉はついてきていない。現役の頃から整備に関しては苦手だったんだと……まあ、千冬姉って機械とか苦手だったしなあ。いつだったか、洗濯機の前で一時間ほど頭捻ってたし……

そんな訳で言われるがままにやってきたんだが、ISに関する知識の乏しい俺がどこまで調整できるか甚だ疑問である。一応、2年の整備科に配られるマニュアルとか渡されたんだけど……さっぱりだ。

むむむ、こんなことならセシリアとか鈴とか連れて来るべきだったか。専用機持ちなら、この辺りの知識もあるだろうし。でも、箒も含めて今日に限ってどこにもいなかっただんだよなあ……3人で遊びにでも行ってるのか？

「あー、おりむーだあ〜」

はあ、どうしたのか……と頭を悩ませているところに聞き覚えのあるのほんボイスが。

「あれ？ のほんさんとさとさとさん……新聞部1年エースの」

「うー、それ恥ずかしいからやめてよお……」

「あ、すまん。それで二人はどうしたんだ？」

基本的にここを使うのは専用機持ちと2、3年生ぐらいだ。まあ、別に入るのが禁止されてるわけではないから問題はないんだけど。

「てひひ、今日はかんちゃんのお手伝いなんだよー」

「かんちゃん?」

相変わらずのほほんさんの付ける渾名は独特だな。

「あ、本音ちゃんが言ってるの更識せいしきさんの事……って言っても分からないよね……4組のクラス代表の子なんだけど……」

「あーそうだな。クラス対抗戦で会ってたなら分かったんだろうけど……」

「ちゅーしになっちゃったもんね」

あの後、対抗戦は例の襲撃事件の所為で中止となってしまった。

あの無人機についても箝口令がしかれ、俺なんかは直接やりやったわけだから誓約書まで書かされた。

そういえば、誓約書を持ってきた山田先生が終始涙目だったのはなんだつたんだろうか? ……いつものことか。

ん? 4組? 4組って言えば……俺等以外で唯一専用機持ちがいるクラスじゃなかったか?

「うん。更識さんのことだね。日本の代表候補生でもあるんだよ」

「へえ、そうなのか。つまり、その更識さんの専用機の整備の手伝いってわけか」

「あ、そうなんだけど……まだ、専用機は完成してないの」

「へ? なんでだ?」

「それはねー、おりむーの所為なんだよー」

何故に。

俺は何もしてないぞ？ …… たぶん。

「更識さんの専用機って倉持技研が担当してるんだけど……」

「あそこの人達は皆おりむーのISに『ハア ハア ハア』してるからねー。かんちゃん機体がほったらかしにされてるのさ」

「ぐぬっ、確かに俺の所為でもあるか……あと、その言い方はやめなさい」

「はい」

素直でよろしい。

それにしても、俺の知らない所でいるんな人に迷惑をかけてるんだな……つか、倉持技研も白式にしか手が回らないわけでもないだろうに、何やってんだあの人等。またISについて壮大な討論でも繰り広げてるんだろうか

くく

「白式は私の婿」

「何を言っている白式は私の横で寝てるのよー！」

「むしろ打鉄×白式とかどうよっ？」

「『このブレードをどう思うっ？』『すごく……大きいです……』……どうですか、分かりません」

「そうして、お互いのブレードでツキ合うような関係になるのね

……ッ！？ 濡れるわ……！……！……」

「主任！ 早速薄い本を書こうと思うんですが、大丈夫ですか？」
「大丈夫よ、一番いい絡みを頼むわ！！」

〃

……変な電波を受信してしまった。頭痛が痛いとはこういう事を言うのか。

「どうしたの、織斑君……顔色 悪いよ？」

「あ、ああ……なんでもない。それより、俺もその更識さんに会わせてもらってもいいか？ 何か迷惑かけちゃったみたいだし」

「おー、おりむーはえらいねー」

いいよー、なんて言いながら整備室の奥の方へとぼてぼてと歩いて行くのほほんさん。

「そういえば織斑君はなんでここに？ いつもは篠ノ之さん達や織斑先生と一緒になのに、一人なんて珍しいね？」

「あー、白式の調整に来ただけど、さっぱり分かんなくてさ……今日に限ってセシリア達もいないし……」

「そうなんだ……あ、なら先輩に頼んでみようか？」

「？ 先輩って…… 黛先輩の事か？」

「うん。先輩 2年整備料の工ースらしいから……」

なんて事を話しながら、俺達ものほほんさんの後をついて行くと

……

「じゃあ、こっちやってあげるね」

「や、やめて……私だけでやるって……言ってるのにな……」

「私はおじよーさまの専属メイドだから手伝うのは当たり前なんだよー」

「お嬢様はやめて……」

「はい」

そこにはのほほんさんに振り回されて、わたわたしてるメガネをかけた娘がいた。

あの娘が更識さんなのだろう。つか、のほほんさんが言ってるお嬢様だかメイドだかは何なんだ？ とりあえず、のほほんさんがメイドやつても仕事は捗りそうにないけども。逆にフォローする人の手間が増えるだけなんじゃ……

「あー、おりむー今 しつれーな事考えたでしよー！」

ぱしばしとだぼだぼな袖ではたかれる。

ここはいろんな機材があるんだから、袖は捲くっておきなさい。

「織斑君、お母さんみたいな事言うんだね……」

「それほどもない。つと、君が更識さん？」

「……う、うん……」

「ごめんっ！ 何か俺の所為で君に迷惑かけちゃったみたいで……今更かもしれないけど、本ッ当にゴメンッ」

いきなり頭を下げた所為か、更識さんは目を白黒させている。それでも、言いたい事は分かってくれたようだ。

「…え、あ……そ、そんなに謝らなくても……いい……別に、織斑君だけの所為じゃ……ないし……」

「それはそうかもしれないけど、はじめは付けたいからな」

「おおー。おりむーが珍しくまじめだ」

「そうだよな。いつもなら「ですよなー」とか言ってるにね」

「そ、そうなの……？」

台無しだった。

とまあ、こんな感じで更識さんと知り合ったわけなんだが、何故かその更識さんに白式の調整を手伝ってもらっている。

「何か…ホントゴメンな……」

「ううん…私の方もその、行き詰ってたし……それに白式のデータも…参考になるし……」

「おりむーはダメダメだねー」

「うぐう、言い返せん……」

何をしたらいいかさっぱりだった俺は、悪いと思いつつ更識さんにアドバイスを貰っていたんだが気が付けば白式の調整がメインに

なっていた。な、何を言ってるのか以下略。

そして白式の操縦者たる俺はというと、その調整に関しては授業外でISにほとんど触れる事すらないのほほんさん達にすら及ばず、機材を運んだり、データを持っていつたりと雑務しかできない役立たずに成り下がったのであった。

「んー、やっぱりこれ以上は無理かもー。あんましやっちゃうと機動力が落ちちゃうよー」

「そうだね。でも、エネルギー効率は5%ぐらいは改善したんじゃないかな？」

「おお！ 何をどうやったかは分かんなかったけどありがとう！」
「……ISの最適化はすごいけど、ちゃんと調整してあげないと、バランスが悪くなる……」

「まー、おりむーはブレードしかないからねー。スラスター出力と零落百夜にエネルギーを振るっていうのもー間違いないんだけどー」

更識さん達曰く。

俺の白式は機動力と攻撃を重視した物に自己進化して行ってるらしい。定期的にフラグメントマップを見た方がいい、というありがたいアドバイスもいただいた。

フラグメントマップってのは……えーと、パーソナライズによる自己進化の道筋……と、このマニュアルには書いてある。つまり、これを見れば自分のISがどんな風に自己進化してるかが分かる訳か……。だけど、肝心のフラグメントマップを読み取れるようになるまで、時間が掛かりそうだな……頑張ろう。

ま、ともかく。これで少しは燃費も良くなったことだし、もう少し鈴に喰いつければいいんだけどな……。いや、その前にイグニッション・ブーストの練習が先だろうか？ 反転とか、そのままターン

できるようになると戦術の幅が広がるしな。
などと、次の試合の事を考えていると

「あつ！ もうこんな時間だ……ごめんね、私先輩に呼ばれてるから片づけるの任せてもいいかな？」

「ああ。後は俺が片付けとくよ。のほほんさん達はどつする？
終わりにするんなら俺が片付けておくけど」

というか、本気で申し訳ないんで片付けぐらいさせてくれ。
そつ言つとすぐさま喰いつく、のほほんさん。

「やたつ。それじゃ、よろしくねー」

「ホントにありがとな。更識さんはどつする？ 終わるんなら更識さんのも片付けておくけど」

ととととと走り（？）去っていくのほほんさんを見送りながら更識さんに訊く。

「あ……私はその、続きをやるから……」

「そつか。じゃあ、こつちだけ片付けるな。あ、他に持ってきてほしい物があったら言ってくれよな」

「う、うん……」

よし、それじゃあ片付けるとしますか。

織斑、一夏……世界で唯一の男性のIS操縦者。
私のIS『打鉄式』の完成が遅れている原因。
でも本当は……織斑君の所為じゃないって分かってる。これは、きつとただの八つ当たり。本当は自分で望んで一人でやろうと思ったから。

……姉さんみたいに。
昔から、一人で何でもできた……自慢の姉。

でも、私は……そうじゃないから。いつも、姉さんと比べられて……“あの”目で見られる。失望、諦観、嘲笑、いろんな負の感情が浮かんだ、目。誰もが、姉さんを通してでしか私を見ていない。だから、いつしか私は心を閉ざしていた。そして、できるだけ姉さんと関わらないようにした。そうすれば、傷つかないですむ……それに、姉さんだって私みたいな妹なんて……

「さん？ 更識さん、どうかしたのか？」
「ふえ！？」

いつの間にか、考え込んでいたらしい。
織斑君が心配そうにこちらを見てきている。
というか……

「か、顔っ……近い……っ」
「あ、ごめん」

い、いつもこんな風にしてるんだろうか、この人は。
本音はお姉さんがいる男の子は異性に疎くなるって言ってたけど、
本当だったらしい。

織斑君のお姉さん……織斑 千冬先生。ISの操縦技術では他の
追隨を許さず、世界最強の名を手に入れた……姉さんと同じ領域に
いる天才の一人だろう。

……織斑君は……なかったのだろうか。私みたいに比べられた事が、
あの目で見られたりした事が……

気が付けば、私は織斑君に尋ねていた。

織斑先生と比べられて、辛かったりしなかったのかと……

「んー、そりゃあるに決まってる。元々、俺なんてそんな素行が
いいと言えなかつたし、千冬姉と比べられてバカにされた事だっ
てある。まあ、その後 千冬姉までバカにしゃがったからぶん殴っ
てやったけどな！」

……そ、そんな胸を張って言われても、困る。と言うか、アグレ
ッシブすぎ……

「……確かに比べられたり、バカにされたりするのが辛いつてこ
ともあった……けどさ」

織斑君はさっきまでのおどけてた態度を一変させて、真剣な目を
する。

「俺が千冬姉の事を好きなこととか、憧れてる事には関係ないん
だよ。だから、俺は千冬姉の弟として恥ずかしくないように努力す

る。……それで今度は、俺が千冬姉を護るんだ」

「……そう、なんだ……」

まだ、全然だけどな。そう言っただけ。姉さんから……そして、自分からも……

「そんなことないだろ？」

「え……？」

「更識さんが打鉄式を自分で完成させようとしてるのだから、そのお姉さんに追いつこうと思ってる事なんだから……まあ、俺の所為つてのが多分に含まれてるけど」

「……」

「ISの開発とか、整備とか俺はよく分からないけど……その更識さんの気持ちは分かるから。俺に手伝える事があれば何でも言ってくれよ？ 一人で頑張りたいたいのも分かるけど、無理したら元も子もないだろ？ そんな事してたら、のほほんさん達も心配する……勿論、俺だつて心配するぞ」

「……う、あ……」

う、顔が火照ってるのが分かる……

真剣な目をしたまま、そんな言葉をかけてくれる織斑君に、私は曖昧に頷く事しかできなかった。

その後、織斑君は片付けが済んだみたいで私に声をかけてから整備室から出て行った。

それを少し残念に思いながら、私は再び打鉄式に向き合った。

「私……頑張るから……」

織斑君みたいに胸を張っていう事はできないけど、私も姉さんに追いつきたいから……そして、昔みたいにお姉ちゃんと笑いあえるようになりたいから……。

そして、私は空間投射ディスプレイを呼び出してキーボードを叩き始めた。

そのタッチは心なしに普段よりも軽いものだった。

更識さんと知り合った日の夜。

千冬姉の夜の補習授業も終わり、二人でゆっくりしているところだ。

それにしても、久しぶりにこんなにゆっくりとした時間を過ごしている気がする。

入学してから2ヶ月、なんとというかイベントが目白押しだったしなあ……望んでもいなかったが。

俺としては、もっとゆったりと事を進めて行きたいんだけども。

……無理かなあ……無理だろうなあ。何を隠そう、俺はトラブルの達人なのだ（巻き込まれる方の）

「どうした一夏……そんな顔をして」

「いや、なんでもないよ」

心配そうな顔でこちらを見ってくる千冬姉。

むう、そんな心配されるような顔してしまっただらうか？ 筭たちにも考えてる事が顔に出るとよく言われる。くだらない事を考えてる時とか特に。

そういえば、千冬姉と同じ部屋で寝るようになってからも2ヶ月になるんだな……毎朝、寝ぼけて俺のベッドに入ってくるのはそろそろやめてほしいんだが。

「無理だな」

ばっさりだった。

入ってくるだけならまだしも、その時の服装が……なあ。

おれのシャツだけ羽織っていたり、下着だけとか……俺をなんだと思ってるんだよ……

まさか、俺以外にもこんな風は無防備なんじゃないだろうな……？
気を付けなければ！

「安心しろ。お前の前 以外でするつもりなんてない」

そんな胸を張って言われても、反応に困る。

まあ、千冬姉はそんな俺を見て楽しんでるようだったが。

なんて千冬姉と雑談をしていると、コンコン、とドアが控えめにノックされた。

誰かが来たらしい。こんな時間に珍しいな。

「チツ、誰だ一夏との時間を邪魔しおって……」

などと愚痴をこぼす千冬姉の後を追って入り口の方に向かうと、部屋の前にいたのは山田先生だった。

「あ、あああのツ、夜分し、失礼します!？」

「そうだな。失礼だから、早々に立ち去るといい」

「いやいや、千冬姉 何言ってるんだよ。何か用があるんですよね?」

「うう……はい……あの……その、ですね……怒らないで、聞いてくれますか？」

「事と次第によつては容赦はしない」

「ぴいつ!？」

ギロリと山田先生を威嚇する千冬姉。

「怖がらせたなら、話が進まないじゃないかよ……。大丈夫ですよ、山田先生。別に怒りませんから」

「ホント、ですか? 嘘だったなら、泣いちゃいますよ……?」

「はい、もちろんですよ」

怒りませんよ、俺は。

千冬姉はその限りではないです、はい。

果たして山田先生のスキルが低いのか、俺がうまく表情を隠せたのかは分からなかったが、俺の内心を知らずに安心して話し始める山田先生だった。

「織斑君に寮の部屋が用意できたので、お引越しになったんですよ」

「あ、そうなんですか」

「……………(ピキ)」

キタ。一人部屋キタ！ 早……くはないけど、メイン一人部屋来た！ これで勝つる！！
もうちよつと力カツと用意できるものだと思ってたけど、えらく時間が掛かったんだな。
まあ、なんにしても移動するんだから部屋を片付けなきゃな。

「待て、一夏！ 部屋を移動する必要などないッ！ お前は私と……ッ！」

「お、織斑先生……でも、そうしないと明日来る転校生さん達の部屋がなくなっちゃうんですよお。ほら、昨日職員会議で言われてたじゃないですかッ」

「知るかッ！ ラウラとそのもう一人を同じ部屋に押し込めればいいだろう！ 男だろうが関係あるかッ！ 軍人はそのような事を気にしないッ」

「そういう問題じゃないんですよ……」

千冬姉の剣幕に押され、涙目になってしまふ山田先生。

もはや、その顔がデフォなんじゃないかと最近よく思う。

まあ、このままだと話が進まないから千冬姉を宥めるとしよう。

「千冬姉、そんな心配しなくても大丈夫だって。朝も自分で起きれるし、弁当もちゃんと作るからさ」

「違うッ！ 私が言いたいの……っ！」

「ん？ ああ、そうか。ちゃんと部屋の掃除もしに来るから安心していいぞ」

「……っ」

「あだあつ！？」

無言で殴られた！？

「ふん、お前がそう言うのなら好きにするがいい。……私も好きにさせてもらおう」

「？」

「じゃ、じゃあ織斑君は準備をして、この部屋に行ってくださいね？」

「あ、はい。わかりました」

よく分からないが、許されたらしい。

何か最後ボソツと言った気がするけど、訊いても教えてくれないんだろうなあ……。

とりあえず、山田先生から鍵を受け取り片付けを始める。

が、千冬姉と山田先生の話は続いているようで……

「じゃ、じゃあ私は事務系の仕事があるのでこれで！」

「まあ、待て。そんなに急いでどうする。ゆっくりしていけばいいではないか、なあ？」

「ひうつ！？ で、ででも仕事が残ってますし！」

「フッフ、明日からは山田先生も実機を使って講習するからな。

みつともない姿を晒さないように、きつちりと私が指導してやるわ」

「あ、あれ？ 聞こえてないッ！？」

「ふむ、いまなら第2アリーナが空いてるな……では、行くぞ」

「あつあつあつあつあつ……」

そのまま、ずるずるとドナドナされていく山田先生。ご愁傷様です。

さて、準備も済んで新しい部屋に着いたわけなんだが、荷物を置いたところで来訪者が。

『『『……………』』』』

どこから聞きつけて来たのか、やってきたのは箒、セシリア、鈴の三人だった。

そして、何故か何も言わずに顔を赤くしてこちらを見るだけだ。風邪か？ 季節の変わり目だからな、体調管理には気を付けなきゃいけないぞ？

「別に風邪なんてひいてないわよっ！！」

「そ、そうですわ！」

「そうなのか……………で、何しに来たんだよ？ あ、何か用があるなら、部屋に入るか？」

「ここがいい！」

そうは言うものの、全く話そうとしない三人。なんとというか、お互い牽制しあってるような、そうではないような。よく分からん。

「……………っ、一夏！ 月末の個人トーナメントの事だな！」

「あ、抜け駆けはなしですよ！？」

「はあ、何なんだよ……………」

三人は声を合わせて（たぶん偶然だろう）

『 『 優勝したら
』 』

「 したら? 」

『 『 『^{アタシ}私と付き合ってもらおう(わ)(います(!!!!)』 』

.....はい?

よく分からないが、買い物かなんかに付き合う事になるらしい。

なんでわざわざ自分でハードルをあげるんだ? こいつ等は。

別に時間さえ合えば、いつでも付き合っただるのにな.....なんて、本人達に言わせれば的外れな事を考えながら、俺はとりあえず分かったと言っに留まるのであった。

第9話 塩コーヒー×整備室×お引越し（後書き）

読了感謝です。

首置いてけ！ なあ、一夏だ！！ 一夏だろう！？ なあ、一夏だ
ろ おまえ！！（挨拶）

というわけで、事後処理と言う名のやまや弄りとかんちゃんの登場
でした。

あと、中国が対千冬姉同盟に加盟したようです（笑）

校正完了しました…… 本当にご迷惑をおかけしました。

第10話 転校生二人と手料理

さて、引越しも終わり、筭達からよく分かん宣戦布告を受けた翌日のHRこと。

昨日、山田先生が言っていたように転校生が来た。

このIS学園に転校してくるって事は、確実に女子である。

ああ、また肩身が狭くなるのか……なんて思っていた時期が俺にもあったワケだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。まだこの国では不慣れな事も多いと思いますが、よろしくお願いしますね」

だが！ 内一人は男だった！！

中性的な顔立ちの金髪の美少年。まさに、貴公子と言った風貌である。

「き、キターー！！」「メイン男子キターー」「早い、もう二人目か！」「これで勝つるー！！」

そんな彼の登場にクラス中大騒ぎである。

手を取り合って喜んでる娘達もいる。……哀れな。

「うるさい、黙れ」

スコーンッ！！

千冬姉のチヨークが火を吹いた。

一瞬で20人以上の額を撃ち抜いてしまった。千冬姉、絶対モンド・グロツソの射撃部門でも優勝できるだろ。セシリア以上の精密

射撃だな。

そういえば、別に騒いでもなかった筈達も撃ち抜かれてるのは何でだ？

「私がない間に余計な事をしでかしおったからな。あとで鳳にも制裁に行く」

……よく分からん。

それはともかく転校生の方はというと、こっちのテンションに付いていけないのだろう。目を白黒させている。

……？ でも、もう一人の方の転校生（こっちは女の子）は特に動じる事もなく、何故かこっちをじっと見つめてきてる。

「……………」

腰の辺りまで伸びた綺麗な銀色の髪に黒い眼帯。

はて？ 初対面のはずだけど、どこかで会った事でもあるのか？ もしくは、更識さんみたく気付かない内に迷惑かけた娘だとか……？

などと心当たりを探しつつも、見つめられることの居心地の悪さに頬を搔く。

そんな俺達の様子に気付いたのか、千冬姉が自分で起こした惨状をそのままに自己紹介を続けさせようとする。

「……………挨拶を続けろ、ラウラ」

「……………ラウラ・ボーデヴィツヒだ。よろしく頼む」

「……………え、えーっと……………以上ですか？」

簡潔な自己紹介に山田先生が小動物のようにビクビクしながら、ラウラに尋ねる。

……いや、確かに軍人然とした鋭い雰囲気は放ってるけど、そこまで怯えるほどの事でもないだろうに……とか思ってたなら「では、一つだけ」と前置きをしてつかつかと俺の前まで来てビシッと指さして来た。

まあ、来るんじゃないかと思ってたよ。

「織斑一夏……私は認めんぞ！」

「……何をだよ」

いきなり全力で否定されて、若干言葉に棘が出てしまう。しかし、ラウラは気にした風もなく一層強い口調で続けた。

「お前が……お前が教官の“嫁”などと！ 私は絶対に認めんツ
！……！」

『……………』

なんとも言えない空気が教室を満たした。

何で男の俺が嫁？

「馬鹿者。それを言うなら婿だ」

「そっだよな」

「あ、特に否定はしないんですね……というか、織斑先生もまんざらでもなさそう……」

まあ、たぶん俺が千冬姉の弟として相応しい実力がない事が不満ってことが言いたかったんだろうなあ。

嫁云々ってのは、まだこっちに着たばかりで日本語に慣れてないんだろう。

なんて事を考えていると、ようやく我に帰ったのか呆然としていた篤とセシリアが騒ぎ始めた。

「な、なな何を言ってるのだ！ 一夏は断じて嫁ではない！ ましてやむ、婿など……ッ！ いや、いや、そのいずれは篠ノ之神社の神主として（ry）」

「そうですねっ！！ 一夏さんがお嫁さんなどと……などと……（一夏さんがエプロンをして私を出迎える……）わ、悪くはないですわねっ」

何言ってるんだよ……特にセシリア。

だが、そんな二人も千冬姉が出席簿を投擲する事によって再び沈黙した。

すげえ、ジャイロ回転しながら二人の額に突き刺さったぞ。今度からアレを出席簿マグナムと呼ぼう。

そんな二人を特に気にする事もなく、ラウラは怪訝そうな顔をしながら尋ねてきた。

「む。しかし、クラリツサが言うには日本では気に入ったものを『嫁にする』と言うのが習わしだと……」

「いや、確かに間違っていないかもしれないけど、一般的ではないからな？」

かなり局所的な文化だと思っぞ。

「……そうなのか。一般的ではないと言うことはより特別な呼称と言っわけか……やはり奥が深い日本の文化は」

うむうむと一人で感心してしまっている。

……まあ、いいか。否定するにも骨が折れそうだし。

何にしても、いきなり認めないと言われた時は何かと思ったけど、そんなに悪い奴でもなさそうだな。

となると、俺がすっかり千冬姉の弟として恥ずかしくないって事を認めさせてやればいい……なら、やってやるさ。

「ふむ、ではこれでHRは終了とする。次は2組との合同のISの実習だ。各自、さつさと着替えて第二グラウンドまで来るように……つと、そうだ織斑。デュノアの面倒はお前に任せたからな」

「わかりました」

「うむ。……さて、2組に行くとするか」

そう言っって千冬姉は指の間にチョークを挟んだまま教室を出て行った。

つと、ぼーつとしてる場合じゃない。さつさとシャルルを連れて移動しなきゃな。

「えつと、君が織斑君だよな。初めまして、さつきの紹介でも言っただけ」

「いや、それは移動しながらにしようぜ。今から女子が着替えるからな……」

「？」

「……何で不思議そうな顔してるんだ？ ほら、案内するから付いてきてくれ……えつと、シャルル、でいいか？」

「へ？ あ、ああ！ うん！」

「俺の事も一夏って呼んでくれればいいぞ」

言いながら、廊下に出る。

笑顔で頷くシャルルが俺の後についてくる。
そのシャルルが何かぶつぶつ呟いてるみたいだったが、その声は2組の教室から聞こえた声によって掻き消されたため、俺の耳に届く事はなかった。

「ひにゃあああああああ!!?!?」「」

あ、断末魔。

南無。成仏しろよ、鈴。

そうやって手を合わせる俺に、シャルルはただ首を傾げているのであった。

「はい、じゃあHRはこれで終わりです。次は第2グラウンドの方で1組と合同実習だから遅れないように」

というわけで、HRが終わった。

一組と合同って事は、担当は織斑先生か……早く行かなきゃね

そう思って、私ことティナ・ハミルトンは自前のISスーツに着替えようとしていた所で、思わぬ珍客が教室のドアから入ってきた。

「失礼する」

「あれ？ 織斑先生何かあつたんですか？」

「いや、少し鳳に用があつてな」

いつも通りのクールビューティーな織斑先生は何でもないかのよ
うに、担任の一柁原先生（29歳 独身）に告げる。

鈴に？ そういや、昨日部屋に帰ってきた途端ベッドにうずくま
ってキヤーキヤー言つてたけど……アレに関係あるのかしら？

ちなみに、その様子はずっと携帯で動画を撮つておいた。

あとでクラスの皆と一緒に存分にニヤニヤしようと思う。

「？ アタシに……つてえ！？ 千冬さんなんでチヨーク持つて
るんですか！？」

「織斑先生だ なに、昨日一夏に余計な事を宣言したと聞いて
な……制裁が必要だろう？」

そう言つちや否や、手に持っていたチヨークがものすごい速度で投
擲され、鈴に殺到していく。

「り、理不尽過ぎよーッ！？」

カンッ！

でも、腕の部分だけISを展開させた鈴はその魔弾を防いでいた。
専用機持ちつて便利ねえ……。というか、部分展開も特定の場所
以外じゃ展開禁止つて条約で決められてなかつた？

「ほう、部分展開で防ぐか」

「そう簡単にやられるわけにはいきませんか!」

「だが、その程度で防げると思ったか?」

「うえっ!?!」

ズガガガッ! と、まるで削岩機のような音を立てながら、鈴のISに次々へちヨークが叩き付けられる。

あのチヨーク何でできてるんだろ。ISの装甲削られてるんだけど。

というか、この光景をアメリカのブリュンヒルデは近接しか能がないとか揶揄してた連中に見せてやりたいわ。

あ、防ぎきれないわね、これは。

「(スコーンツ!!) ひにゃあああああッ!?!」

「フ、これでよし。騒がせましたね、榊原先生」

「え、あ、はい、ご苦労様でした?」

そして悠然と去っていく織斑先生。

教室には呆然と立ち尽くす、先生と生徒。そして、額の痛みによってゴロゴロと転がっている鈴が残された。

うん、実にカオスな光景ね。

頑張んなさいよ、鈴。

あんたはあの織斑先生を超えなきゃいけないんだから……などと、遠い目をしながら私は着替えるのであった。

さて、更衣室に至るまでとアリーナに至るまでに様々な障害に苛まれた俺とシャルルだったが、何とか授業が始まる前にアリーナに到着する事ができた。

そう言えば、更衣室では始終シャルルに見られていたような気がするが何か俺変なモノでも付いてるんだろうか。……ん？ 今、漢字じゃなくてカタカナに変換されたのがあったような……？ まあ、いいか。

それにしても……

「何でそんなに俺を睨んでるんだよ……」

先ほどから、篝達がギロリとこちらを睨んできている。
これが所謂殺意の波動か……。

「うっさい！ アンタの所為で額打ち抜かれてんのよ、こっちは
！……」

「何で俺の所為なんだよ……文句なら千冬姉に言えよ」

「返り討ちになるに決まってるじゃないッ！」

そりゃそつだ。

なんて事を話していると千冬姉がやって来た。

「全員揃っているようだな。では、格闘及び射撃を含む実機訓練に入る。だが、その前に実演を見てもらう　　オルコット！　鳳！」

「はい！」

「分かりましたわ。フフ、鈴さん……貴方とは一度決着を付けたと思ってましたの」

「……いつぞや、戦ったら勝つとか言われた事まだ根に持ってたのかよ」

「ね、根に持ってたなどないですわ！　私はただ同じ代表候補生としてどちらが上なのかをっ」

「上等よ！　すぐにポロボロにしてやるんだから……一夏もよく見ておくのね！」

……いつになく好戦的だなあ、二人とも。

どうでもいいけど、やるなら俺等から離れてやれよな……そのままブルー・ティアーズとか龍咆の巻き添えとか死人が出るぞ。

「やる気なのは結構だが、お前達の対戦相手は別にいる」

「へっ？」

「……そろそろ来てもいいはずなんだが、何を手間取っ」

「……！！！」　……織斑、こっちに来ている」

キィィン！　と空気を裂くような音が千冬姉のセリフに重なった。

何事だろうかと辺りを見渡す前に、千冬姉に腕を引っつかまれて

移動させられてしまう俺。

そして、次の瞬間。

「ひゃあああああ!?!?!」

ズドンとにぶい音と共に今まで俺が立っていた位置に高速で何か
が飛来して、土煙が上がった。

たらりと冷や汗が出る。千冬姉が引つ張ってくれなかったら、俺
あの爆心地の中心にいたのかよ……

「サンキュー、千冬姉」

「馬鹿者、織斑先生だ」

「あだっ」

いつものように俺を出席簿ではたいてから、千冬姉はクレーター
に向かって呼びかけた。

「……山田先生」

「きゅ」

「……織斑、雪片を貸せ」

「おおお起きてますっ!!」

おお、見事なりカバリーだ。

つーか、さっきの山田先生だったのかよ。

……ぶつかっても、怪我はしなかったかもナ。

なんて事がちらりと頭をよぎった所為だろうか

目の前を閃光が奔り、ちりちりと前髪が焦げた……

恐る恐る、発射された方向に目を向ける。

「あら？ 外してしまいましたわ」 スターライトmk？で狙いを定めるセシリア。

「馬鹿ね、アタシが殺るからちゃんと見てなさいよ？」 龍咆を機動させる鈴。

「待て、私^が先だ」 真剣を牙突の体勢で構える筈。

その全ての矛先がこちらに向いていた。

た、助けてくれ、千冬姉……と、千冬姉に助けを求めようと視線を向けたところで

ゴスツッ！

出席簿が額に突き刺さり、俺の意識はフェードアウトするのであった。

はっ！？ 俺はいつたい！？

ズキズキと痛む額を押さえながら辺りを見渡す。

「あ、一夏起きたんだ」

「しゃ、シャルルか……今どんな状況だ？」

「あ、うん……山田先生がちょうどあの二人を倒したところだよ」

「はっ！？ 2対1で勝ったのか？」

慌ててグラウンドの中央の方を見ると、セシリアと鈴が折り重なるようにぶっ倒れていた。

……えっ、山田先生ってそんな強かったのか？

思わず呟いてしまった言葉を、いつの間にか隣にやってきていた篤が拾う。

「まあ、そう言いたくなる気持ちは分からんでもないが教員なんだから、実力はないとなれないだろう」

「いや、そうなんだけども。俺の入学試験の対戦相手 山田先生だっただよ……」

「うん？ なら、一夏って山田先生が強いつて知ってるんじゃないの？」

「それが開始と同時に突っ込んできたのを避けたら、そのまま壁に激突して俺の勝ちになっちゃったんだよな、これが」

『うわあ………』

二人がなんとも言えない顔になってしまった。

そんな訳で、あの時の事といったもの様子しか知らない俺からすれば今の光景は非常に納得しがたいものがあるのだ。

まあ、あの時は何かぶるぶる震えてて、顔とか真っ青だったし体

調が悪かったただけなのかもしれないな。

なんて事を話しているところで、千冬姉が手を叩いて指示を出し始める。

「では、これから実習を行う。各クラスの出席番号順に山田先生、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、鳳をグループリーダーとする班に入れ。ああ、ちなみにISは打鉄とラファールがあるが打鉄が3機、ラファールが2機なので班で相談して好きな機体を選ぶように」

……ナチュラルに俺がはぶかれたんだが。

なんだ、イジメか。さっきの続きか。

「せんせー、織斑君はどうするんですか？」

落ち込んでいる俺の代わりにのほほんさんが訊いてくれた。

さすがのほほんさんも千冬姉の前ではあの渾名では呼ばないらしい。

「織斑は私の補佐だ。何か文句でもあるのか？ ん？」

『『『イイエ、アリマセン……』』』

「補佐って……山田先生がいるんじゃないか……」

「ふん、あいつ等に私が餌を与えるわけがないだろう。というか、授業がまともに進まないのが目に見えている」

「そりゃ、見事な采配で……」

そういう訳だから、箒は俺を睨むんじゃない。

他にもぶーぶー言ってる女子（割と2組の娘が多い）がいるけど、千冬姉の一睨みで沈黙するのであった。

というわけで、俺は特に何をするでもなく、ただ千冬姉の隣で授業風景を眺めるのであった。

手持ち無沙汰感が半端ない午前中の授業であった。

ちなみに、不満げなみんなとは対照的に千冬姉の機嫌はよかった。

……はて、なんでだろうか？

さて、無事実習も終わり昼休みとなった。

まだ学園に不慣れなシャルルを下手に学食とかに連れてくと、悲惨なことになるのは目に見えてるためシャルルを加えたいつもの3

人と屋上で飯を食べることにした……んだけど。

「何で、お前までいるんだ？」

「？ 私のことか？」

「そっだよ」

「お前が教官の嫁に相応しいか見極めるためだ。他意はない」

「さよつで……」

このようにラウラまで付いてきていた。

まあ、いいけどな。

「でも、何か食べる物持って来てるのか？」

「問題ない。軍用のレーションを持ってきている」

そう言っただけやらビスケットやら缶詰を取り出すラウラ。

それはねえだろ……。他の皆も若干引いてるし。

仕方ないな……

「俺の弁当分けるから、それはしまつとけよ」

「む？ 別に施しを受けるつもりはないぞ」

「いや、そんなんばかり食ってたら栄養が偏るだろうが」

「なつ！？ バカにするな！ 我が軍のレーションは効率の良いエネルギー摂取とバランスよい栄養摂取を主軸とし、味にもこだわった一品なのだぞ！！」

たとえそうでも、俺達が普通に弁当食べてる横でレーション食われると居た堪れなくなるんだよ……

「あ、じゃあ俺の弁当がどんなもんか評価するために食ってみる

ってのはどうだ？」

「む……確かに、嫁と言つならば料理ができなければ話にならん
な……」

（お、やったね、一夏！）

（ああ、言ってみるもんだぜ！）

などと俺とシャルルが喜んでいる一方で、他三人はごによごとよ
と内緒話をしている。

（ちょっと！ 嫁ってどう言う事なのよ！！）

（わ、私を知るか！ 朝来た時から、何故か一夏の事を千冬さん
の嫁だなどと言っているのだ！！）

（なっ！？ ってことは、千冬さんの陣営なわけ！？）

（所がそうでもないみたいなんです。一夏さんの事を嫁とは認
めないとおっしゃってますし……）

（っていうか、そもそも何で一夏はなんとも言わないのよ！）

（……嫁じゃなくて婿だよな、と言ってましたわ）

（……）

？ まあ、いいか。

昼休みの時間も限られてるし、さつさと弁当を食おう。

「ほら、どれでも好きなの選んでいいぞ」

「……ほう、見た目はいいようだな」

「わあ、おいしそう！ 一夏が作ったの！？ 男の子なのにすげ
いね」

「まあ、小さい頃から作ってるしな。そう言うシャルルは作れな
いのか？」

「え？ 僕はできるよ、勿論」
「……」

何でそんな当たり前なことを聞くの？ そう言って不思議そうに俺を見るシャルル。

あれ？ 俺が変な事言ったことになってる？

お互いの言葉に納得できず二人して首をかしげる。

すると、シャルルは何かに気付いたようで……

「シャルル？」

「あ……あはは……い、いや何でもないよ！ それより僕もちよつと貰ってもいいかな？」

「え、ああ、いいぞ。どれにする？」

「んー、これでもいい？」

そう言っつてシャルルは、肉じゃがを指差す。

これは昨日の夕食の残りだったりする。ちゃんと中で別の容器に入れてあるから、汁が滲みだすなんて事もしてない。

「くっ、貴様……これはもしかして教官の……っ！」

「ん？ どうかしたか？」

「前に一度聞かされた事がある……教官の最も好きな食べ物……Niku-jaga ではないかっ！」

ローマ字で表記されると違和感が半端ないな。

それはそうと、確かにこの肉じゃがは千冬姉の好物である。

甘いのがあまり好きじゃない千冬姉のために、砂糖やみりんをできるだけ控えて出汁を効かせた自慢の一品だ。

「私もこれを貰う！ ……はむっ ……く、さすがに教官が褒めるだけの事はあるな」

「そりゃ良かった。シャルルはどうだ ……って、そうかシャルルは箸とか持ってないか」

「あ、うん ……」

「こついう事も考えて食堂で割り箸でも貰ってくればよかったなあ。ま、俺の箸で我慢してくれ ……ほら、口開けてくれ」

「ふわあっ！？ い、一夏？！ そ、それって ……！？」

「ほら、あーん」

『『『！？！？！？！？』』』

とりあえず、ジャガイモをシャルルの口元へ運んでいく。

つて、コラ。口をパクパクさせるんじゃない。開けたままにしてるよ。

……もういいや、つつこんでやれ。

「そおいつ」

「むぐうつ！？ んくつ、んつ ……もう、なにをするのさ」

「いつまでも食べないお前が悪い」

「絶対、一夏の方が悪いと思うんだけど ……」

「はは、悪い悪い。それより、味の方はどうだった？」

「 ……あ、あのね？ 急に食べさせられて ……よく分からなかったんだ。だからね、もう一回 ……却下あ（ですわ）！！！！」
う
う ……」

さつきから、全然話に加わってこなかった三人が急に吠え出した。いきなり、どうした。お腹減ったのか？

「違うわよ！ 人が黙ってればイチヤイチャと ……！ つーか、男同士で何やってのよー！！」

「なんて羨ま…妬ましい！」

「篤さん、あまり言い換えられてませんわよ？ ものすごく同意しますけど」

「ふむ、お前の周りにはぎやかだな」

「にぎやかすぎるぐらいだけどな」

『話を聞けえッ！！』

はい。

くどくどと篤達による説教が始まった。

その内容をまとめると……

- ・自分達を無視するな
- ・イチャイチャするな
- ・作ってきた弁当食べる

とのことらしい。

とりあえず、2番目の事に付いては反論したい。いつ俺が誰とイチャイチャしたんだよ。

まあ、弁当を食べる事に関してはありがたい。何だかんだで、俺の弁当はラウラが食べ尽くしちゃったし。

「お、お前が食べると言ったんだろっが！ 私は悪くないぞ！？」

「いや、別に怒ってるわけじゃないさ。気に入ってもらえたみたいだしな？」

「……ふんっ」

というわけで、遠慮なく篤達の弁当を分けてもらっ事にした。

篤のは和風、鈴は中華。セシリアはサンドウィッチらしい。まだ、中身は秘密だとかで見せてもらえてない。

さて、どれを食べようか……と思ったけど、既に食べる順番は決められていたらしい。

「さあ、一夏さん。まずは私のからですわ!」

「ま、最初じゃなかったのは残念だったけど、おいしいところは最後にあたしが貰うから問題ないわね」

「くっ、2番目では…!」

何か筈だけ異様に悔しがってるんだが。

まあ、ともかくセシリアのサンドイッチをいただくとしよう。

つと、よく考えたら、セシリアの料理を食べるのは初めてだなあ。料理なんてできるんだろうか？ お嬢様だし……そういえば、今朝会ったときには指に絆創膏張ってたな。

うむ、俺のために頑張ってくれたって考えると素直に嬉しい。もし多少失敗してても、ありがたくいただくとしよう。

そんな事を考えながら、セシリアの持ってきていたバスケットを開けてみると

赤

紅

朱

血に染まったかのような、真っ赤な三角形の物体が鎮座して

みた……

「っーか、酸っぱッ!? 食べてないのに、既に酸っぱい!! あっ!? 梅か! 梅なのかこれえ!？」

「なぜサンドウィッチで梅!? おにぎりならともか……いや、おにぎりでもコレは異常だろ!？」

戦慄を隠せない俺と、俺に哀れみの視線を送る他4名。

そんな俺達の様子に気付いたのか、セシリアが小首を傾げながら尋ねてくる。

「……? どうかいたしまして?」

「せ、セシリア……これは……?」

「ふふふ、驚きまして? これはチエルシーから見せてもらった『洗脳探偵 監修 ご奉仕レシピ ウメサンドの項』これで愚鈍なあの方を『です』を完全再現した一品ですわ!」

材料の梅には最高級紀州南高梅が〜などと嬉しそうに説明をするセシリア。

ツッコミどころが満載すぎてどこから突っ込んでいいのか分からんが、ともかくどうやってここを乗り切るかが問題だ!!

しかし、こんなに嬉しそうな顔をしてるセシリアを裏切る事なんてできる訳がないッ!!

落ち着け、所詮 梅干だ。身体に害はないッ! 確か身体を動かしたした後にはクエン酸がいつてTVで言っ……いやでも、今日はあんまり体動かしてないし……それ以前に、これはどう考えても過剰摂取……ッ!

だが、セシリアはあんなに指に絆創膏を付けてまで頑張ってくれ

たんだ……

覚悟を決める、織斑一夏。ここで引いたら、男じゃない。

そして、その真つ赤な物体に手を伸ばそうとした所で、隣にいたラウラに腕を掴まれた。

(やめろ！ 貴様、死ぬ気かっ！？)

セシリアに聞こえないくらいの声で制止して来た。

箒達もそれぞれやめると目で訴えかけている。

だが、そんなんじゃ俺は止められない ツ！！

ゆっくりとラウラの手を引き離し……そして、高らかに宣言する！

「こんな千冬姉に守られてばかり俺にも…こんな情けない俺にも
意地があるんだよ！ 男の子にはなあッ！！！」

ぐちゅりッ！ と手にはなんとも言えない感触。

だが、滴る梅汁もそのままに口へと放り込むッ！！

「はぐっ……ッ！」

『(無茶しやがって……)』

口の中いっぱい広がる、酸味と酸味と酸味。まさに酸味いっぱい。
い。

グッ……フ……何かいろいろこみ上げてきた……！

し、しかし、期待した顔でこちらを見るセシリアの手前戻すわけにはいかないッ！

気合で飲み込むッ！

あ……あ、ダメだ意識が……混濁、してきた……
だが、一言言わなければならない……ッ

「ど、どうですか、一夏さん……？」

「……せ、セシリア……」

「は、はい！」

「そのレシピは……焼却、しろ……（バタリ）」

「はい？ い、一夏さん？！」

『い、一夏……ッ！？』

「……くっ、見事だったッ」

霞み行く視界の果てに最後に見えたのは、こちらに向かって敬礼をするラウラと慌てて駆け寄ってくる4人だった。

「　　ちか、起きろ」

「…ん…」

肩を叩かれている感覚に目を覚ます。

俺……なんで、寝てたんだ……？

いまいち状況が掴めないまま、身体を起こす。

「こじは……」

「やっと起きたか……心配かけおって」

「千冬姉？　何で……」

「お前が倒れたとラウラから報告があっ……私の部屋に運んだ」

「そっか……って、千冬姉午後から授業があっただろ。何で俺のところにいるんだよ」

「何を言っている…授業などもうとくに終わっている（まあ、確かに授業には出てないがな）」

「え……なっ！？　もう夜になってるのか！？」

外を見ると真っ暗になっていた。

「ただけ昏倒してたんだよ、俺……げに恐ろしきはウメサンドか。本家でもそこまでの威力はなかったはずなんだけど……」

「っと、いつまでもこうやって千冬姉のベッドを占領して置くわけにもいかない。部屋に戻るとしようか……」と黙っていたんだけど。

「一夏……お腹は空いていないか？」

「へっ？ あ、そうだな……結局昼は食べ損ねたし、割と空いてるけど……部屋に帰って適当に何か作るよ。それがどうかしたのか？」

「……」
「千冬姉？」

「……その、だな……こっちで、食べていけないか……？」

「？ 千冬姉も食べたいのか？」

「……違う……」

「なんとも煮え切らない感じで、いつもの千冬姉らしくない……それにちよっとしおらしくて……むう、千冬姉の新たな一面を見た気がする。」

「新鮮だ……とか、思ってたらようやくやく意を決したのか話し始めた。」

「おかゆ……」

「うん？」

「おかゆを、作ったんだ……」

「……そ、それって……」

「えと、もしかして……俺のために？」

「あ、当たり前だ！ お前のため以外に作る気など起こすはずがないっ」

それはそれでどうなんだろうか、と思わなくもない。

やばい、嬉しい。……もしかしなくても、初めての事だ。俺達が二人になってからは、篝の家でお世話になってたし、篝が引越してから俺が作るようになったからな。

「その、な。もっと、精の付く物を作ってやるうかとも、思ったんだがな……束に相談して、刺激の強いものを食べたのだから、こっちの方がいいと言われてな……」

「……ありがとう、千冬姉……すっげー嬉しい」

「あ、あまり期待はするなよ！」

そのっ、初めて作ったものだから、お前のようにうまいものが出来たなどとうぬぼれるつもりなどない……
食べられないようなら、そのまま捨てて「そんな事するわけないだろ」っ?!」

たとえ、どんなに不味くても、黒コゲだったとしても……その千冬姉の気持ちを無駄になんてできるはずがない。

「じゃあ、用意してもらってもいいか？ 本当は腹が背中にくっつきそうなくらい腹が減ってたんだ」

「……ふふっ、そうか。なら、少し待っているといい」

俺が冗談めかして言うと、千冬姉は嬉しそうにキッチンスペースへ入って行った。

するとすぐに、湯気の立った皿とレンゲを持ってきてくれた。

おお、卵が溶かしたシンプルなおかゆだ……見た目は普通におい

しそつだぞ。

「すげーよ、千冬姉。うまそつだよ！」

「そ、そうか？ 束に聞きながら作ったからな……味の方もうまくいってればいいんだが……」

そう言いながら、千冬姉はレンゲでおかゆを掬って、息を吹きかけ熱を冷ましている。

……あれ？ これって……

「ほら、一夏口を開ける」

「……千冬姉、俺 別に風邪とか引いてるわけじゃないんだけど」「ふふ、いいだろう？ 私にも少しくらい役得があっても」

これが何の役得になるんだろうか。

恥ずかしがってる俺の顔を見ることか？

くっ、まさかやられる側に回るなんて思ってもみなかった……こんな普通のじゃ考えられないッ！

と、思いつつも素直に口を開く。

「ん、むぐ……」

「……どうだ？」

んー、若干芯が残ってたり、塩をかけすぎな感じもするけど普通に食べられる。

「うん、まあちょっと塩が多いけど、大丈夫だぞ」

「……そこはお世辞でもおいしいと言ったところじゃないのか？」

「お世辞なんて言ったら千冬姉怒るだろ？」

「フ、まあ、そうだな」

などと、そんな多愛のない話をしながら、千冬姉の作ってくれたおかゆを食べるのであった。

……まあ、最初から最後まで食べさせられた事は恥ずかしいので忘れない。

く その頃のキッチン く

楽しそうな織斑姉弟の会話が聞こえる中、私 山田真耶は……

「うう……しくしく、ひんひん……」

大量に積み上がった包丁などの調理器具と焦げ付いてしまった鍋を必死に洗っている。

急に織斑先生のお部屋に呼ばれたと思ったら、キッチンの片付けをやらされるなんて……というか、なんでおかゆを作るのに包丁とかフライパンとか使ってるんですか……？

「ああ、山田先生。ついでにごみも捨ててきてくれ」

「うう…分かりましたあ…」

何で私ばかりこんな目に…やり直しを要求しますー！！！！

第10話 転校生二人と手料理（後書き）

読了感謝です。

一夏…末永く爆発しろ！（挨拶）

と言っわけで、ラウラとシャルがインしたお！

全然目立ててないが…：まあ、いつものことだよねw

そして、千冬姉とセシリアの差が激しい…：がんばれちよろいさんw

では、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

第11話 一夏とシャルルのあれこれ(前書き)

後悔はしてない。

第11話 一夏とシャルルのあれこれ

さて、昨日は千冬姉の手料理なんて珍しい物を食べられたという満足感に浸りつつ部屋に戻ってぐっすりと寝たんだが、朝起きてからシャルルがいる事に気付いた。

…そういえば同室になったんだった。

昨日の梅サンドやらなんやらですっかり忘れていた。

シャルルにはすまない事をしたなあ……後で謝ろう。

で、そのシャルルはというとまだ夢の中らしく、むにゃむにゃと寝言を言っている。

……むう、こうして見ると中性的と言うよりは女顔だよな、コイツ。纏めてた髪も降ろしてるから、余計にそう見えるのかもしれない。

まあ、あんまり人の寝顔を見るなんて趣味の悪いマネをしたくはない。起こさないようにできるだけ静かに弁当を作り始める。

現在 時刻は5時を少し回ったところ、昨日は弁当の下準備とかしてなかったから早めに起きてやるというわけだ。

昨日のおかゆのお礼も兼ねて、ちょっと豪勢にいきたいと思う。

さて、何を作ろうかな。

部屋を満たすおいしそうな匂いで目が覚める。
目を開けると、見慣れない天井が見えた。

……そっか、IS学園に来てたんだっけ。
したくもない男装やデータの回収をさせられるために……はあ、
何でこんな事になっちゃったんだろ。

そもそも、この男装して一夏に近づくってというのは無理があると思う。昨日はたまたま一夏が倒れた所為で部屋で一緒になる事はなかったけど、このまま続けてればそう遠くない内にバレると思う。というか、バレてくれないとへこんでしまう。女の子のプライド的な意味で。

……それにしても、この匂いは何なのかな？ うう、なんだかお腹空いてきちゃったよ。

とりあえず、洗面台に行って顔を洗わなきゃ……ついでにコルセツトも付けないと　なんてぼんやりしてたのがいけなかったのか……着替えを持ったまま洗面所に向かっていると声をかけられた。

「お、シャルル。おはよう」

「あ、おはよう一夏……って、あああ!？」

「うおう?!　ど、どうかしたのか!？」

「な、なんでもないよ!　あ、あははは」

「そ、そうか……？」
引き攣った顔をしながら、一夏の方に背中を向けたまま壁伝いに移動する。

ううう、絶対一夏に変な子って思われてるよう……

「？ 何でそんな壁伝いに移動してるんだ…？ 変なやつだなあ

……」
「~~~~ツ！」

直接言われたー！

そりゃあ、挙動不審だった僕も悪いけど、一夏ももうちょっと言葉を選ぶべきなんじゃないかな！

文句を言いたいけど、振り返るとバレちゃうから急いで洗面所に入って、勢い良く扉を締める。

そこに身体を預けたところで、ようやく一息ついた。

失敗だったなあ……まさか一夏がこんなに早く起きてるだなんて

……

ちよつと気を抜きすぎたのかもしれない……まあ、あんな息苦しい場所から離れる事ができたんだから仕方ないのかもしれないけど、母さんが亡くなってから、愛人の子供の事なんて認めなかった父親に引き取られて……一人別邸で過ごし、テストパイロットとして使われるだけ。

望んでもいなかったし、期待なんてしてたわけじゃないけど、親らしいことなんてされなかった。まあ、敢えて言うなら本妻の人から殴られたのはDVだから親らしいと言えばアレがそうなのかもしれない。

はあ、こんな事ばかり考えてたら気が滅入っちゃうし、早く着替

えてしまおう。

……一夏にもさっきの事を弁解しないといけないしね。どう言い訳すればいいのか、ちょっと分からないけど……ま、まあ、アレだけ鈍感な一夏だもの。寝ぼけてたつて言えば信じてくれるよね！

なんて、若干失礼な事を考えつつも一夏のいるキツチンを覗いて見たんだけど、その姿はどこにもなく、ただお弁当が二つ残っているだけだった。

どこに行ったんだろうと思いつつも、なんとなくそのお弁当の中を覗いてみる。

「……うわぁ、何か昨日のよりも豪華になってる気がするよ……」

昨日はいくつか間に合わせの冷凍食品みたいなのが入っていたのに、今日のは全部違うみたい。

今日は何か特別な日なのかなぁ……お弁当も二つあるし……誰か他の人にあげるの、かな？ 片方のお弁当のナプキンは可愛い感じのだし……

……むう、なんか……おもしろくない。おもしろくないから、一夏のお弁当からつまみ食いしちゃおう。

……別に、お腹なんて好いてないよ。うん。

心の中で言い訳しつつお弁当にゆっくりと手を伸ばす……狙うは

玉子焼き！

そして伸ばした手がその柔らかかな感触に触れる 事はなかった。なぜなら、がっしりと腕を掴まれてしまっているから……織斑先生に。

「……お、織斑……先生？」

「デュノア……貴様、勝手に一夏の弁当に手を付けようとは……万死に値する」

「あ、い、いえ、これは、そのっ！」

「ん？ どうした？ 言い分があるなら聞こうか。結果は変わらんがな」

ハハハと笑いながら言ってるけど、目が笑ってないです！

ああああ、どうしようどうしようどうしよう！ というか、何でお弁当をつまみ食いしようとしただけで、こんなに命の危険を感じなきゃいけないのかな！？

と、とにかく言い訳をッ！

「こ、これはちょっと朝起きたばかりで、そのッ、お腹が空いてたと言いますか……」

「……ほう」

「決して悪気があったわけじゃないんです！」

「……よし、遺言はそれでいいんだな？」

「ぜ、全然聞いてない！？」

「フッフ、一撃で楽にしてやる……」

目の前に絶望が広がっていき、振り下ろされる出席簿けいせきぼくの衝撃に耐えようと目を瞑った……その時

「あれ？ 千冬姉、こんなところにいたのか？」

部屋に一夏が戻ってきてくれた。

僕が置かれてる状況が把握で傷に首を傾げてる……

僕は必死で一夏に目で助けてと訴える。あ、余計に首傾げちゃった！？

アイコンタクトって難しい……現実には非情だった。

「一夏……少し待ってる、すぐにこの不届き者を成敗してやる」

「いまいち状況が把握できないんだけど……それより千冬姉、ほら、弁当」

「む？」

一夏が持っていたお弁当を織斑先生に差し出した。

あれ？ 三つ目？

僕がキッチンのお弁当の方と視線を行ったり来たりさせていると、一夏が気が付いたみたい。

「ああ、今日は張り切りすぎちゃってな。ちょっと作りすぎたんだよ……」

「そ、そうなんだ……何かいい事でもあったの？」

「んー、あつたけど内緒だ。まあ、これはそのお礼ってわけだ」

そう言って、織斑先生の方に目を向ける一夏。

その織斑先生も何か心当たりがあつたみたいで、一夏の言葉にどことなく嬉しそうな顔をしている。

「そ、そうか……んんっ、邪魔をしたな。では、これはありがとう貰っていくぞ」

「ああ、今日のは自信作だからな。ちゃんと味わって食べてくれよっ」

「ふっ、当たり前だ」

ニコニコと機嫌の良さそうな顔で部屋から出て行く織斑先生。

……さっきまでの人とはまるで別人みたいだ。一夏ってすごいん

だね……

でもだとしたら、この残ってる二つのお弁当は誰のなんだろう？
一つは一夏ののだとして

「あ、それか？ 一つはシャルルの分だぞ？」

「へっ？」

「折角同じ部屋になったのに、自分の分だけ弁当作るってのも気が引けたからな。まあ、別にいらなくてなら、誰か別の奴に「うん、そんなことないよっ！」「…：そうか？」

「うんっ！ ありがとう一夏！！」

何か、さっきまでの自分が急に恥ずかしくなってきたなあ

……

でも、ちゃんと僕の事も考えてくれたのかあ……えへへ。

「じゃあ、このお弁当のお礼に明日は僕が一夏の分を作ってあげるね！」

「おっ、いいのか？」

「うんっ、勿論だよ」

「ははっ、そりゃ楽しみだな」

そんな一夏の言葉に浮かれてしまっていたこの時の僕には、昼休みに一夏のお弁当を狙う篠ノ之さん達に追いかけられる羽目になるとは思ってなかった。

放課後。

今日も今日とてISの訓練をする俺なのだが、本日は千冬姉が職員会議なので第達と一緒にやっている。

やっているのだが……

「ええいつ、何度言えば分かるのだ！ この前も言っただろう。ズバーツと行ってからズガン！そしてガキンだっ！」

「あーもうっ！ そんなの言わなくなっただけで分かるでしょ！ B B

A B よー！！」

「防御の際は右半身を5度ほど斜め上方に傾け、回避は後方へ20度反転ですわ！」

……こういう時にはなんて言えばいいんだろうか。

「ふんっ、そんな事も知らないのか。『日本語でok』だ。私はクラリツサに相手が意味の分からない事を言い出したら使えと教わったぞ？」

「とりあえず、そのクラリツサさんとやらには一度日本の文化について話し合わないとな……」

「あはは……」

歪な日本文化教育を受けたラウラはこの際置いておくとして、こ

いつ等は教える気があるんだろうか。

と言うか、鈴。それはIS/VIS《インフィニット・ストラトスノバースト・スカイ》のコマンドだろ。しかも、ロケットパンチ。そんなんで理解できるわけないだろ……

だが、何故かあいつ等の間では理解ができてるらしく、互いの説明にうむうむと頷いているから始末に負えない。千冬姉に聞かせたら、問答無用で叩かれると思う。

その点、シャルルは俺のどこが拙くて、具体的にどういう風にすればいいのかわちゃんとアドバイスをくれる。もう箒達いらんじやないかな。とか、頭をよぎった瞬間に木刀やらレーザーやら衝撃砲やらが飛んできた。泣きたい。

でも、その攻撃を生身で全部避けれる俺も大概だと思う今日この頃。ほう、と微妙に感心しているラウラが印象的だった。

まあ、そんなこんなで俺の教導官が箒達からシャルルにシフトしたのだ。

「んー、やっぱり直接戦ってみて、そこから反省点を洗い出す方がいいんじゃないかな？ 実際にやってみなきゃ分からない事もあるんだし」

「だな。今日は珍しくここ使ってる人も少ないし」

「！ そ、それでは私がお相手を！」

「何言ってるのよ！ ここはアタシがやるわ。来なさいよ、一夏！ 雪片式型なんて捨ててかかってきなさい！！」

「いや、セシリア達とは前にもやってるだろ？ どうせなら、今回はシャルルかラウラとやりたいんだが……」

そう言って、ラウラの方に目を向けて見るんだけど

「ふん、だが断る。……私と戦うには、お前はまだ未熟だ。もつと磨きをかけるんだな……その程度で教官の嫁を名乗らせるわけにはいかない」

腕を組みながら、そう言い放つラウラ。

ぐっ、まあ、そうだろうな……昨日、千冬姉に話を聞いたところによると、ラウラは代表候補生ってだけではなく、ドイツ軍のIS部隊の隊長でもあるらしいからな……それに千冬姉が直々に教導した隊員：言わば俺の姉弟子に当たるわけだ。言ってる事に間違いはないだろう。

「だけど、だからこそラウラは俺の超えるべき壁であり、目標だ。絶対に認めさせてやるからな……！」

と、意気込む俺を他所に篝がラウラに何かをぼやいているようだった。

「……だがその言い方では、一夏に期待してるようにしか聞こえんな」

「！だ、誰が期待なんぞしているか！私は、その、純然たる事実をだな……！」

「その顔では説得力に欠けるな……ぐっ、これだから一夏は……っ！」

「おい、話を聞け……！」

ちなみに篝は打鉄の申請が通らなかつたために、今日は基本的に見学である。

まあ、整備科の方で実機を使った授業でも行われてるのかもしれない。

ともあれ、結局俺が対戦するのはシャルルと言う事になった。恨

めしそうにセシリアと鈴がシャルルを睨んでる所為か、苦笑いしてる…いや、何かスマンな。

「あはは…じゃあやるっか」

「おう」

白式を展開する。

前は数秒を要した展開も、最近では千冬姉の特訓の賜物か、瞬時に白式を展開できるようになった。

……大変だったなあ。目を閉じた状態で、いつ来る分からない千冬姉の振るう打鉄の攻撃を部分展開で受けきる……本人曰く「なに座禅とそう変わらんさ」とのことだが、命の危険がある時点で全く異なるものだと思うのは俺だけなんだろうか。

「よし、それじゃあ僕も……」『エンタングル！』

……一瞬、緑を基調とした巨大なロボットが出現したような気がしたけど気の所為だったぜ！

「……なぜでしょう。デュノアさんとはお友達になれそうな気がいたしますわ……光なき者ですのに……」

「それ以上はいけない」

以上、IS学園サーバーからお届けしました。

なんて茶番はさておき、模擬戦だ。

お互い距離をとって、それぞれ武器を構える。

シャルルの『ラファール・リヴァイヴ・カスタムEⅠ』は、その名の通り訓練機で用いられているラファールの汎用性と機能を更に底上げた改修機らしい。

白式とは違って拡張領域バースロットが多く確保されていて、現段階で20もの武装が収納されてるんだそう。本人曰く、最後発の第2世代なんだからこれぐらいはね、とのこと。

羨ましすぎるぞ……でもまあ、武装が20個あっても俺じゃ到底使いこなせそうもないけどな。

なんて事を考えつつ、開始の合図を待つ。

「んんっ、それでは合図は私 セシリア・オルコットが勤めさせていただきますわ。本来ならば、私自ら一夏さんと「はいはい、んじゃ始めー!」ちよつと、鈴さん!？」

だらだらと話し続けるセシリアに業を煮やした鈴が役目を奪った。なんとも気の抜けるやり取りだったが、今はシャルルの事だけを考える!

「行くよ、一夏!」

開始と同時に、シャルルのマシンガンにより弾幕が張られる。が、当たってやれるほど柔な指導を受けてきたわけじゃない。千冬姉仕込みの機動で地を駆けるようにかわす。

ふはは、弾幕薄いよ、何やってんの!?

「……そんなに余裕があるんなら、遠慮入らないネ?」

「へ?」

何か不吉な言葉が聞こえたと思ったら、次々に武装が切り替えられ、レールガンやらグレネードやら様々な弾の雨が俺に降り注がれる。

と言うか、こっだけ武器が切り替えられてるのに、弾幕の間隙がないとか!?

「ふふ、これが高速切替だよ。僕がフランスの伝説のウィザード
ラピッド・スイッチ
ウィッチと呼ばれる所以なんだ」

「へえ……でも、ウィッチって魔女だから女だよな?」

「!?!? こ、細かい事は気にしちゃだめだよ!」

何かすごく動揺してるが、それでもこの弾幕は途切れそうにない。何とか接近するものの、すぐに距離を開けられてしまうしな……焦れたいが、ここは待ちだな。幸いにして、被弾数はそこまででもないからダメージは軽微だ。途切れた所を狙って、一気にイグニッションブーストで距離を詰めるしかなさそうだな。

とりあえず、なるべく早く途切れてくれると嬉しい。俺が避けるたびにアリーナ中に銃痕やら爆炎やらが上がっている。……後で干冬姉に怒られないといいんだが。

イグニッションブーストの準備をしつつ、反撃の機会を待つ……そしてその時は来た。

! 途切れたッ!!

一気に加速、零落白夜を発動させて袈裟懸けに 斬る!

「甘いよー夏！」

「なっ!?!」

斬りつけた先にシャルルがいない……!?!?

紙一重で避けられた!?!?

ッ、誘導されたのか!

「ホロニツクブレード、右手! てえあッ!?!」

「ぐっ!?!」

その声と共に呼び出された近接ブレードが振るわれ、防御も取れないまま直撃する。

アリーナの端まで吹き飛ばされてしまう……くっ、確かに読みが甘かった。

シャルルは既に追撃の体勢に入っている。

「!?!? しゃ、シャルルさん、その右手の凶悪な得物はなんでしようか!?!」

「見て分らない? パイルバンカーだよ!」
「何でそんなに笑顔!?!」

キラキラと輝くような笑顔を湛えたまま、こっちに突っ込んでくる貴公子(とつつき装備)

ISの絶対防御ってパイルバンカーの衝撃とか緩和できるのか…?

って、そんなこと考えてる場合じゃないッ!

体勢を立て直し、零落白夜を発動させる。このまま、かち合っても一撃の威力は向こうの方が上だろうな……でも、負けるわけには

いかねえ！

トリガーを引くタイミングを狂わせるため、イグニッションブー
ストで一気に距離を詰め雪片を振るう！

「はあああああッ！！」

「ッ！？ いっけえええッ！！」

アリーナ更衣室。

模擬戦終了後、みんなで反省会のような物をやっているといつの
間にかアリーナの閉館時間を迎えていた。
ちなみに勝負の結果はというと……

「それにしても引き分けかあ……ちょっと最後焦っちゃったかな」
「ははっ、まあそうだな。あのまま遠距離でやってれば、たぶん負けてたのは俺だろうからな」

とまあ、最後で零落白夜を当てて一気にシールドエネルギーを削りきったものの、パイルバンカーによってぶち抜かれて両者ノックアウト。引き分けになったわけだ。

勝てなかったことで、ラウラからねちねちといびられるんじゃないかと思っただけど、意外にも「回避の機動は悪くはない……が、あの程度の誘導を見抜けなくてどうする。もつとハイパーセンサーを有効に使い」とちゃんとアドバイスが貰えた。

模擬戦前は何だかんだと言いつつも、ちゃんと見ててくれたようだ。

つと、早く着替えちまわないと鍵をかけられてしまうな……ちやつちやつと着替えて 「失礼しますねー、織斑君は……って、ひゃあー!?」

……はい?

スーツを脱いで上半身裸の状態だった俺が振り向くと、そこには顔を両手で覆い隠した山田先生が……でも、隠してるようできつちり指の隙間からこつちを見てますよね?

「……先生、一応ノックぐらいしたらどうですか?」

「い、い、いえ! こ、これは、そう! たまたまなんです!! いつもならちゃんとノックしてから入るんですよ!?!」

「……へえ」

「あああああ、デュノア君の目が冷たいですう……」

何故か氷の眼差しで先生を見つめるシャルル。

「まあ、そんな謝らなくてもいいですよ……それより、何か用でもありましたか？」

「あ、は、はい……お伝えしなきゃいけない事が……あ、あるんですけど、その前にふ、服を着てください！」

「そ、そうだよ！……一夏のえっち」

「あ、すみません……って、おい、シャルル！？」

何故かシャルルに酷い事を言われつつも、上着を着ていく。……まあ、下はシャワーを浴びる時に脱げばいいか。

とりあえず、身なりを整えたので先生の話聞く事に。

「それで用事と言うのはですね。ついに寮の大浴場が使えるようになったのでそのお知らせです……ある人からの強い要望で時間を分けるんじゃないくて、週2日ほど男子の使用日を設ける事になりました」

「ほ、本当ですか！？」

「ふふ、本当ですよ。あ、でも、まだちゃんと他の生徒さん達にお知らせしてないので、使えるようになるのは今月の下旬ぐらいになるみたいです」

「あー、そりゃそうですね……」

「織斑先生に聞いてた通り、本当にお風呂が好きなんですなぁ……」

……まあ、あと少しですし我慢してくださいね？」

「はい、わざわざありがとうございます」

いやー、すぐに使えないのは残念だけど大浴場か……胸が熱くなるな！

それにしても、さっきからシャルルはずっと黙ってるけどどうしたんだ？ 折角、広い風呂に入れるんだから喜ばしいのに。

「ぼ、僕は別に部屋のシャワーでもいいよ……」
「？ 折角なんだし、一緒に入りに行こうぜ？」
「いつ、一緒につて……！！？ そ、そんな……あうあう」
「？」

何で顔を赤くしてるんだ……？ 山田先生まで……

「何か変な事でも言いましたか、俺？」

「へあつ！？ そそそんなことないですよ……よ？」

「それで誤魔化せると思った浅はかさは愚かしいな」

「ぴいッ！？ 織斑先生！？」

「ああ、そうだ」

がしりと山田先生の頭を掴んだのは、我等が千冬姉。

いつの間に入ってきてたんだよ……この学園の教員はノックする事を知らなかったりするんだろうか？

というか、人の頭から聞こえてはいけないような音が聞こえてるんだけど、いいのか？

「前にも言ったような気がするが……私の一夏を使って妙な妄想をするのは止めてもらおう」

「……あ、あああああ、ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イ」

『うわあ……』

メガネ越しに虚ろな目が見える。

これは酷い……

壊れたラジオのようにゴメンナサイと繰り返す山田先生をそのままに、千冬姉はこちらに目を向けてきた。

「一夏」

「あ、ああ……どうかした……？」

「少し時間を貰えるか？ 白式の正式登録に必要な書類があつてな、それに記入してもらいたい」

「わ、分かった……あの、千冬姉？ そろそろ山田先生放した方がいいんじゃない……」

「……仕方ないな（ちっ）」

（今、完全に舌打ちしたよな）

（うん、してたね……）

とりあえず、了承の旨を伝えた俺はシャルルに先にシャワーを使つてくれと伝えてから、千冬姉について職員室に向かった。

そして、俺が書類を書き終えるまで山田先生が目を覚ます事はなかった……まあ、息はしてるみたいだったから大丈夫だろう。たぶん。

……
で、意外に早く書類の記入が終わって、部屋に戻ってきたんだが

「……………」

「……………」

このシャルルに似た女の子は誰なんだ……………？

「あーっと、シャルル、だよな？」

「……………うん」

「お湯を浴びて女の子になったとかじゃなくて、元からなんだよな？」

「……………ふふ、そんな特殊な体質の人なんているの？」

少し笑ってくれた。

微妙に張り詰めてた空気が弛緩する。

それから、シャルルは少しずつ事情を話してくれた。

デユノア社の企業の存続のため、俺の白式を含めたデータを入手しようとした事。父親との関係。そして、これが知られる事でシャルルがどうなるのかということも。

……………胸糞悪い。これが…これが、親のすることなのかよ……………ッ！！

血が出そうになるほど拳を握る……………

「一夏……………？」

「ゴメン…ゴメンな、シャルル……………ッ」

「な、何で一夏が謝るの…？ 悪いのは僕の方なの「違うッ」ッ！？」

「すまん…でも、シャルルは何も悪くない、絶対にだ。手前の都合を押し付けるだけ押し付けて、バレたら自分は関係ないで済ませうなんて、許せるはずがない」

「……………どうして、一夏は…そんなに怒ってくれるの？」

「……同情がないって言えば、嘘になる。俺と千冬姉も両親に捨てられたようなものだから……」

「あ……」

気まずそうにシャルルが目を伏せる。

たぶん、俺の資料が何かで調べがついてるんだろう。

俺と千冬姉。

二人きりの家族になってから、千冬姉がどれだけ苦労したか……。辛いのには気丈に振舞う千冬姉を助ける事ができなくて、どれだけ歯がゆい思いをしたか……

でも、それ以上に

「目の前に、こんなに苦しんでる友達が居るのに……俺には救ってやる事ができない。そんな無力な自分に腹が立つ」

「一夏……ありがとうね」

くそっ、お礼を言われるのがこんなに悔しい事は初めてだ……

「……っ、それよりこれからどうするんだ？」

「どうするも何も……僕に、選択肢なんてないしね……さっき話したみたいに良くて牢屋に入れられる位で済むんじゃないかな」

何か、何かないのかッ……シャルルを助ける方法が……

！　そういえば、学園の特記事項に生徒は在学中に外的介入を防げるってのがあったはず……！

これなら、シャルルはまだここに居る事ができる……！！

「なあ、シャ「話は聞かせてもらった!」って、ぬわあっ!」?

急いでシャルルにその特記事項について話そうとした瞬間に、ガコンという音と共に何かが天井から落ちてきた。

すたっ

「ふ、話は聞かせてもらったぞ」

「千冬姉!?!」「織斑先生!?!」

な、な、なんで千冬姉が天井から!?!
ていうか、聞かせてもらったって……

「ああ、お前が部屋に帰って来た辺りからずっと聞いていた」

「天井で……?」

「ああ、だが今はそんなことはどうでもいい、重要なことではない……」

そうか……? かなり重要なことのような気がするんだけど……プライバシー的な意味で。

「姉弟の間にプライバシーなぞ存在しない」

「マジか……」

初耳だよ、千冬姉エ……

「んんっ、それよりもだ。デュノア」

「は、はい……あ、あの今回は本当にご迷惑を……学園に残りた
いか？」へっ？」

「学園に残りたいかと聞いている」

「……で、でもっ、僕は……」

「私が聞きたいのは、そんな事ではない」

強い口調で、シャルルの意志を聞いている。

責めるように、ではなく。ただ、教師としての問い。……状況に
流されるままじゃなくて、シャルル自身の気持ちを聞くこととしてる
みたいだ。

そして少しの沈黙の後、シャルルはその重い口を開いた。

「……のこりたい、です」

「……それはデュノア社がどうなるうとも、か……？」

「はい」

「分かった。お前のその意志を教員として尊重しよう。……後の

事は私に任せておけ、悪いようにはしない」

そう言っつてニヤリと笑う姉上様。

その顔に頷くことしかできない俺達。アレは悪い事を考えてる顔
だ、絶対……。

まあ、ともかくこれでとりあえず事態は収束に向かったわけだな。

……はあ、結局 千冬姉の手を煩わせてしまったなあ……

いつになったら、俺は千冬姉を支えてあげる事ができるんだよ……
情けねえ。

そんな風に肩を落としていると、千冬姉が思い出したかのように話始める。

「で、だ。デュノアが女子である事が判明したからには……一夏と同室を認めるわけにはいかないな？」

「へっ?」

「え、あ……」

「よって、一夏。お前はまた私の部屋に帰って来てもらうぞ。ほら、さっさと移動の準備をしろ」

ああ、まあそうなるだろうな……実質、この部屋にいたのは2日程度か……ほとんど荷物も広げてないから移動するのも楽だな！
ハハハハ……はあ。

どうやら、また千冬姉との生活が始まるようだ。持ってくれよ、俺の理性……お前はやればできる子だ。

そんな事を考えながら片付けを始めた俺には、シャルルがすごく残念そうな顔をしてる事に気が付くはずもなかったのであった。

〜 とあるウサギさんの秘密基地 　　〜

機械が辺り一面に散りばめられ、ケーブルが芸術的なまでに張り巡らされている広く、薄暗い部屋に携帯の着信音が鳴り響く。

タイのどこかにある犯罪都市で暴れ回るたまーに御法に触れる運送屋のテーマだ。

「はっ!?! この着信音はあ!?!」

その携帯をがさごそと探すウサギさんが一人。

彼女こそエデンの禁断の果実を食べ尽くした大天災篠ノ之^{しのの}束^{たはね}である。

「　　つとお、はっけーんっ!　　おおー、やっぱりちーちゃんだ!　　やっほー、ちーちゃん!　　ちえりおー」

ぷっ。　　ツーツーツー……

「あれ?」

携帯に表示される通話時間、二秒。あまりに早い。

「ちよっ、ちよつと嘘!　　ちーちゃん!　　じょーだんだつてば!」

涙目になりながらも慌ててリダイヤル。

やはり奇策士にすら広める事のできなかつた挨拶だけはある。いかに天災であろうとも広める事はできなかつた模様。

「もしもし?　　ひどいよーちーちゃん。いきなり切っちゃうんだ

もん」

「うるさい。あと、その呼び方を変えろと昨日も言っただろうが」

「えー、いいじゃん。可愛いよ、ちーちゃんって」

「……まあいい。それより、一つ頼みたい事がある」

「ちーちゃんからのお願いかー。昨日に引き続き珍しい事もあるもんだね！ でもー、この束さんをお願いするなら、それ相応のものを出示してもらおうじゃないかーげへへ」

「似合わないダミ声を出すんじゃない。というか、昨日は何も言わなかっただろうに……」

「まあまあ、いーじゃない。束さんとしてはいつくんを譲ってくれると「死にたいか？」……ちえー」

本当に残念そうに呟く。

電話越しから、呆れたようなため息も聞こえてくる。

「まあ、そこまで言うなら報酬をくれてやろう。……無論一夏ではないぞ。

そうだな、箒に『おねーちゃん大好き！』とでも言わせてその音声データでもくれてやろうか」

「ぶふうっ!？」

一気に拭き出す束。

口からではなく、鼻から赤いものを、だ。鼻ブラッドではない。きつと姉妹愛かナニカだろう。

「ぐ、ぐふう……ま、まさか想像だけでこの束さんにダメージを与えるなんて……で、でも、それじゃ、私は倒せないよ……おおう、くーちゃんティッシュ取ってえ……」

「フッフ、まだ足りないのか？ このいやしんぼめ。ならば、涙目で恥ずかしながらそのセリフを言おうとしている映像データも付

「けてやるう」

「の、のつたあああ!!!」

「ふっ、他愛ない」

斯くして、この一本の電話によって数週間も経たない内にデュノア社のIS関連の利権はフランス国内の別の会社を買収・吸収合併されることとなり、デュノア社 社長パトリック・デュノアは二度と表舞台に現れる事はなかった。

第11話 一夏とシャルルのあれこれ（後書き）

読了感謝です。

一夏、はげろ。上も下も。（挨拶）

ヒヤッハー！ やってやったぞ、ゼーガペ ンネタ！ たとえ皆が
分からなくても、後悔してない！

それはともかく、ここから微妙に原作の流れを変えて行きます。
まあ、といっても学年別トーナメントだけですけど。つまるところ、
シャルルとは組みませんよ。ええ。
どうなるかは、待て次回。もしくは次々回？

では、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

第12話 私がルールだ

シャルルが女の子だったという驚愕の事実……いや、驚愕ってほど驚いてもないな、そういえば。どちらかと言えば逆に納得したというか、なんとというか。

まあ、そんなことはともかく。その事が発覚してから時間は流れ、6月も半ばに差し掛かっていた。

その間にIS業界ではいろいろ激震が走ったんだけど……俺が千冬姉に任せたからこんな事になったんだよな、やっぱり。なんかデュノア社のラファールの開発データやらなんやらが、フランスの他の企業に丸々流出したとか、いろいろニュースでやってるのを見ると千冬姉経由で東さんが手を出したとみえる。

それだけの騒動になったにもかかわらず、肝心のシャルルには特に影響する事がなかった。逆に怖いと本人は言っていた。

そんなシャルルに「千冬姉達だから仕方ない」と、魔法の言葉を教えてやる事しかできないことが無性に空しかった。

で、そんな吸収合併されたデュノア社のテストパイロットでもあったシャルルが色んな手続きのためにフランスに帰国の途に立つてから、一週間ほど経った本日。

俺の所属するIS学園 1年1組にも変化が訪れようとしていた。

「えーと……まだ私もよく分かってないんですけどお……転校生？ いえ、むしろ転向性？ を紹介しますね？」

傍目から見ても混乱しっぱなしの山田先生がそう言うと、がらりとドアが開かれ、金髪の女の子が入ってくる。

そして、黒板にすらすらとチョークで名前を書いて、くるりと振

ルロツトもなんで顔を赤らめるかな、そこで！
二人の視線が一層きつくなつたぞ！？」

「とりあえず、一夏……デユノアとの相部屋になつた時に何があつたか、全て洗いざらい吐いてもらおうか！！」

「フフフ、デユノアさんですわよ？ 織斑先生をどうやって出し抜いたかも話してもらいますわ！」

暗い目をしながら二人が迫ってくる。

クラスの皆もドン引きである。あーもうツ、誰かこの状況を何とかしてくれ！

そんな俺の願いが届いたのか、ついに救いの手がやってきた。

「今はHRの時間だ。さっさと席へ戻らんか、小娘ども」

スパパーンっ！

はい、本日も千冬姉の出席簿クラッシュ×3 入りました！
そして、頭を抑えながらしぶしぶと席に帰る三人。

「……なぜ、山田先生まで寝てるんですか。早く立ってください」

スパンツ！

もう一本追加！。

「ひぐうっ！？ は、はい、起きました！ ばっちりです！ すつきりです！！」

「よろしい。で、どこまで話しましたか？」

「え、あ、まだデユノアさんの紹介だけです……」

「ふむ、ならばそこから引き継ぎましょう。デユノアに関しては

見ての通りだ。事情は本人からでも聞くといい」

結構重要そうなことだけど、さらっと流すなあ……

こういうのって普通 緘口令みたいなのが布かれてるんじゃないのか？ おいそれと話していい事じゃないと思うんだけど。

「さて、月末にある学年別個人トーナメントだが……少々ルールの変更があった」

「変更……ですか？」

「ああ、後で掲示されるだろうが、一応説明しておく。変更点は2点だ。

今回のトーナメントはより実践的な模擬戦を行う事を目的とし、二人一組での参加を必須とすること。

また、公平を期すため専用機持ち同士のタッグは禁止。以上だ」

んー、タッグ戦か。この辺は前回のアンノウンの事も考えての事なんだろうけど……

専用機持ち同士はタッグ禁止かあ……まあ、そりゃそうだよな。

ただでさえ専用機は打鉄とかの訓練機よりは性能がいいし、他の生徒に比べてISの稼働時間も多いしな。

そこでタッグまで組んじまったら他の生徒に勝ち目がない、とまでは言わないけど、かなり厳しい事には違いない。

「……（ドヤア）」

「ず、ずるいですわ！ そんな篤さんだけえ！ タッグ戦と言うのなら一夏さんは私と組むべきですわ！ 近距離戦の一夏さんとは私の方がバランスが……っ！」

「バランスで言うなら、僕のラファールとも相性がいいと思うんだけど……」

「ふんっ、普段から何かと優遇されている代表候補生達は引っ込

んでいればいい。恨むならその立場とルールを恨むのだな……！」

「で、でしたらっ、専用機を使わなければいいんですのね！ 代わりにラファールを使えば……！」

「……あの、オルコットさん？ トーナメントには各国からの来賓の方々も多く来られるので、代表候補生の方が専用機に乗らないっていうのは、ちょっと困るんですけど……あの、聞いてます？」

なにやら箒達の言い合いが始まった。山田先生も必死に宥めようとしてるけど、効果はないみたいだ。

「というか、なんで俺の名前が出てきてるんだ？ そもそも、俺なんてそんなに実力があるわけでもないのになあ。」

「いままでのセシリア達との戦績だとまともに勝っててもないのに。」

「……というか、なんで篠ノ之さんが織斑君と組む事が前提になってるのかな？」

「それは言わないお約束〜ってことなんじゃないのぉ？」

「ふむ、クラリツサが言っていたのはこういう事なのか……。やはり本音は物知りだな」

「それほどでもないよ〜」

「ずるい。幼馴染とか、専用機持ちとかずるい。なんなの？ ただのクラスメートで名前すら出てない私たちにはチャンスすらないの？ ねえ、いじめ？ これっていじめなの？」

「どうどう、落ち着きなさい。全面的に同意するけど、そろそろ黙っとかないと雷が落ちるわよ、物理的に」

箒達に釣られて、クラス全体が騒がしくなるが鷹月さんの一言で皆は一気に静まった。

「……箒達三人を除いて。周りの様子に気付くこともなく、言い争っている。」

「 貴様等は学習能力と言うものがないらしいな」

『はうっ!?!?』

「フッフ、そろそろ折檻を新しい段階に進めようかと思案していたところだ。HR終了後、私の所に来い……一夏が誰の物なのか、その学習能力のない頭に刻み付けてやる」

言うなれば、ブレインウォッシュ（物理）

それにしても、俺が誰の物かとかそんなの誰の物でもないと思うんだが……あ、俺の意見は反映されないんですか、そうですか。

「ともかく、トーナメントの詳しい説明はいずれ揭示されるだろうからそれを待つように。それぞれの組み合わせについては各自で決める。先ほど言った事を守れば違うクラスの者と組もうが、織斑と組もうが構わない。」

ただし、篠ノ之。貴様はダメだ」

そう千冬姉はキメ顔で言っただけだ。

「なっ!?!? ど、どうしてですかっ!?!? 私が一夏と組めないなんてそんなこと普通じゃないッ!?!?」

「うるさい。言い忘れていたが、ルールにも追加されているから問題ない」

「なあっ!?!? ま、まさか……織斑先生……!?!?」

「ほう、勘は悪くないようだな。そうだ、全ては私が追加させたことだ。」

……ククッ、今日という日まで一夏との大切な時間を削ってまで説得（物理）に当たった甲斐があったと言うものだ」

「……………くう、なんと卑劣な……………!!」

悪い顔をしながら、そんな事を言う千冬姉に箒は悔しそうに顔を歪めている。

それにしても、なんという無駄な労力。

仕事しろよ、千冬ね……………ぐふうっ!?

「私が仕事を放棄するわけがないだろう……………まったく、誰のためにやったことだと……………」

ズドンと、俺の頭へと垂直に振り下ろされる出席簿。口に出してないのにツ!?

あががあがつ、ひ、久しぶりに受けた所為か、ものすごく痛く感じるツ! 内側から爆発しそうなんだけど!

頭を抑えながら突っ伏した俺に一瞥をくれると、千冬姉は手早くHRを終わらせて、予告通りに箒達を引きずりながら廊下へと出ていった。

数十秒後、三人の悲鳴が廊下から聞こえてくると同時に、クラスで三人の追悼が始まった。

南無。

悪夢のような数秒間が通り過ぎまして、幾ばくか。よろよると焦点が定まらないまま、身体を起こす。

どうやら、篠ノ之さんとデュノアさんも同じ様な状況のようである。ぶるぶると生まれたての子鹿のように足を震わせています。

一夏さんも言っていましたけど、日に日に威力が増してるような気がいたしますわ……

「信じられん。首がもげてない……」

「アーメン・ハレルヤ・ピーナツバターだね……」

「うう、でも髪がぐしゃぐしゃですわ……」

それにしても、折角のタッグマッチになったと言っのに一夏さんと組めないのは残念でなりませんわ。

篠ノ之さんを含め、鈴さん、それにデュノアさんも一夏さんと組む事ができないというのが不幸中の幸いでしたけど……

「くっ、なぜ私だけ一般生徒にもかかわらず一夏と組む事ができないのだ……」

「ふふんっ、抜け駆けは許しませんわ。そもそも、この前一夏さんに宣言したのをお忘れですの？」

「ぐ……確かに、一夏と組んでしまっただけが果たせないか……」

「？ どういうことなの？」

デュノアさんが人差し指を口元に当て、小首を傾げている。

むう、どうしてこの方は一挙一動がこんなに可愛らしいのかしら……くう、強力なライバルの出現ですわ！

……でも、まあ織斑先生の前では風の前の塵に等しいんでしょ
うけどね。私達同様に……ああ、自分で言っつて悲しくなっ
てき
ます……

「わわっ、なんで急に落ち込むのさ」

「気にしないでくださいまし……私たちの前に立ちはだかつてい
る御方との戦力差に今更ながら悲しくなってきただけですもの」

「あ、アハハ……」

顔が引き攣ってますわよ。

一応、デュノアさんにも個人トーナメント（もう個人じゃないん
ですけど）で優勝できたら、一夏さんと……その、こ、交際してい
ただけるといふ約束したことを教えて差し上げました。

「……それって僕も有効なのかなあ」

「ダメですわ（だな）」

「うっ、そう、だよ……」

ぼつりと呟くデュノアさんに即座に返す。

ただでさえ、他の皆さんまで噂が広がっていますのにこれ以上増
やすわけには行きませせんわ！

……でも、そこまでがっかりなさると悪い事をしてしまった気が
しますわ。

ですけど……いや、だからそこをなんとか！

「うん？ この声は……」

「鈴さん？」

「中庭の方からみたいだね」

廊下から繋がる中庭の方から、鈴さんの声が聞こえて来る。

誰かとお話してるようですけど……

むう、ちよつと気になりますし、見に行ってみましようか。

「だから！ 甲龍の方はちゃんとやりますから！ 今回は訓練機で……へっ？ り、理由？ そ、それは……一夏と……は、え、ちよつと！？」

……はあ、やっぱ無理かーって、あんた達何やってんのよ？」

盛大にため息をつきながら落ち込む鈴さんでしたが、どうやらこちらに気付かれたみたいです。

「い、いや、鈴の声が聞こえてきたものだからな。少し気になったと言うか……」

「そんなことより、どのようなお電話でしたの？」

「う……聞いたでしょ？ 専用機持ち同士はペアを組めないって。だから、ウチの担任に聞いて専用機を使わなきゃいって言質とって、ウチの候補生管理官に使わないでいいかって聞いて見事に玉砕したのよ……」

「ああ、なるほどな……」

「なるほどな、じゃないわよ！ 箒はいいわよね、一夏と組めちゃうんだし！」

「……フッフ、そう思っていた時期が私にもあった」

あー、また箒さんが暗い影を背負い始めましたわ……
きよとんとしてる鈴さんに箒さんが一夏さんと組む事のできな

かった事を伝える。

「あー、なんていうか……」

「何も言うな……どちらにしろ、優勝さえすれば問題ないのだ……」

……ああ、そうだとモ

「絶対 自分に言い聞かせてるよね、それ……」

「ま、しょうがないんじゃない ん？」

「どうかしたの？ 鳳さん？」

鈴さんが怪訝そうな顔をしてデュノアさんを上から下へとじっくりと観察しています。

あ。もしかして、まだデュノアさんの事 知らなかったのかしら？

「なんであんたが女になってんのよおおおおお！！？？」

あら、二回目。

がくんがくとデュノアさんの肩を揺らす鈴さん。

そうですね。ついでに、HRの時の質問にも答えていただきましたよ
うか。

特に織斑先生の出し抜き方を重点的に。

……強敵ですが、私たちの同盟に入ってもらつことも視野に入れ
ませんと、ね。

午前中の授業も終わり、現在昼休み。

俺は学食の方に顔を出していた。本当は篝達と食べようかと思っ
てたんだが、授業終了と同時にシャルロットを引っ捕まえて鈴を含
めてみんなどこかに行ってしまった。

一言ぐらい声をかけてくれてもいいものを…と思いつつ俺はど
うするかと考えていたら、のほほんさんが誘ってくれたので食堂で
一緒に食べる事になったのだ。

ちなみにメンバーは、のほほんさん、さとさとさん、相川さん、
更識さんである。

「おお、おりむーのおべんとは今日もおいしそーだね」

「……ホントだ。いつも、自分で作ってるの……？」

「まあ、千冬姉の分を作らなきゃいけないからな。そのついでだ
よ」

「普通逆なような気がするんだけど……織斑先生って料理できな
いの？ 以外だなあ」

「む、できないわけじゃないぞ。ウチの千冬姉はやればできる」

この前のおかゆだって妙に塩辛かったり、米の芯が残ってたりし
てたけどちゃんと作れてたんだぞ！

「……酷いシスコンを見た」

「ふふ、それがいいんじゃない」

「かんちゃんも人のこと言えないと思うけどな」

「かつ、かんちゃんって言わないで……っ」

果たして否定するところはそこだけでいいのか、更識さん。

そういえば、更識さんはトーナメントどうするんだろっな？ ま

だ打鉄式式はできてないんだろっし……

「……うん、私は棄権、しょうかなって……」

「ええー！ そんなのもつたないよ！」

「え……だ、だって打鉄も……まだ、できてないし……」

「でも、簪さん。これに出なかつたら一年のクラス代表の学校行事って、もうキャノンボール・ファストぐらいしかないんじゃない？」

「う……」

そういや、そうか。IS学園だけに何かもつところいった行事は多いのかと思ってたけど、そうでもないのな。

ああ、ちなみにキャノンボール・ファストってのは国際大会でも行われるISの高速バトルレースだ。バトルと付くぐらいだから妨害と言う名の攻撃も許されるらしい。

何か某レースゲームを髣髴とさせるよな。マカーとかピンクの悪魔のエアライドとか。

それはさておき、確かに打鉄式式の事があるにしても一回も出ないのは少しもつたない気がするな。

「まあ、折角の行事なんだし参加してみてもいいじゃないか？」

「そだよー。どーせ整備室だって、トーナメントで使われる訓練機の整備に使われちゃうんだし」

「……そう、かもしれないけど……」

どうにも決心がつかないようである。

ま、無理強いはできないか……とか考えてたら、不意に相川さんから声をかけられる。

「……織斑くんってまだペアは決めてなかったよね？」

「え、ああ、そうだけど……」

冪とでも組もうかと思ってたけど、よく分からないうちに組めなくなってたからなあ。

できるなら気心の知れた奴と組みたいんだけど、このままだとそうも言ってもらえない自体になりそうだ。

優勝はともかく、最低でもラウラと当たるまでは負けられないからな。

俺はまだ、アイツに認められるほどの成果を見せられてはいない。だから、今回のトーナメントで俺が千冬姉に恥じない戦いができるって事を認めさせてやりたい。

ラウラを認めさせられないなら、千冬姉や皆を守るなんてできるはずもないからな。

「ならば、簪さんと織斑君が組めばいいじゃない」

「……え？」

「俺と、更識さんが？」

確かに日本の代表候補生の更識さんと組めるなら心強いし、ありがたい。

俺としては歓迎したい事ではあるけど……

「……………」

当の更識さんは呆然としてしまっている。
う、そんなに俺と組むのが嫌だったのか……地味に凹むな……

「ち、ちがつ……そ、そうじゃなくて……ッ、その、私なんかと
組まなくたって……他にも、いるでしょ……？」

「いや、それが何か周りがピリピリしててだな……誰も組んでく
れないんだよなあ」

「……………そう、なの……？」

ちよこんと首を傾げる更識さん。

「……………だって、織斑君に話しかけようとしたら威圧されるんだも
ん……誰には言わないけど」

「組んでも構わないって言いつつも、気にしてるのよね」

「どういうことだ？」

「おりむーは知らなくてもいいんだよー」

のほほんとはっさり切り捨てられた。

なんだそりゃ、俺は仲間外れか。

まあ、男の俺には立ち入れない話つつーのもあるか……

入学してから多少慣れたとはいえ、相変わらずの肩身の狭さだ。

「ま、そういうことだから二人が組んじゃえば何の問題もないわ
けよ」

「……………も、問題だらけだと思う……………」

「まーまー、後は二人でじっくり話し合って頂戴。ほら、二人と
も行くよ」

「えー！ まだデザート食べてないのにいい」

「わ、わたしもっ！ 一日限定のプリンなんだよお！？」
などと言う二人の抗議が受け入れられる事はなく、ずるずると引きずられて行ってしまつたのであつた。
朝に同じ様な光景を見た気がするぞ。

とはいえ、こつやつて残されてしまつても困るんだが……

「あー、どうする？ もしホントに嫌つてことなら諦めるけど」

「……その、本当に……私で……いい、の……？」

「ああ、更識さんがいいんだ」

「……っ！？」

うん？ なんで更識さんは顔真っ赤にしてるんだ？

はっ！？ もしかして体調が！？

「だ、大丈夫か？！ 体調が悪いんなら、保健室に「いいっ！……

……だいじょうぶ、だから……っ」「そ、そうか？」

むう、とは言つものの相変わらず顔は赤いまんまだしなあ。

アレなら無理にでも連れて……とか思つてたら、更識さんがゆっくりと口を開いた。

「……期待に添えるか分からない、けど……それでいいなら……
よろしく……」

「！ おつっ、こちらこそよろしくな、更識さん！」

「……あ……名前で、いい」

「ん、なら俺の事も一夏でいいぞ、簪さん」

「……うん、一夏、君……」

そう言って差し出した手を、簪さんはおおずおおずとだが、しっかりと握り返してくれるのであった。

第12話 私がルールだ（後書き）

読了感謝です。

私には一夏をBADエンドに導く用意がある（挨拶）

まあ、冗談ですけどw

というか、かなりやっちゃった感が半端ない今回のお話。

かんちゃんの出番がないとこのまま空気になっちゃうのでこの組み合わせとなりました。

そして相変わらず簪ちゃんのキャラが掴みにくい……好きなんですけどねえ。

今回はトナーメントに入れる……ハズ。

では、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

第13話 訓練のち、お仕置き

さて突然だが、俺は今 簪さんと職員室に足を運んでいる。

簪さんとコンビを組む事が決まったんで、その申請書を千冬姉に提出するためだ……… するためなんだけど……… その千冬姉はなにやら目の前で簪さんをじっくりと観察していたりする。

……… なんだだ？

「……… “更識” 簪、か」

「！ は、はい………っ」

「ふん……… (またか、また知らぬ間にフラグを立てたのかっ。しかも、あの更識。妹の方はともかく姉が出て来たら私の一夏に悪影響しか及ぼさない……… ここは接点を作らせないためにも、許可を出すべきではないか？

しかし、例の戯言の件もある。1年という括りの中では無駄に実力はあるあの小娘どもが優勝してしまうとやっかいだな。まあ、一夏の事だから深くは考えていないだろうが、その所為で私との時間が削られるのは業腹だ。ここは一夏に優勝させるのもアリか……… ?

「(びくびく)」

なんか千冬姉の無言のプレッシャーに簪さんが完全に怯え切ってる……… けど、あの顔からするにただ考え事してるだけだな。間違いない。

「……… まあ、確かに代表候補生ではあるが専用機は完成しておらず、使用はできない、か」

「ああ、うん、なんか俺の白式なんかの所為で遅れちゃってるみ

たいでさ…あだッ!？」

「別にお前の所為ではないだろう。それと、ここは職員室だ。敬語で話すように。そういう砕けた口調は私たちの部屋に戻るまで我慢しろ」

「は、はい……」

「だ、大丈夫……？（本音に聞いてた通りだ……）」

久しぶりの出席簿ブレイクだった。角はやめて欲しい、マジで。とりあえず、心配そうにこちらを見ている簪さんに視線で大丈夫だと伝える。

「……いいだろう、許可してやる。だが敗北する事は許さん、いな？」

「はいっ!」

今の所、模擬戦、公式戦問わず戦績は負け越してる……だけど、だからって腐ってなんていられない。ラウラに俺を認めさせてやる。まして、今回は俺だけじゃなくて簪さんもいる。俺が足を引く張って負けるなんて、そんな情けない事にするわけにはいかない。

……まあ、このトーナメントで自信を持ってくれれば少しはお姉さんと向き合えるんじゃないかって思ってたりする。誰がとは言わないけど。

「よしっ、申請も終わった事だし一緒に練習しようぜ!」

「……う、うん……あ、でも訓練機の使用申請……」

「あ、そうだったな。……というわけで、ちふ……織斑先生」

言外に申請くださいと伝えるように千冬姉の方を見ると、口元が引き攣っていた。

あ、ヤバイな、これ。

「……私を便利屋扱いとはいいい度胸だ。帰ったら覚えておけ」

「ぐ、あ、甘んじてお受けします……」

「ほら、くれてやるから。さっさと行け、それとも何か？ 今からお仕置きでもされたいのか？」

「し、失礼しますッ！」

「あ……ありがとうございました……」

「更識は少し残れ、話しておきたい事がある。なに、時間はかけん」

織斑、お前は外で待ってる、と、そう言われて追い出されてしまった。

はて、何か連絡事項でもあったんだろうか？ トーナメントに関する事だったら、俺にも言うはずだしなあ……などと頭を捻ってみるものの、全く見当が付かない内に簪さんが出てきてしまった。ホントに時間かけてないな。

とりあえず、アリーナの方に移動しながら簪さんに何の話か聞いてみたんだけど、何故かこちらをジト目で見るだけで教えてくれなかった。

一体 何を言ったんだよ、千冬姉！？

「あ、の……話って……？」

「更識 簪、二つほど言って置く。不用意にお前の姉をアイツに近づけるなよ？ どう考えても悪影響しか及ぼさん。一夏を穢していいのは私だけだ。それと、一夏に手を出す事は許さん。一夏の血の一滴から、髪の毛一本まで全て私のモノ……分かったな？」

「え、えと……」

「話は以上だ」

「……し、失礼しました……」

放課後となり、私、篠ノ之 箒は悩んでいた。

内容は無論、トーナメントに関してだ。昼休みにみんなと話し合った結果、私がセシリア達とで組んでしまうと誰が一夏と……その、付き合うのかっ、問題が出るだろうからバラバラに組む事となった。

ちなみに私とセシリアはまだだが、鈴とシャルロットはそれぞれペアを決めてしまったらしい。聞いたところ、鈴は同じクラスの人とでシャルロットは布仏と組んだと言っていた。

私としては専用機持ちでない事だし、誰と組むかは慎重に決めたところではあるが……そもそも私と組んでくれるような人が……ぼ、ぼっちではないぞ！？ 下手に友人を作ると人間強度が下がるんだ！

……やめよう、悲しいだけだ。

さて、実力だけで考えるならばボーデヴィツヒ1択なんだが、生憎と接点が皆無だからなあ。強いて言えば同じクラスと言うだけだ。まともに話した事もない。

まあ、無難に鷹月さん辺りに頼んでみようか……彼女も陰の委員長を務めているだけあって実力もウチのクラスでは上位に食い込んでいるし。などと、考えていると他のクラスの子の話が聞こえてきた。

「ねえ、聞いた？ 織斑君のペアの事！」

「ッ!？」

「4組のクラス代表の子とだけ。また荒れるわね、織斑 一夏 争奪戦……今のトトカルチョってどんな感じだった？」

「我慢できなくなった千冬様に襲われるが1番人気で、次いで織斑君が全然気付かずに3年間過ごすのが2番だったはず。他の皆の倍率はとんとんってとこね」

「というか、4組なんてほとんど接点なんてないのにどうやって知り合ったのかな？」

「あ、なんか本音ちゃんが紹介したらしいよ？ その子と幼馴染 なんだって」

「……あれ？ そういえば4組って、専用機持ちのいるクラスだったよね？ そのクラス代表って事は、その子も専用機持ちなんじゃない……」

「それは大丈夫みたい。まだ専用機が完成してないから訓練機で出るんだって本音ちゃんも言ってたよ」

「おお、織斑君も興味なさそうにしながら何だかんだで優勝狙いかな？ やっぱり男の子だねえ」

「……………フ、フフフ」

『『『ひいつ！？』『』』

他のクラスの専用機持ちと組んだ、だと？ 一夏……………お前はよほど私を優勝させたくないようだな……………ッ！！（勘違いです）

ああ、いいだろう。お前がそのつもりならば私にも考えがある。

もはや、私は手段なぞ選ばん……………ッ！！！！

「ボーデヴィツヒッ！ いや、ラウラ！！」

「うわっ？！ い、いきなりなんだ！ な、馴れ馴れしく名前で呼ばれる筋合いなど……………」

「そんなことはどうだっていい！ 重要なことじゃない！！」

「どうでもよく（がしっ） 待て！？ なぜ腕を掴む！！」

「少し付き合ってもらおうぞー！」

「ひ、人の話を聞け！ まさかこれが有名な体育館裏行きなのか？！」

「ククク、覚悟しろ一夏……………ッ」

「ぐぬぬっ、暴徒鎮圧に慣れている私が圧されているだと……………ッ！？ 本当にこんな事があるのか……………？」

まずは千冬さんにペアの申請だな。

一夏をどのように躡けるかはそこからゆっくりと考えるとしよう。ふふふ、その首をきれいに洗って待っているんだな、一夏。

~~~~ツ!?!?!

い、今なんか首の辺りに冷たい物を押し付けられたような気がした!

……だ、大丈夫だ……ちゃんと繋がってる。うん。もげてない。

「……? どうかしたの?」

「や、何でもない大丈夫」

「そう……」

ともあれ、二人でアリーナにやってきたんだが…… タッグ戦なんて物は初めてだなあ、そういえば。逆はあつたけど。

「なあ、簪さん。俺こういうコンビネーションの練習ってのはどういう練習すればいいのか分かんないんだけど…… 一緒の部屋で共同生活を送ってダンスレッスンでもすりゃいいのか?」

「ッ!? ……そ、そういうのは……冗談でも言わない方がいい……」

「あ、いや、ごめんなさい」

「……練習より、まずは戦術の確認をした方がいいと思う。私たちの取れる方法はそう多くないから……」

「あー、白式の武装が雪片オンリーだからなあ。俺も他の武器と使えたらいいんだけど」

「……使えない事は、ないよ。えと、例えば……これ」

そう言っつて、簪さんはレーザーライフルを呼び出して俺に手渡し  
た。

「いや、渡されても、どうすりゃいいんだよ。他の機体の武装は  
使えないんだぞ？」

「……うっん、搭乗者の使用許可があれば登録してある人は、使  
えるようになってるの。……この打鉄は訓練機だから後で消さなき  
ゃいけないけど……」

「へえ、初めて知った。つてことは、俺の雪片も簪さんに使っ  
てもらっこともできるのか」

「……それは……たぶん、使えないと思う。そのレーザーライ  
フルみたいな後付武装イコライザならいいんだけど……雪片は、白式の唯一仕  
様を備えた固定武装だから……それに白式から雪片外したら、戦え  
ないでしょ……？」

「それもそうだな」

「……一夏君、割と考えなし」

「ひっでえなあ」

「……ふふっ」

ま、とりあえず白式でも遠距離武装が使えないわけじゃないつて  
事だな。

とはいえ、使うタイミングは重要だな。千冬姉が言っつた事だけ  
ど、こういうトーナメントでは如何に相手に情報を与えずに勝つか  
つても重要なことらしい。あと、相手の情報をできるだけ詳細に  
知っておくのも大事なんだとか。所謂情報戦つてやつだな。という  
ことは、最低でもラウラと当たるまでは温存しておく必要がある訳  
だ。あ、でもこうやって使用許可出せる事は向こうも知っつてるんじ  
やなかるうか。

……まあ、その時はその時か。俺一人で戦うわけじゃないしな。

「話を戻すけどさ、俺達が取る戦術つてのは基本的に俺が前衛、簪さんが後衛つて事でいいのか？」

「あ、うん。だけど、私は打鉄を使うから……私が前に出て、攻撃を防ぐのもありだと思う……」

「ああ、なるほど。打鉄は防御特化型だもんな、他のISより装甲自体が厚いんだっけ？」

「うん。一応、戦国時代の鎧をイメージしてるらしいから……あと、ちゃんと実体シールドもあるし……」

「そっか……でも、鈴の龍砲とかシャルロットのパイルバンカーあたりとは相性悪いかもな」

あと、セシリアのミサイルとか。そのあたり専用機は有利だよなあ、訓練機の武装より高火力だし。ま、零落百夜が使える俺が言うことじゃないけども。

……専用機と言えば、結局ラウラの機体の事はあんまり知らないなあ。千冬姉に聞いたら……いや、ダメか。さすがにこういうところは公平にするだろうし。

「なあ、簪さん。ラウラ……つと、ドイツの代表候補生なんだけど、どんな機体か知ってたりしないか？」

「ん……確かドイツ軍の特殊部隊の人だから……シュヴァルツェア・レーゲン（黒い雨）だと思う」

「へえ、やっぱり第3世代機なのか？」

「うん……Active Inertial Canceller  
つていう、慣性運動を停止させる能力があるはず……使うのになり集中力があるみたいだけ……」

「……………」

すまん、よく分からん。

つまり、動きを止められるって事でいいのか？

「……まあ、大雑把に言えば。これ以上はちょっと……ごめんなさい」

「いやいや、謝る事なんてないって！ それよりよく知ってたな、俺なんか全然だ」

「一夏君は知らなすぎだけど……私の場合……か、家庭の事情……？」

どんな事情だよ。

でもまあ、試合前に情報を手に入れられたつてのは僥倖だな。とはいっても、動きを止められるとかチートすぎないか？ 初見殺し過ぎるだろ。俺なんかもし止められたら打つ手なしじゃん……その対策も考えないとなあ……

っと、考えるのは後でもできる。今は時間を有効に使おうしよう。

「ま、詳細は後で詰めようぜ。あんまりゆっくりしていると使用時間過ぎちまうし」

「あ、そうだね……それじゃあ、まずは」

「うっして簪さんのコンビネーション訓練が開始されたのであった。

簪さんとの練習も終わり、部屋に帰ってきたんだが……

「……な、なあ、千冬姉……？」

「ん？ どうした、一夏。そんな怯えた顔をして」

「なんで俺、こんなことになってんの？」

中にいた千冬姉に当て身を喰らわされ、気が付いたらベッドの上で拘束されてました。

あと何故か上着が脱がされてた……ホントにどうしてこうなった！？

「ふふふ、いい格好だな」

「いや、あの、説明はないのか……？」

十中八九、放課後の件だと思うがやりすぎじゃね！？

「さて、拘束したのはいいが……ここからどうするかは考えてなかったな」

「すぐにでも開放して欲しいんだけど！」

「ふむ……ついにコレを使う時が来たか……」

千冬姉はそういっておもむろに携帯を取り出した。……何をする気だ？

「……………なあ、一夏。カメラの使い型を教えてください」

「なっ!?!? 撮る気かよ!?!?」

「待ち受けとやらにする」

「胸を張って言うなよ!?!? 絶対教えねえからな!?!?」

相変わらずの機械オンチで助かった!

今の内に何とか抜け出さないと……………!

「む、撮影モード……………これか」

「ぎゃああああ!?!? は、はずれるおおお!?!?」

「こら、動くな。ブレる」

「クソッ、こうなったら部分展開して無理矢理……………なッ!?!?」

腕の装甲を部分展開で出そうとするが全く出てくる気配がない。  
そんな風に混乱する俺に聞こえてきたのは千冬姉の携帯のシャッ  
ター音だった。

間に、合わなかった……………

「ふむ、外れなかったな。東もたまには良い仕事をする。さて、  
もう一枚撮っておくか」

もう、許してくれ。羞恥心のあまり内側から爆発しそうだ……………ッ  
そんな言葉は聞き入れられるはずもなく、千冬姉はぱしゃりぱし  
やりと写真を撮り続けるのであった。

### 第13話 訓練のち、お仕置き（後書き）

一夏、爆発しろ。できるだけ酷く（挨拶）

ベッドの上で拘束された一夏の写真 加工 抱き枕  
後は、分かるな？

ともあれ、お待たせいたしました。

ようやく、13話をお届け。簪ちゃんがめっさ喋ってる。キャラじやないのは分かってるけど……簪ちゃんはやべさる事を強いられてるんだ！（イワ クさん）

次回あたりトーナメントに入ります。例によって更新は未定。

では、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3039u/>

---

俺の千冬姉がこんなに可愛いはずが.....あった

2011年12月25日01時41分発行